

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第610集

はつ かん ちとう
八反町遺跡・中畠城跡発掘調査報告書

なか はた じょう
経営体育成基盤整備事業古城2期地区関連遺跡発掘調査

八反町遺跡・中畠城跡発掘調査報告書

2013

2013

岩手県県南広域振興局農政部農村整備室

(公財)岩手県文化振興事業団

序

八反町遺跡・中畠城跡発掘調査報告書

経営体育成基盤整備事業古城2期地区関連遺跡発掘調査

本県には、旧石器時代をはじめとする1万箇所を超す遺跡や貴重な埋蔵文化財が数多く残されています。それらは、地域の風土と歴史を生み出した遺産であり、本県の歴史や文化、伝統を正しく理解するのに欠くことのできない歴史資料です。同時に、それらは、県民のみならず国民的財産であり、将来にわたって大切に保存し、活用を図らなければなりません。

一方、豊かな県土づくりには公共事業や社会资本整備が必要ですが、それらの開発にあたっては、環境との調和はもちろんのこと、地中に埋もれ、その土地とともにある埋蔵文化財保護との調和も求められるところです。

当事業団埋蔵文化財センターでは、設立以来、岩手県教育委員会の指導と調整のもとに、開発事業によって止むを得ず消滅する遺跡の緊急発掘調査を行い、その調査の記録を保存する措置をとってまいりました。

本報告書は、経営体育成基盤整備事業古城2期地区に関連して、平成22年度に発掘調査された八反町遺跡と平成22・23年度に発掘調査された中畠城跡の調査成果をまとめたものです。今回の調査により、八反町遺跡では、12世紀の道路跡や建物跡、井戸、土坑、性格不明遺構などが検出され、平泉藤原氏時代の都市平泉以外の地域が如何なる状況にあったのかを解明する上で貴重な資料を得ることができました。また、中畠城跡では関東地方で発展した「障子堀」と呼ばれる築城技術が採り入れられた16世紀の城館であることが明らかになりました。障子堀を持つ城館が本県で見つかることは殆どなく、極めて珍しい発見といえます。

本書が広く活用され、埋蔵文化財についての関心や理解につながると同時に、その保護や活用、学術研究、教育活動などに役立てられれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、ご理解とご協力をいただきました県南広域振興局農政部農村整備室、奥州市教育委員会、奥州市世界遺産推進室はじめとする関係各位に深く感謝の意を表します。

平成25年3月

公益財團法人 岩手県文化振興事業団
理事長 池田克典

例　　言

1. 本報告書は岩手県奥州市前沢区古城字館八反町地内に所在する八反町遺跡と前沢区古城字水上西88番地ほかに所在する中畠城跡の発掘調査成果を収録したものである。
2. 上記2遺跡の調査は、経営体育成基盤整備事業古城2期地区に伴う緊急発掘調査である。調査は岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課と県南広域振興局農政部農村整備室との協議を経て、財團法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター(当時)が実施した。
なお、費用負担は岩手県教育委員会が岩手県県南広域振興局農政部農村整備室に農家負担分を補助している。
3. 岩手県遺跡台帳に登録される八反町遺跡・中畠城跡の遺跡番号と遺跡略号は次のとおりである。
 - 八反町遺跡：遺跡番号N E 46-0365、遺跡略号：H T C - 10
 - 中畠城跡：遺跡番号N E 46-0332、遺跡略号：N H J - 10・11
4. 発掘調査の期間・調査面積・担当者は次のとおりである。
 - 八反町遺跡 平成22年9月1日～12月2日、3,545m² 杉沢昭太郎・米田 寛
 - 中畠城跡 平成22年10月22日～12月10日 1,540m² 杉沢昭太郎・米田 寛・北田 熊
中村絵美・菅野 横
 - 平成23年4月25日～7月6日 950m² 杉沢昭太郎・巴 亜子
5. 室内整理の期間・担当者は次のとおりである。
 - 八反町遺跡 平成23年3月1日～平成23年3月31日 杉沢昭太郎・米田 寛
 - 中畠城跡 平成23年3月1日～3月31日 北田 熊・菅野 横
 - 平成23年8月22日～9月30日 丸山直美
 - 平成24年1月16日～3月31日 杉沢昭太郎・巴 亜子
6. 野外調査における基準点測量・写真撮影にあたっては次の機関に委託した。
 - 基準点測量：㈱東北プランニング、興國測量設計株式会社
 - 空中写真撮影：東邦航空株式会社
7. 遺物の分析・鑑定にあたっては次の機関に委託した。
 - 樹種同定：花粉分析・種実同定：古代の森研究会
 - 骨同定：㈱バリノ・サーザイ
 - 年代測定：㈱加速器分析研究所
 - 石質鑑定：花崗岩研究会
 - 木製品・金属製品の保存処理：岩手県立博物館
8. 発掘・整理・報告にあたっては次の方々に御指導・ご協力いただいた（順不同・敬称略）。
奥州市埋蔵文化財調査センター、奥州市教育委員会、奥州市世界遺産登録推進室、県南広域振興局農政部農村整備室
9. 本報告書の執筆は、I章 調査に至る経過は、県南広域振興局農政部農村整備室に原稿を依頼した。II～V・VI章は杉沢が執筆した。報告書の編集・校正は杉沢が行った。
10. 本遺跡の調査成果は、先に、「現地公開資料」(平成22年)、「平成22年度発掘調査報告書」(岩文振第588集)、「平成23年度発掘調査報告書」(岩文振第603集)に発表しているが、本書の内容が優先するものである。
11. 本遺跡の調査で得られた一切の資料は、岩手県立埋蔵文化財センターに保管している。

目　　次

I 調査に至る経過	1
II 遺跡の立地と環境	3
1 遺跡の位置と立地	3
2 地理的環境	3
3 歴史的環境と周辺の遺跡	5
III 調査・整理の方法	9
IV 八反町遺跡	20
1 概要	20
2 基本層序	20
3 検出遺構(掘立柱建物跡、竪穴住居跡、竪穴通槽、井戸、土坑、焼土、道路、溝、性格不明遺構)	21
4 出土遺物(楕円・陶器・かわらけ、木製品・金属製品・土師器・須恵器・瓦・織文時代の土器・石器他)	33
V 中畠城跡	69
1 概要(位置など、縄張)	69
2 基本層序	76
3 検出遺構(堀、土坑、カマド、溝、柱穴群、旧石器)	76
4 出土遺物(陶器・かわらけ、木製品・金属製品・土師器・須恵器・瓦・織文時代の土器・石器他)	82
VI 自然科学分析	118
1 放射性炭素年代測定	118
2 花粉分析	122
3 種子・種実同定	130
4 樹種同定	136
5 骨同定	142
VII 調査のまとめ	146
1 八反町遺跡	146
2 中畠城跡	150
報告書抄録	231・232

表 目 次

第1表 周辺遺跡一覧	7	<中畠城跡>	
<八反町遺跡>			
第2表 土坑類観察表	28	第11表 土坑類ほか観察表	79
第3表 溝跡観察表	29-30	第12表 溝跡観察表	80
第4表 柱穴観察表	65	第13表 柱穴観察表	113
第5表 陶磁器観察表	66	第14表 陶磁器観察表	114
第6表 かわらけ観察表	67	第15表 かわらけ観察表	114
第7表 木製品観察表	67	第16表 木製品観察表	115
第8表 金属製品観察表	67	第17表 金属製品観察表	115
第9表 土師器・須恵器観察表	67	第18表 土師器・須恵器観察表	116
第10表 石器観察表	67	第19表 石器観察表	116-117
		第20表 動物・植物遺体観察表	117

図 版 目 次

第1図 岩手県図・遺跡位置図	2	第22図 4~9号土坑	44
第2図 遺跡周辺の地質分類図	3	第23図 10~14号土坑	45
第3図 遺跡周辺の地形分類図	4	第24図 15~18号土坑、1号焼土、3号井戸跡	46
第4図 周辺の遺跡分布図	6	第25図 1号道路跡	47
第5図 遺跡地形図と調査区①②	12-13	第26図 1~6・13号溝跡①	48
<八反町遺跡>		第27図 1~6・13号溝跡②	49
第6図 調査区(A・J区)	14	第28図 7~9号溝跡	50
第7図 道構配置図1	15	第29図 10~11号溝跡	51
第8図 道構配置図2(A・B区)	16	第30図 14~19号溝跡	52
第9図 道構配置図3(C・J区)	17	第31図 21~24号溝跡	53
第10図 道構配置図4(D・E・F区)	18	第32図 25~28号溝跡	54
第11図 道構配置図5(G・H・I区)	19	第33図 12~20・29号溝跡	55
第12図 基土層	20	第34図 S X 1・S X 2①	56
第13図 1号掘立柱建物跡	35	第35図 S X 1・S X 2②	57
第14図 2号掘立柱建物跡	36	第36図 1・2号井戸跡、S X 3	58
第15図 3号掘立柱建物跡	37	第37図 河川跡	59
第16図 4号掘立柱建物跡	38	第38図 国產陶器(涅美・常滑)	60
第17図 6~8号掘立柱建物跡	39	第39図 国産陶器(常滑)	61
第18図 9・10号掘立柱建物跡	40	第40図 かわらけ・陶磁器ほか	62
第19図 5号掘立柱建物跡、1~3号柱穴跡	41	第41図 木製品	63
第20図 1・2号堅穴住居跡	42	第42図 土師器・須恵器	64
第21図 3号堅穴造構、1~3号土坑	43		

<中畠城跡>

第43図 中畠城跡地形図	68	第63図 自然地形、記跡	96
第44図 中畠古絵図	70	第64図 柱穴群(C区)	97
第45図 中畠城全体図	71	第65図 柱穴群(A・B・F区)	98
第46図 道構配置図1	72	第66図 旧石器出土地点	99
第47図 道構配置図2	73	第67図 陶磁器1	100
第48図 道構配置図3	74	第68図 陶磁器2、かわらけ	101
第49図 道構配置図4	75	第69図 木製品1	102
第50図 基本土層	76	第70図 木製品2	103
第51図 1号堀跡a~d(C区)	84	第71図 木製品3	104
第52図 1号堀跡断面1	85	第72図 木製品4、瓦、繩文土器	105
第53図 1号堀跡断面2	86	第73図 石器(縄文)、鉄製品	106
第54図 1号堀跡断面3、a~d(A区)	87	第74図 土師器・須恵器1	107
第55図 2号堀跡(F区)、3号堀跡	88	第75図 須恵器2	108
第56図 2号堀跡(G区)	89	第76図 須恵器3	109
第57図 4号堀跡、F区トレンチ	90	第77図 石器1	110
第58図 1~6号土坑、カマド状遺構	91	第78図 石器2	111
第59図 1~4号溝跡	92	第79図 石器3	112
第60図 5~7号溝跡	93	第80図 類例(前沢区)	147
第61図 8~10号溝跡	94	第81図 12世紀の奥州市前沢区古城	149
第62図 11~13号溝跡	95	第82図 中世の奥州市前沢区	154

写真図版目次

<八反町遺跡>

写真図版1 遺跡遠景1	155	写真図版20 溝路2	174
写真図版2 遺跡遠景2	156	写真図版21 溝路3	175
写真図版3 遺跡遠景3	157	写真図版22 溝路4	176
写真図版4 遺跡遠景4	158	写真図版24 溝路6	178
写真図版5 遺跡遠景5、現況	159	写真図版25 溝路7	179
写真図版6 1号掘立柱建物跡1	160	写真図版26 溝路8	180
写真図版7 1号掘立柱建物跡2	161	写真図版27 溝路9	181
写真図版8 4号掘立柱建物跡	162	写真図版28 性格不明遺構1	182
写真図版9 2・3・9号掘立柱建物跡	163	写真図版29 性格不明遺構2	183
写真図版10 5~8号掘立柱建物跡ほか	164	写真図版30 性格不明遺構3	184
写真図版11 9号掘立柱建物跡の柱穴ほか	165	写真図版31 調査区近景1	185
写真図版12 墓穴住居跡、3号堅穴遺構1	166	写真図版32 調査区近景2	186
写真図版13 3号堅穴遺構2	167	写真図版33 現地公開はか	187
写真図版14 井戸跡ほか	168	写真図版34 出土遺物1	188
写真図版15 土坑1	169	写真図版35 出土遺物2	189
写真図版16 土坑2	170	写真図版36 出土遺物3	190
写真図版17 土坑3	171	写真図版37 出土遺物4	191
写真図版18 土坑4	172	写真図版38 出土遺物5	192
写真図版19 燃土ほか、溝跡1	173		

<中畠城跡>		
写真図版58	外堀（1号堀跡）出土遺物	212
写真図版39	中畠城跡全景	193
写真図版40	遺跡遠景1	194
写真図版41	遺跡遠景2、近景1	195
写真図版42	遺跡近景2	196
写真図版43	遺跡北西部（A区）	197
写真図版44	遺跡北西（B区）、北東（C区）	198
写真図版45	遺跡北（E区）、西（F区）	199
写真図版46	外堀（1号堀跡c、d）	200
写真図版47	外堀（1号堀跡a、b）	201
写真図版48	内堀（2号堀跡）	202
写真図版49	内堀（2号堀跡）西側	203
写真図版50	内堀（2号堀跡）東側	204
写真図版51	外堀の調査	205
写真図版52	外堀（1号堀跡）	206
写真図版53	外堀（1号堀跡）東側	207
写真図版54	外堀（1号堀跡）中央	208
写真図版55	外堀（1号堀跡）構造	209
写真図版56	外堀（1号堀跡）西側	210
写真図版57	外堀（1号堀跡）断面他	211
写真図版58	土坑	213
写真図版59	溝路1	214
写真図版60	溝路2	215
写真図版61	溝路3	216
写真図版62	溝路4ほか	217
写真図版63	溝路5、カマド状遺構、旧石器集中区	218
写真図版64	柱穴群、調査風景	219
写真図版65	陶磁器1	220
写真図版66	陶磁器2、かわらけ	221
写真図版67	木製品1	222
写真図版68	木製品2	223
写真図版69	木製品3	224
写真図版70	木製品4、金属製品	225
写真図版71	瓦、土師器、須恵器1	226
写真図版72	須恵器2	227
写真図版73	縄文土器・石器、旧石器1	228
写真図版74	旧石器2、骨1	229
写真図版75	骨2、種実	230

I 調査に至る経過

中畠城跡及び八反町遺跡は、「経営体育成基盤整備事業古城2期地区」のは場整備に伴い、その事業区域内に存在することから発掘調査を実施することとなったものである。

本地区は奥州市前沢区中心部より北東部に位置し、現況は、小区画・不整形な水田で、かつ幅員狭小な農道となっていることから、作業効率が悪く、また用排水兼用の土側溝水路のため、用水不足や排水不良となっており、維持管理に支障を来しているところである。

このため、本事業地区においては、大区画は場整備を実施することで、農作業の効率化、生産コストの削減、生産性の向上等を図り、農地集積による安定した経営体および担手農家の育成を目的として、事業着手したものである。

当事業の施工に係る埋蔵文化財の取り扱いについては、県南広域振興局農政部農村整備室から平成21年10月13日付け県南広農整第136-3号及び平成22年2月19日付け県南広農整第136-16号「経営体育成基盤整備事業古城2期地区における埋蔵文化財試掘調査について(依頼)」により岩手県教育委員会に対して試掘調査の依頼を行った。

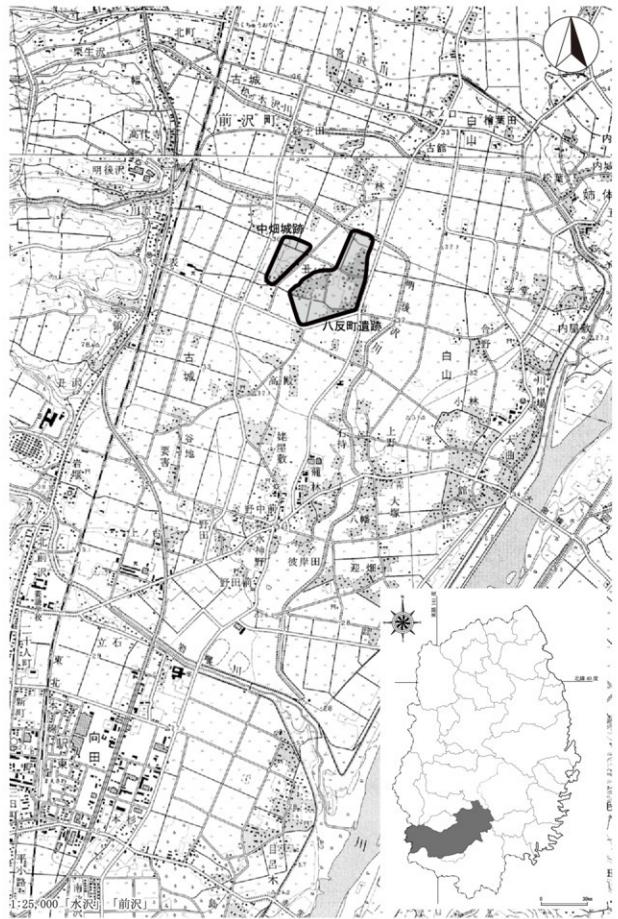
依頼を受けた岩手県教育委員会は、平成21年11月24日から26日及び平成21年12月3日、平成22年2月26日の計5日間に渡って試掘調査を実施し、工事に着手するには当該遺跡の発掘調査が必要となる旨を、平成22年1月12日付け教生第1239号及び平成22年1月29日付け教生第1314号、平成22年3月8日付け教生第1533号「埋蔵文化財の試掘調査について(回答)」により回答があった。

この回答を受けて当農村整備室は、平成22年2月19日付け県南広農整第136-12号、同日付け県南広農整第136-13号、同日付け県南広農整第136-14号「埋蔵文化財試掘調査結果による工法協議について」により、盛土工法による保存箇所と、発掘調査による記録保存箇所について協議を行った。

その結果を踏まえて当農村整備室は、岩手県教育委員会の調整を受けて、平成22年4月1日付けで財团法人岩手県文化振興事業団との間で委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。

なお、中畠城跡については、平成23年度まで継続調査を行うことになり、平成23年4月1日付けで同事業団と再度委託契約を締結し、発掘調査を実施した。

(岩手県南広域振興局農政部農村整備室)



第1図 岩手県図・遺跡位置図

II 遺跡の立地と環境

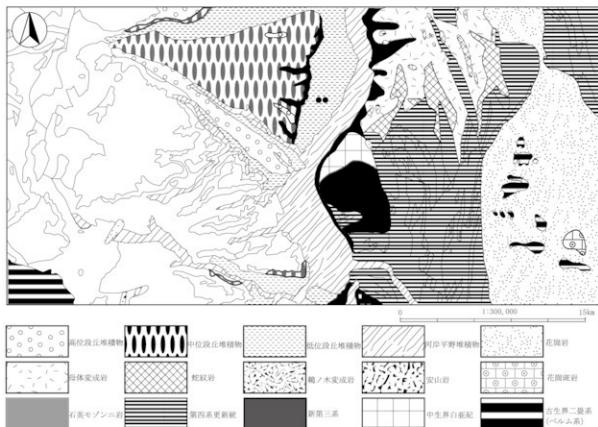
1 遺跡の位置と立地（第1図）

八反町遺跡、中畠城跡のある奥州市前沢区は岩手県南の内陸部、北上盆地の南側に位置する。前沢区はもともと「前沢町」であったが、平成18年に周辺の水沢市、江刺市、胆沢町、衣川村と合併して「奥州市前沢区」となった。両遺跡とともに奥州市前沢区古城に所在している。八反町遺跡は北緯39度4分25秒、東経141度9分20秒周辺に、中畠城跡は北緯39度4分15秒、東経141度9分30秒周辺に位置している。標高は八反町遺跡が31~32m、中畠城跡が32mほどである。いずれも現況は水田や畑となっている。遺跡周辺は古くから米作を中心とした農業を基幹産業とする地域だが、米作のみならず全国的ブランドとなった「前沢牛」の飼育を行っている農家も多く見られる。

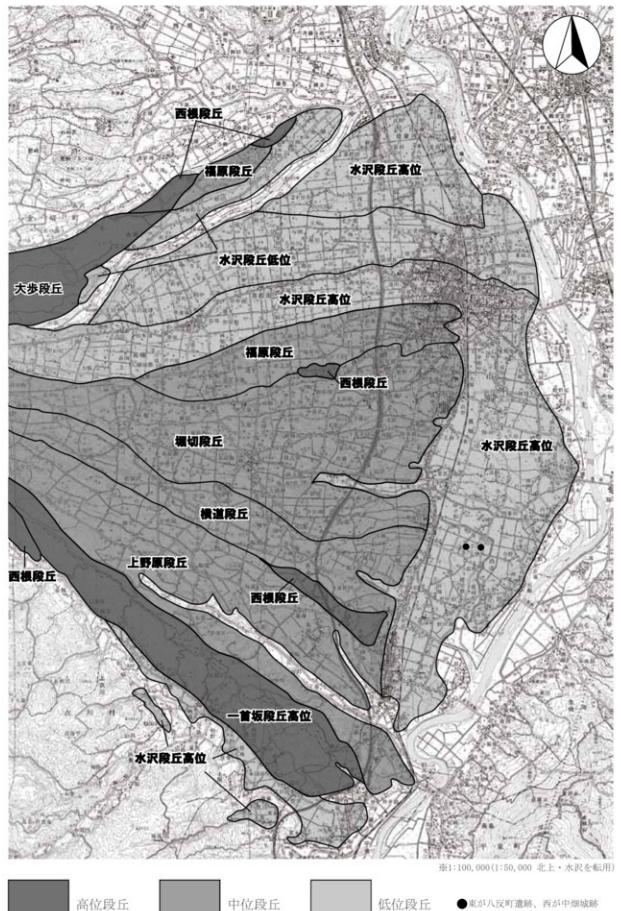
2 地理的環境（第2・3図）

ここでは、両遺跡がある奥州市前沢区及びその周辺の地理的環境について述べる。

北上川水系の視点から見ると、奥州市前沢区は北上川中流域の南端に位置する。前沢区は北上側を挟んだ東西で地形が異なる。北上川の東側は、河岸低地とその東側の山や丘が連なる丘陵地帯から成り、それらの丘陵地帯は第三紀層に相当する北上山系である。河岸低地から丘陵地帯へ急激に標高が高くなる地形になっている。また西側には河岸低地と胆沢扇状地が広がっている。胆沢扇状地は奥羽山系の底部、胆沢区若柳の市野々を扇頂部とし、東に向かって段丘面が広がっている。それらの段丘



第2図 遺跡周辺の地質分類図



第3図 遺跡周辺の地形分類図

面は高位から一首坂段丘、西根段丘、胆沢段丘群に分類され、さらに胆沢段丘群は高位から上野原段丘、横道段丘、堀切段丘に細分される。いずれの段丘も高位から順に向かって分布し、胆沢段丘の北端部（堀切段丘の北端部）には胆沢川が流れている。胆沢川の浸食作用が北に向かって進んだ地形である。それらの高位段丘の北側と東側には低位段丘である水沢段丘が広がり、広範な洪積層の平坦地が展開する。さらに東側の北上川に近い部分には、堆積作用による沖積層の河岸低地が展開する。ただし水沢段丘と河岸低地はほぼ平坦に続くので、地形的に厳密な境界が見られるわけではない。また白鳥川周辺には、河川の浸食を受けた河岸低地が一首坂段丘と上野原段丘に挟まれるように分布している。白鳥川周辺も含め前沢区の北上川西側は水沢段丘、河岸低地が広がり、両遺跡とともに水沢段丘に立地している。

地質的には北上川西側の河岸低地を成す沖積層は、北上川の堆積作用によってできた腐食壤土または砂質壤土で成り立ち、八反町、中畑跡遺跡はこの沖積層上に立地する。なお胆沢扇状地を成す洪積層は、焼石岳や栗駒山付近から供給された火山灰の堆積土壤で成り立っており、河岸低地と地質が異なる。

3 歴史的環境と周辺の遺跡（第4図及び第1表）

八反町遺跡、中畑跡のある前沢区及びその近辺の平野部には、確認されたものでは縄文時代前期から始まり縄文時代全般、古代、中世そして現代に至る長い期間、人間が活動していた痕跡が見られる。

胆沢区との境にある高日向遺跡では、縄文時代前期初等～前業期のものと思われる土器が出土している。また縄文時代中期以降の遺跡としては、中期の土器が出土した小林繁長遺跡、後期の土器が出土した川岸場Ⅰ遺跡、縄文時代晚期～弥生時代の遺物が出土した川岸場Ⅰ及びⅡ遺跡があげられる。他に本遺跡近辺で縄文時代晚期の土器が出土した遺跡として、小林繁長、八幡、青木の各遺跡があげられる。いずれにしても、縄文時代後期～晩期にかけてこの一帯にある程度の規模の集落が存在した可能性がある。

本遺跡の周辺は平安時代の道路が多く確認されている。川岸場Ⅱ遺跡第2次調査や道上遺跡第1次調査では、平安時代の堅穴住居跡や土器類が出土している。縄釉陶器などが出土した水ノ口、瓦などが出土した明治沢、目呂本沢、土器類、須恵器が出土した中林B、大桜の各遺跡は平安時代の集落であったと思われる。また特筆すべき古代の遺物として、平成18年度に行われた道上遺跡第3次調査では平安時代のものと思われる墨書き木質遺物（木杭）が出土した。

平安時代以降の遺跡としては、北上川が湾曲する部分の川岸にある白鳥館が知られている。平安時代末期の豪族である安部朝時の子、白鳥八郎の城として作られ、その後も室町時代まで城が存在したと言われている。近年の発掘調査により前沢区の古城・白山地区では12世紀の遺跡が多く見つかっている。かわらけが多量に出土した白山上野遺跡、規模の大きな掘立柱建物跡が検出された明後沢遺跡、密教の法具である六器が出土した道上遺跡第2次調査などがあげられる。

平泉藤原氏が滅亡し、岩手県南部から宮城県北部地域を拝領したのは葛西氏であった。その中で伊沢郡を実質的に支配していたのは柏山館・大林城（金ヶ崎城）を居城とする柏山氏であったという。前沢区ではこれまでに13箇所の中世城館が知られているが、発掘調査が行われたのは白鳥館遺跡、西館跡、明後沢遺跡など多くはない。「風土記御用書」によると、中畑城（城主、櫻山彦三郎）、中畑城（城主、櫻山彦三郎）、「仙台領古城書上」には中畑城（城主、櫻山彦三郎）、前沢城（城主、

櫻山平四郎)、九郎館(城主、櫻山九郎)、などの記載がある。この他に折居館(城主、柏山明好の四男折居宮内久)、前沢城は櫻山(柏山)氏の重臣である三田氏が永く居城としていたと伝えるものや、六日入城に葛西清重の子定重の居館と伝えるものがある。

葛西・柏山・三田氏を中心とした当地方の動向については主なものについて以下の年表に整理した。

年代	事象1	事象2
鎌倉初	三田守監を三千石にて前沢に封じ、ゆくゆくは中畠村を合わせて四千石とする	
16c初	安土呂井城主(水沢)の岩渕氏の所領小山郷(前沢古城含むか)、中野郷(真城)、安土呂井郷	
1530頃		上麻生城 平岡久、姑体村居城 大内庄三郎水沢城主 銀谷次郎左衛門
1530頃	三田主計頭かずえのかみ重明	
1543	三田主計頭に五千石	
1571	三田照部少輔に五千石	
天正元年-	1573 三田氏は葛西氏より五千石(桃生都寺崎村)、金ヶ崎へ南部氏が侵攻	
天正3	1575 この頃母体に佐藤豊後守清信(大和田氏の臣)	
天正7	1579 吾呂木村が登場、他国との恩賜地として	
天正9	1581 柏山(今)の内附、明吉の子の内粉、続明国と二男明宗	三男小山九郎、四男折居明國
天正10	1582 南部氏九郎政実が金ヶ崎城を落す。葛西勢は時城主寺崎氏を罷大將に金ヶ崎を認めるが敗れる。	
天正11	1583 鬼舞の鈴木兄弟内附し、二男良作が六日入村に居住(後の大室節本家へ)	
天正15	1587 本吉(氣仙)の争乱に三田氏は50騎を引き且して駒を進めた	五千石道 今ノ領主であったらう
天正15	1587 気仙郡田舎田と本吉郡の元吉氏の争乱が再燃、柏山宗邦が病弱なため三田氏に降伏	六日入村鈴木氏も気仙郡田舎で活躍、赤生津安成氏も活躍
天正15	1587 騒乱で中畠村住の岩渕三郎左衛門が引領、三千石加贈	
天正16	1588 三田照部少輔右衛門義広は主家柏山氏に改められ成ぶ(前沢城他に領土を広げていた(応永8年より古))	
天正18	1590 奥州仕置で柏山氏没落	

中世、近世の遺跡では、城館や屋敷があったとされるところが多く確認されている。特に本遺跡の東約1kmに位置する川岸塙II遺跡には、天正16年(1588年)前後に「大室屋敷」と言われた鈴木家の環濠屋敷があった。寛永19年(1642年)には、屋敷の南に仙台藩の御本石御蔵が置かれ、現前沢区内の各村の年貢が収納された。屋敷南側には川濁があり、石巻と盛岡を運行する船舶が停泊したという。

III 調査・整理の方法

野外調査

調査区の設定と遺構の命名

調査区の地区割にあたっては、それぞれの調査区が分かれているためそれごとに地区割りをした。平面直角座標(第X系:世界測地系)に合わせた基準点・補点をもとにして、遺構や地形測量を行ったが、グリッド設定はしていない。設定した基準点・補点の座標は世界測地系であり、座標値は以下のとおりである。

<八反町遺跡>

基準点1	X = -102161.656	Y = 27331.358	H = 32.824m
基準点2	X = -102205.707	Y = 27320.731	H = 34.078m
補 点1	X = -102231.088	Y = 27311.080	H = 33.208m
補 点2	X = -102279.244	Y = 27297.270	H = 33.266m
K 1	X = -101922.452	Y = 27559.230	H = 33.081m
K 2	X = -101888.650	Y = 27468.618	H = 32.567m
A	X = -102013.784	Y = 27523.863	H = 31.730m
B	X = -102073.978	Y = 27500.222	H = 32.042m
C	X = -102041.176	Y = 27467.050	H = 32.765m

<中畠城跡>

中畠城跡に関してはその数が多いため、第46図を参照願いたい。

この基準点と補点を基準として調査区および検出遺構や出土遺物の記録をとった。調査区は遺跡内に点在するようあるため、八反町遺跡ではA～J区と、中畠城跡ではA～G区と呼ぶこととし、遺構出土遺物に関してはこの調査区ごとに取り上げた。

遺構の名称

検出された遺構の名称は、遺構の種類に応じて検出順にそれぞれ番号を付けて、1号掘立柱建物跡・2号掘立柱建物跡、1号井戸跡・2号井戸跡…のように命名した。精査の過程や終了後に検討した結果、遺構ではないと判断したもののや、遺構の種類を変更した番号については、混乱を防止するために欠番とした。よって掲載の無い遺構名は遺構ではなかったものである。本調査では性格不明遺構に関してのみ遺構略号としてS Xを使用した。

試掘・相掘と遺構検出

当初、幅1～2m、長さ3～4mのトレンチを地形に応じて任意の場所に入れ、土層の堆積状況を把握した。その試掘にもついて表土削削を行った。

八反町遺跡では各調査区の表土の厚さには大きな差があり、A～C区では1m前後の表土があった。一方、D～J区は水田であったため、20～30cmと浅かった。表土除去は重機と人力によりを行い、可能な限り遺構出土遺物を探査することに努めている。遺構検出は人力で行った。遺構の検出は、所謂地表面で行った。中畠城跡では調査区の現況が水田のところが多かった。水田の土を除去(重機で)

すると地山となる場所が殆どで遺構検出も地山面で行った。C区とG区は堀があることが初めから想定されていたため、あまり重機で下げすぎないようにして、可能な限り人力で掘り下げて遺物を採取することに努めた。

精査

検出された遺構は、原則として堅穴住居跡や性格不明遺構など大形の遺構の場合は4分法、土坑類は2分法で行った。精査の各段階において必要図面の作成や写真撮影を適宜行った。

遺構内出土の遺物は、覆土で可能な限り分層して取り上げ、床面出土の遺物は写真撮影・図面作成後に取り上げた。遺構外出土の遺物については、原則として調査区ごとに出土した層位を記して取り上げ、適宜、写真撮影・図面作成を行った。

また、現場での記録作成では、上記の図面・写真以外にField Cardを使用して、遺跡の調査経過や遺構の精査の進捗状況を記録している。

実測・写真撮影

平面実測は電子平板を使用して行った。各遺構の測点はかつての造り方実測と同程度である。レベルは、基準高をもとに絶対高で記録される。断面実測については、任意の高さを基に設定した水系を基準として計測を行い、手書き実測図とした。

写真撮影は、モノクローム6×9cm判1台、1000万画素以上の一眼レフデジタルカメラ1台を使用して調査員が行った。撮影に関しては、整理時の混乱を避けるために撮影カードを使用した。実際の撮影は各種遺構の覆土堆積状況、掘り上げ状況、遺物の出土状況などについて行っている。調査終了段階でセスナ飛行機による航空写真撮影を行っている。

土層記録

断面図作成後に土層記録を行った。観察項目は、色調・土性・締まり・混入物などである。基本的には『新版標準土色帳』(1990年版、小山正忠・竹原秀雄編・著)をもとにに行っているが、締まりは、調査員の主観で判断した。個々の遺構の覆土堆積状況は、自然堆積か人為堆積かの判断と、埋没している土の起源を把握することを課題とした。層名は調査区内に見られる基本的な土層をローマ数字(I・II・III)・、遺構内覆土をアラビア数字(1・2・3)で表した。層位の細分の必要が生じた場合は、小文字のアルファベットを付し、I a・I b・I c・…などと表わした。

土壤水洗

八反町遺跡の12世紀の堅穴遺構・性格不明遺構、中畠城跡の16世紀の堀跡では、動植物遺存体が存在する可能性を考慮し、各遺構の覆土を採取し、水洗い・天日での乾燥・篩(5mm・3mm・1mm)による仕分けを行った。

普及活動

野外調査での成果は地元住民を対象に現地説明会(現地公開)を企画して、遺跡の内容を説明した。また県民を対象とした当センターの事業である「遺跡報告会」(於県民会館)でも両遺跡の調査成果を報告した。

<八反町遺跡> 現地公開 平成22年11月25日

第13回遺跡報告会 平成23年2月5日

<中畠城跡> 現地説明会 平成23年6月11日

第14回遺跡報告会 平成24年2月18日

室内整理

八反町遺跡の室内整理の期間は、平成23年3月1日～平成23年3月31日である。

中畠城跡の室内整理期間は平成23年3月1日～3月31日、8月22日～9月30日、平成24年1月16日～3月31日である。

期間内で、得られた遺物・実測図・写真などの整理を行った。野外調査で得られた遺物・実測図・写真などの各種資料は室内整理の段階で次のように処理し、整理を行い、報告書作成とともに資料化を行った。

遺構に関わる記録

実測図は遺構ごとに分類し、図面は点検のうえ、デジタルトレースを行った。電子平板で測量したデータについては、現場で入手した情報をそのまま保存することとし、編集用データは、手実測で記録したその他の実測図と合成し、遺構図版を作成している。

野外調査で撮影した写真については遺構ごとに分類し整理した。その中から代表的な写真を選び遺構写真版を作成し報告書に掲載している。その際に廃土の山が遺構を隠していた写真があったため加工して廃土を消したもののが1枚ある。

撮影されたフィルムはネガアルバムに密着写真と一緒ににして収納した。

遺物の整理

遺物は野外及び当センター整理室で水洗した後、細部は別として、出土地点・層位等を登録した遺物番号を各破片に注記した。その後、出土地点・層位ごとに仕分けを行い、遺構ごと、遺構外出土の遺物は調査区ごとに接合・復元作業を行った。遺物の実測図は実大とし、トレースは遺物の状況に応じて実大あるいは縮小して図化した。石材・炭化材・炭化種実・放射性炭素年代測定などの分析は外部の専門家に委託した。

遺物の選別・図化的基準

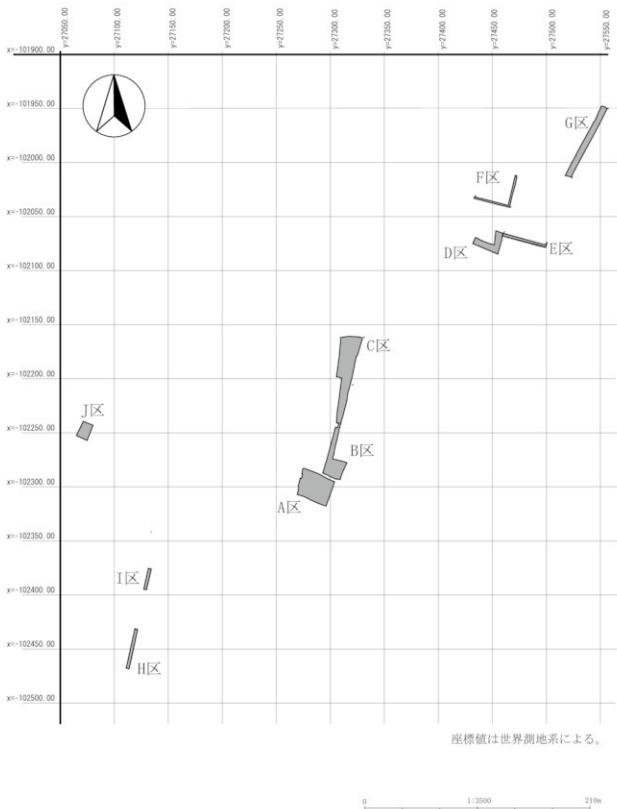
遺物の整理・報告にあたっての作業・記録作成は以下の方針で進めた。報告書に掲載された遺物は出土した遺物のすべてではなく、整理のなかで設定した基準を基に選別した一部の資料である。各遺構に伴う遺物を優先し、遺構外出土であっても本遺跡を代表するものについては掲載した。また、各種の遺物については破片数、重量の計測を行ない台帳作成している。



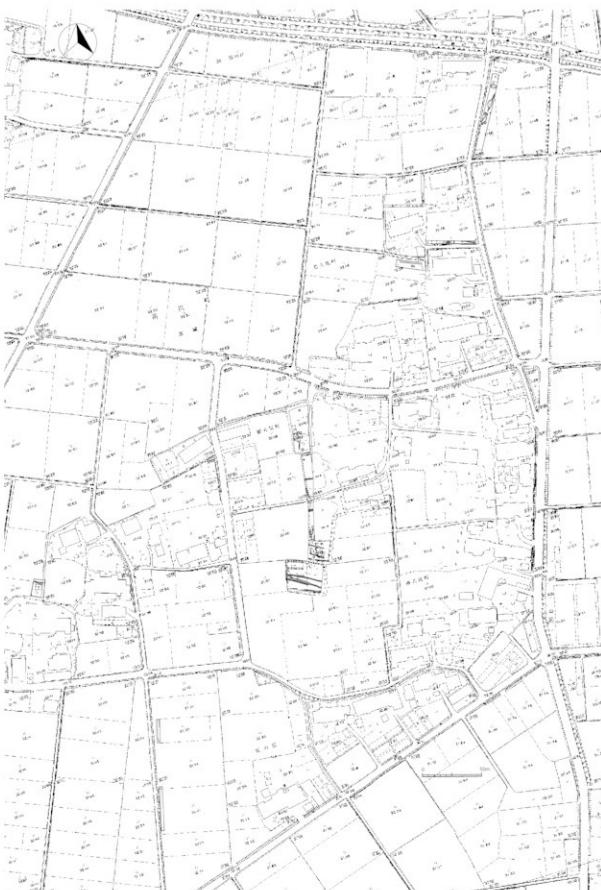
第5図 遺跡地形図と調査区①



第5図 遺跡地形図と調査区②

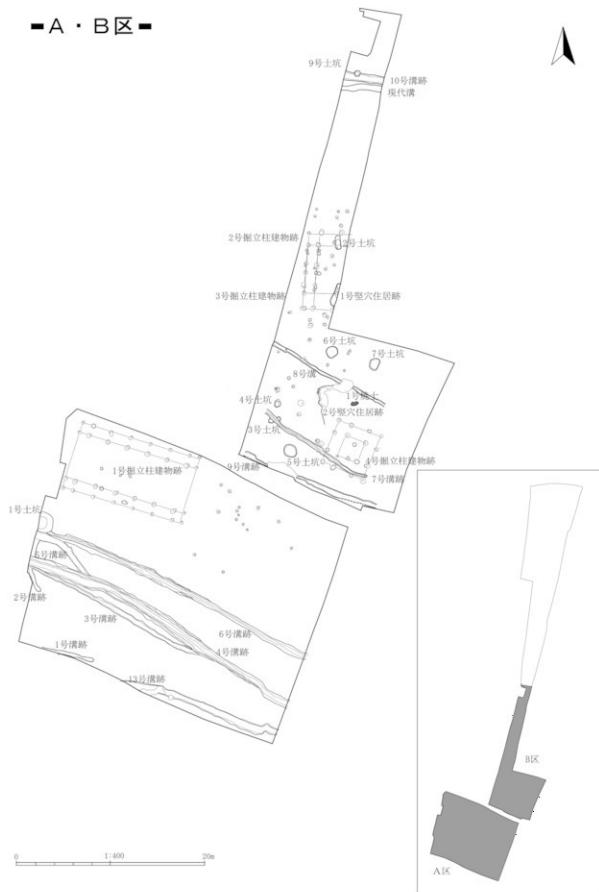


第6図 調査区(A-J地区)



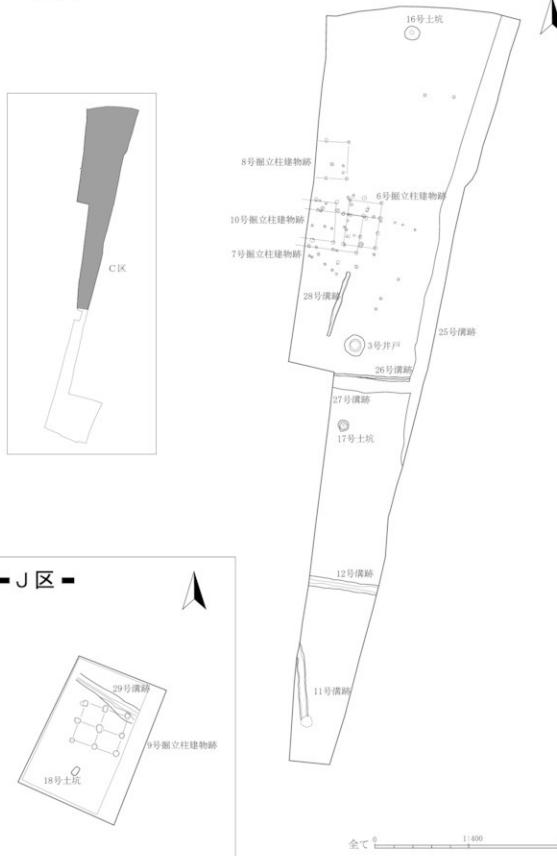
第7図 造構配図1

- A + B☒ -



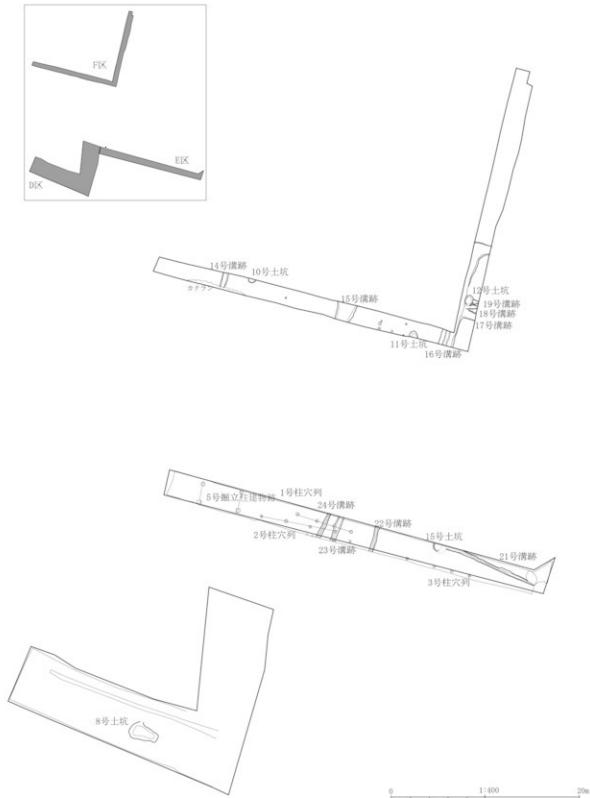
第8図 遺構配置図2(A・B区)

- C 囗 -



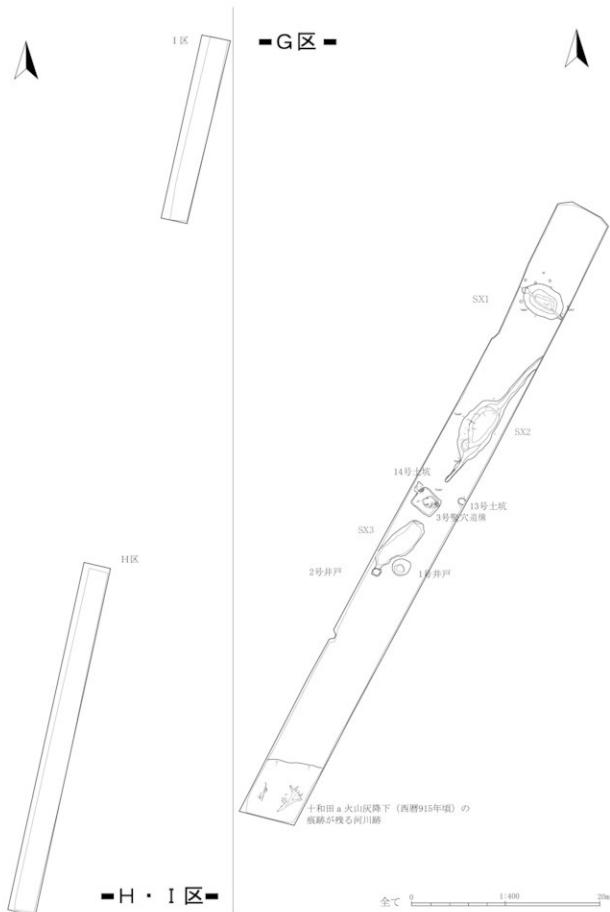
第9図 遺構配置図3(C・J区)

-D・E・F区-



第10図 遺構配置図4(D・E・F区)

-G区-



第11図 遺構配置図5(G・H・I区)

IV 八反町遺跡

1 概 要

遺跡は奥州市前沢区古城字南八反町・字北八反町・館八反町・向田地区にある。遺跡の範囲は東西500m×南北550mと広く、現況は水田が主であることは畑や宅地となっている。調査区はA～J区に分かれしており、主に遺跡中央（A～C区）、遺跡の北～北端（D～G区）、遺跡の南端（H・I・J区）、遺跡の西側（J区）に分散している。

遺構は12世紀後半の道路跡1、掘立柱建物跡5棟、竪穴遺構1棟、井戸状遺構2基、性格不明遺構3基、平安時代の堅穴住居跡2棟、河川跡1箇所。その他の時期や時期不明の遺構としては掘立柱建物跡4棟、柱穴列3基、溝27条、土坑1基、井戸状遺構1基が検出された。

幅約4.5mある12世紀後半の道路跡が北西～東南方向に延びており、これに沿うように掘立柱建物跡が4棟見つかっている。さらに北へ400m程離れたところからは井戸状遺構や性格不明遺構（粘土を探取した跡か）が検出された。11世紀や13世紀の遺構や遺物ではなく、12世紀になって発展した集落と考えられる。

2 基 本 層 序

遺跡の層序は各調査区により異なる。A～C区は昭和初期に周辺の開田整地により生じた残土を盛り上げており、周辺より1m以上高い地形を呈していた。この厚い盛土により旧表土が耕作されることはなく、遺構の残りも良好であった。D～J区は水田・休耕田・畑地であり、基本的に耕作の影響が遺構表面にまで及んでいる。

I層 暗褐色土 盛土・現在の耕作土を一括。層厚10～100cm。

II a層 黒褐色土 園層整備前の旧表土でA～C区にのみ残っている。層厚0～5cm

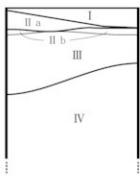
II b層 暗褐色土 Ⅲ層とⅡ a層の漸移層。層厚0～5cm。

III層 黄褐色土 地山。層厚10～100cm。地点によっては粘土層を形成している。

この粘土層は遺跡北側で特に発達しているようで30～50cmの厚さを持つところもある。

薄い地点では更に下位の砂礫層（IV層）が確認される。

IV層 暗褐色砂礫 層厚0～100cm。部分的に確認される。



第12図 基本土層

3 検 出 遺 構

(1) 掘立柱建物跡・柱列

A区から1棟、B区から3棟、C区から3棟、E区から1棟、J区から1棟の合計9棟の掘立柱建物跡が検出されている。1～4、9号掘立柱建物跡が12世紀の可能性が高い遺構、その他は時期不明である。本稿では1尺を303mmにて計算している。また遺構配置図には掘立柱建物跡にならなかつた柱穴についても、検出したすべてを掲載している。

1号掘立柱建物跡（第13図、写真図版6・7）

【位置】 遺跡のほぼ中央にあたる、A区の北西端部に位置する。1号道路跡からは最短で4.8mあり、本遺構の長軸方向と道路跡の延びる方向はよく似ている。

【重複関係】 他遺構との重複が全くないため、平面形式についてはほぼ確実なものである。

【平面形式】 東西棟の掘立柱建物である。桁行きは総長14,756.1mm(48.7尺)、梁行きの総長は7,150.8mm(23.6尺)である。桁行き5間、梁行き2間の身舎の四面に幅の狭い庇が取り付く形態と考えている。西側調査区外に遺構が延びる可能性は殆どない。面積は約90m² (27坪) と推定される。

【建物方位】 N-73° -W

【柱穴】 身舎に使われている柱の柱穴は大きく深いのに対し、庇部分の柱穴は小さくやや浅いもののが含まれる。明瞭な抜き取り痕跡を有するものはなかった。柱痕跡を検出できる柱穴もあり、上屋柱で22～28cm、庇に使われている柱で15～21cmの柱が用いられていたようである。

【柱間寸法】 桁行き方向は6.6～7.8尺と一定ではないが7.2尺で概ね割り切れるようである。桁行きの柱穴はほぼ真っ直ぐに柱穴が並んでいるものの、南西隅では並びが悪い。梁行きは柱穴2個により16.5尺であるから、これを半分にして梁行きを2間としたのであろう。梁行き中心にあるはずの柱穴は注意して探したが見つからなかった。よって他よりも極端に浅い柱穴であったか、地表面で立ちあがるような構造のものであったと解釈したい。桁行き方向に付く庇の出は3.5～3.8尺、柱間寸法は身舎にはほぼ対応しているようであり、真っ直ぐには並ばない。梁行き方向に付く庇の出は3.3～3.8尺で身舎と同様に中心に来る部分の柱穴は精査したが見つからなかった。庇の四隅は同じ寸法とはならないようである。この他、本遺構に伴うかどうかわからない柱穴が5個あるが、これも含めて掲載することとした。

【出土遺物】 遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】 1号道路跡と関係が深い遺構と考えられること、近世の遺物は付近からは出土しなかったことなどから、12世紀後半の遺構と見るのが最も妥当である。建物は柱配置がやや整わないものの平面形式や規模は本県の中では大きな方の部類に入る。よって、当地方の有力者の家臣クラスの建物と考えられる。

2号掘立柱建物跡（第14図、写真図版9）

【位置】 遺跡ほぼ中央のB区に位置する。

【重複関係】 3号掘立柱建物跡と重複するが本遺構のほうが新しい。

【平面形式】 南北棟とみられる掘立柱建物であるが、東側は調査区外へ続いている。桁行き6,878mm(22.7尺)、梁行きは東側が調査区外にたっており3,333mm(11.0尺)までが確認できている。身舎と二面の庇からなる構造であるならば3間二面の建物となる可能性が高く、そうした場合は床面積が

約45.8m² (13.9坪) となる。全体ではほぼ正方形に近い建物になりそうである。

【建物方位】 N - 5° - E

【柱穴】 身舎と庇で柱穴には大きな違いはなく、柱穴底面の規模をみると18cm前後の柱が收まるよう位に掘られていたと推測される。

【柱間寸法】 身舎部分の桁行きは7.2尺、7.4尺、7.5尺と統一感がない。庇部分の桁行きも同様で7.3尺、8.1尺と等間隔とはならない。北側の梁行きは身舎7.2尺と庇部分は3.8尺で11尺となり、南側の梁行きは7.2尺と庇部分は3.8尺で11尺となりそうである。桁行きに関しては総長を22.2尺か22.5尺とし、それを3分割して柱を配置したものと推察される（この場合は1間7.4尺か7.5尺となる）。このことから梁行き総長22.1尺（或いは22.7尺）、桁行き総長21尺となり、桁行きが若干長い建物（ほぼ正方形となる建物）が想定される。

【出土遺物】 遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】 1号道路跡、1・4号掘立柱建物跡との配置関係は互いに同じ時期に存在しても矛盾しないことから、広く12世紀代と捉えたい。建物の性格については3号掘立柱建物跡とともにほぼ建物の軸線が南北方向に揃えていることもあり、宗教関連施設か1号掘立柱建物跡のような住居であろう。

3号掘立柱建物跡（第15図、写真図版9）

【位置】 遺跡のはば中央にあたるB区に位置する。

【重複関係】 2号掘立柱建物跡と重複するが本遺構のほうが古い。

【平面形式】 南北棟なのか東西棟になるのか判然としない掘立柱建物である。桁行き6,333mm (20.9尺)、梁行きは東側が調査区外にたっており3,333mm (11.0尺) までが確認できている。身舎と二面の庇からなる構造であるならば3間二面の建物となる可能性が高く、そうした場合は床面積が約42.2m² (12.8坪) となる。そして身舎だけをみれば梁行きのほうが若干長い建物となり、全体ではほぼ正方形に近い建物になりそうである。

【建物方位】 N - 5° - E

【柱穴】 P47・48・114が他よりも大きな柱穴となった。梁行きの中心にくる部分（P47・114）に大きい柱を使用していたのかもしれない。他の柱穴には大きな違いはなく、18cm前後の柱が收まるように掘られていたと推測される。P48・54・55は柱を抜き取った痕跡がある。

【柱間寸法】 身舎部分の桁行きは6.3尺、6.8尺、7.2尺と統一感がない。庇部分の桁行きも同様で6.6尺、7.0尺、7.3尺と等間隔とはならない。北側の梁行きは身舎7.0尺と庇部分は4.0尺で11尺となり、南側の梁行きは7.3尺と庇部分は3.7尺で11尺となりそうである。桁行きに関しては総長を21尺としてそれを3分割して柱を配置したものと推察される（この場合は1間7.0尺となる）。このことから梁行き総長22尺、桁行き総長21尺となり、梁行きのほうが若干長い建物（ほぼ正方形となる建物）が想定される。

【出土遺物】 遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】 1号道路跡、1・4号掘立柱建物跡との配置関係は互いに同じ時期に存在しても矛盾しないことから、広く12世紀代と捉えたい。建物の性格については4号掘立柱建物跡のよな宗教施設か1号掘立柱建物跡のような住居であろう。

4号掘立柱建物跡（第16図、写真図版8）

【位置】 遺跡のはば中央にあたるB区に位置し、Ⅲ層上面にて検出された。

【重複関係】 7号講跡と重複するが、新旧関係は不明である。

【平面形式】 1間四面の掘立柱建物である。桁行き47,571mm (15.7尺)、梁行きも同じく4,757.1mm (15.7尺) となる。面積は約22.7m² (6.9坪) ある。周間に柱穴をはじめとする遺構があまりないため、平面形式や規模に変更が生じる可能性は殆どない。

【建物方位】 N - 23° - E

【柱穴】 身舎部分と庇部分を比較しても柱穴の規模や柱痕跡から推測される柱の太さに大きな違いは見られない。明らかな柱抜き取り痕を有するものはなかったが、P48・103・106などは柱穴上端が大きいので抜き取られているかもしれない。この建物跡の柱穴は浅い柱穴によって構成されている。これは基盤の砂礫層によって深く掘り下げることができなかつたためであろうか、或いは本遺構の性格に起因しているのであろうか。柱穴の下端や柱痕から推定される柱の太さは15~18cmが主体になる。【柱間寸法】 身舎部分は6.7尺、7.0尺、7.7尺と柱間寸法にばらつきが見られる。1間四面の建物であるから身舎は正方形が理想であると思うが、本遺構の場合は台形のような形状の身舎となる。庇部分では桁行き方向、梁行き方向共に4.5尺と6.7尺の2種類の柱間寸法によってできている。四隅が4.5尺となるように造られているようである。桁行き、梁行き共に柱穴は真っ直ぐには配列されていない。梁と桁を設定した根拠があるが、P88-106、P89-105が比較的直線的に結べるのに対して、P91-95、P99-103は直線のは結構ないことから、前者を梁行き、後者を桁行きと考えた。

【出土遺物】 遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】 建物の方位や配置が1号道路跡や1号掘立柱建物跡とよく似ていること、近世以降の遺物が周間にからぬと出土していないことなどから、1号道路跡と同じ12世紀に位置づけるのが最も妥当である。宗教関連施設か。

5号掘立柱建物跡（第19図、写真図版10）

【位置】 遺跡北側のF区に位置する。

【重複関係】 なし。

【平面形式】 南北棟の掘立柱建物と推測される。狭い調査区のため建物の一部のみを確認した。桁行き1,969mm (6.5尺)、梁行き4,091mm (13.5尺) である。庇をもたない構造である。遺構の面積は不明である。

【建物方位】 N - 12° - E

【柱穴】 檜出面で径30~50cmの円形を基調とする掘り方を持つ柱穴が主体である。明瞭な柱抜き取り痕は見られなかったが、柱痕跡も把握しにくい土色であった。

【柱間寸法】 桁行き方向は6.5尺。梁行きは13.5尺であるから、本当は6.5尺の倍数である13.0尺を意図して構築されたと推察される。そうなると、梁行きも2間となり、柱も3本使われていてもいいわけだが、中央部は精柆としても柱穴はみられなかった。

【出土遺物】 遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】 時期不明である。建物の規模から主屋に付属するような建物と考えられる。

6号掘立柱建物跡（第17図、写真図版10）

【位置】 遺跡中央付近にあたるC区に位置している。

【重複関係】7号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。

【平面形式】桁行き3間、梁行き2間の南北棟建物。桁行き総長4,817mm(15.9尺)、梁行き3,393mm(11.2尺)で遺構の面積は約16.3m²(4.9坪)ある。

【建物方位】N-9°-E

【柱穴】検出面で径30cm前後の円形を基調とした掘り方を持つ柱穴が多い。各柱穴の下端径等をみると大凡9~12cmの柱を使用していたと推測される。P174・177・184などは柱抜き取り痕を有する可能性がある。

【柱間寸法】桁行き方向は5.3尺で統一されている。梁行きは、P177-184が6.2尺-5.0尺、P174-197が6.4尺-5.0尺と何れも東側が短くなる。P209-175間にても柱穴がないか探したが無かった。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】時期不明である。建物の規模から主屋に付属するような建物と考えられる。

7号掘立柱建物跡（第17図、写真図版10）

【位置】遺跡中央付近に相当するC区に位置している。

【重複関係】6・10号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。

【平面形式】桁行き2間以上、梁行き1間（2間か）の東西棟建物である。桁行きは西側調査区外へと続くものと考えている。

【建物方位】N-10°-E

【柱穴】検出面で径30~40cmの掘り方を持つ柱穴からなる。各柱穴の下端径等をみると大凡9~12cmの柱を使用していたと推測される。柱の抜き取り痕を持つものは見られなかつた。

【柱間寸法】桁行き方向は7.0尺、7.3尺、7.5尺、7.9尺とややばらつきがある。梁行きは12.7尺、12.9尺である。梁行きは13.0尺を想定していたのであろうか、そうであれば6.5尺の2間とも解釈できる。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】時期不明である。小規模な付属小屋と考えられる。

8号掘立柱建物跡（第17図、写真図版10）

【位置】遺跡中央付近に相当するC区に位置している。

【重複関係】なし。

【平面形式】桁行き1間以上、梁行き1間（2間か）の東西棟建物である。桁行きは西側調査区外へと続くものと考えている。

【建物方位】N-3°-E

【柱穴】検出面で径30~40cmの掘り方を持つ円形を基調とした柱穴からなる。各柱穴の下端径等をみると12cm前後の柱を使用していたと推測される。柱の抜き取り痕を持つものは見られなかつた。

【柱間寸法】桁行き方向は7.1尺、8.0尺。梁行きは12.7尺である。梁行きは13.0尺を想定していたのであろうか、そうであれば6.5尺の2間とも解釈できる。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】時期不明である。小規模な付属小屋と考えられる。

9号掘立柱建物跡（第18図、写真図版11）

【位置】遺跡西端のJ区に位置する。周囲は水田になっていたが、本遺構のあるJ区だけが畠地とな

ており、周囲よりも小高くなっていた。

【重複関係】29号溝跡と重複するが本遺構が古い。

【平面形式】総柱の掘立柱建物である。桁行き4,787mm(15.8尺)、梁行き4,181mm(13.8尺)で面積は約20m²(6坪)である。本遺構が東側に延びる可能性はほとんどない。

【建物方位】N-17°-E

【柱穴】中心部にあたるP305は他の柱穴よりもひとまわり大きな掘り方を有している。柱穴掘り方は方形基調のものが多く他遺構とは形状がやや異なる。明確な柱抜き取り痕を持つものはない。

柱痕の残存するものから、20cm前後の柱穴が使用されていたようである。

【柱間寸法】桁行き方向は7.9尺、梁行きは6.9尺を使用している。このことから桁行き8尺、梁行き7尺を意識して構築されたと推察される。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】遺構の現況が水田化していなかったこと、29号溝跡は1号道路跡の続きの可能性があること、近世陶磁器は殆ど出土しなかつたことなどから、平安時代から中世と広く捉えておく。建物の性格は、その形状から倉庫的な施設であろう。

10号掘立柱建物跡（第18図）

【位置】遺跡中央付近のC区に位置している。

【重複関係】7号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。

【平面形式】桁行き1間以上、梁行き1間（2間か）の東西棟建物である。桁行きは西側調査区外へと続くものと想定した。

【建物方位】N-4°-E

【柱穴】検出面で径30~40cmの掘り方を持つ円形を基調とした柱穴によって構成される。各柱穴の下端径等をみると12cm前後の柱を使用していたと推測される。柱の抜き取り痕を持つものは見られず、土色も不明瞭であった。

【柱間寸法】桁行き方向は7.2尺、7.3尺。梁行きは14.0尺である。梁行きは7.0尺の2間とみるほうが適切であろうか。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】時期不明である。小規模な付属小屋と考えられる。

1号柱穴列（第19図）

【位置】遺跡北側のF区に位置する。5号掘立柱建物跡の東隣りにある。2号柱穴列とも近接する。

【重複関係】23・24号溝跡と重複するが新旧関係は不明である。

【方位】N-75°-W

【柱穴】検出面での上端径26~35cmの柱穴4個からなる。東西方向へは展開しないようだが、調査区が狭いため南北方向へ続いているかは不明である。

【柱間寸法】7.0尺と6.1尺を使用して3間分検出されている。

【出土遺物】遺構に伴う遺物はない。

【時期・建物の性格】時期や性格は不明であるが、F区からは12世紀代の遺物が出土していないことから12世紀よりも新しい時期の遺構と考えている。

2号柱穴列（第19図）

【位置】 遺跡北側のF区に位置する。5号掘立柱建物跡の東隣りにある。1号柱穴列にも近い。
 【重複関係】 23・24号溝跡とも重複しているが新旧関係は不明である。
 【方位】 N-77°-W
 【柱穴】 検出面での上端径25~40cmの柱穴4個からなる。東側へは展開しないようだが、調査区が狭いため南北西方向へ続いているかは不明である。
 【柱間寸法】 8.7尺を使用して3間分検出されている。
 【出土遺物】 遺構に伴う遺物はない。
 【時期・建物の性格】 時期や性格は不明であるが、F区からは12世紀代の遺物が出土していないことから12世紀よりも新しい時期の遺構と考えている。

3号柱穴列（第19図）

【位置】 遺跡北側のF区に位置する。15号土坑や21号溝跡の南隣りにある。5号掘立柱建物跡や1・2号柱穴列にも近い。
 【重複関係】 なし。
 【方位】 N-72°-W
 【柱穴】 検出面での上端径30~35cmの柱穴4個からなる。東・西・北方向へは展開しないようだが、調査区が狭いため南北方向へ続いているかは不明である。
 【柱間寸法】 9.9尺、6.3尺、6.2尺を使用して3間分検出されている。
 【出土遺物】 遺構に伴う遺物はない。
 【時期・建物の性格】 時期や性格は不明であるが、F区からは12世紀代の遺物が出土していないことから12世紀よりも新しい時期の遺構と考えている。

(2) 壇穴住居跡・竪穴遺構

1号竪穴住居跡（第20図、写真図版12・13）

【位置・検出状況】 遺跡のはずれ中央にあるB区に位置し、Ⅲ層上面で検出された。
 【重複関係】 2・3号掘立柱建物跡と重複するが、本遺構のほうが古い。
 【規模・平面形】 東側が調査区外へと延びているが、平面形は隅丸方形を基調とすると推定され北東壁-南西壁方向の上端部で2.6mを測る。
 【床・壁】 床面は概ね平坦で壁は垂直気味に立ちあがっている。
 【埋土】 にぶい黃褐色土ブロックを多く含むが自然堆積であろうと判断した。
 【柱穴・周溝】 北側の隙際から1基確認された。
 【カマド】 カマドは調査区外にあると推測される。
 【出土遺物】 土師器・須恵器が埋土から少量出土している。何れも本遺構に伴うようである。
 【時期】 9世紀前半。

2号竪穴住居跡（第20図）

【位置・検出状況】 本遺跡の中央にあるB区に位置し、砂礫層（Ⅳ層）から検出された。
 【重複関係】 8号溝跡との新旧関係は不明である。

【規模・平面形】 全般的に残りが悪く、北東部分の床面及び1号焼土としたカマド燃焼部のみを検出している。平面形は隅丸方形で、一边は約4mと推定される。

【床・壁】 砂礫層を床面としているようで、北端部には本遺構を掘り下げる際に出来たと見られる掘り方があった。壁は残っていない。

【埋土】 烧土というよりも貼灰の残りといったほうが適切かもしれない。
 【柱穴・周溝】 精査したが、本遺構に伴うような柱穴や周溝は検出されなかつた。

【炉】 1号焼土が本遺構のカマド燃焼部の残存部分とみられるがその残りは悪い。
 【出土遺物】 土師器・須恵器が少量出土した。

【時期】 平安時代。

3号竪穴遺構（第21図、写真図版12・13）

【位置・検出状況】 遺跡北端部にあたるG区に位置する。地山面（Ⅲ層）で検出した。
 【重複関係】 14号土坑は本遺構と同時期か、やや新しい遺構である。SX2・3も直接重複しているわけではないが、本遺構とは同時期の遺構である。

【規模・平面形】 検出面での規模は北西-南東2.7m、北東-南西2.3mの隅丸方形を呈する。
 【床・壁】 摘ね平坦であるが、中央から南東部にかけて床面より更に一段掘り下げた穴がある。この穴は1.7×1.3mの不整形で底面は平坦というよりも丸底に近い。壁は底面から垂直気味に外傾して立ち上がっている。

【埋土】 本遺構は粘土層をほりこんどおり、壁下部および底面はグライ化していた。埋土は地山ブロックを多量に含んだ人為堆積である。

【柱穴・周溝】 柱穴や周溝はなかった。

【炉】 精査したが見られなかつた。

【出土遺物】 （第41図、写真図版36・37） 陶磁器や木製品が出土した。詳細は4節で記述する。

【時期・性格】 12世紀後半。SX1~3と同様のもの可能性もあるが、平面形が異なることからここでは作業小屋で床面にある穴は収納施設と考えたい。

(3) 井戸跡

1号井戸跡（第36図、写真図版14）

【位置・検出状況】 遺跡北端部のG区に位置し、周辺の遺構と同様に地山面（Ⅲ層）で検出した。
 【規模・形状】 検出面での規模は2.0×1.8mの長円形を呈する。底面径は0.7mの円形で壁は外傾して立ち上がりっている。壁が垂直ではなく外傾しているのは壁が崩落したためかもしれない。底面までの深さは1.2mを測る。

【埋土】 地山ブロックを多量に含んだ人為堆積である。

【出土遺物・時期】 12世紀後半。

2号井戸跡（第36図、写真図版14）

【位置・検出状況】 遺跡北端部のG区に位置し、周辺の遺構と同様に地山面（Ⅲ層）で検出した。SX3との新旧関係は不明である。

【規模・形状】 遺構検出面での規模は0.9×0.8mの不整な方形をしている。底面径は0.7×0.6mの円形である。壁はほぼ垂直気味に立ちあがっている。底面までの深さは1.0mある。

[埋土] 地山ブロックを多量に含む人為堆積である。

[出土遺物・時期] 12世紀後半。

3号井戸跡（第24図、写真図版14）

[位置・検出状況] 遺跡の中央や北側にあるC区にあり、Ⅲ層で検出した。

[規模・形状] 遺構検出面での規模は2.1×2.0m、平面形は円形を基調としている。底面は径約0.9mの円形である。壁は底面から外傾して立ち上がっている。深さは1.3mを測り、底面付近からは湧水している。

[埋土] 人為堆積である。

[出土遺物・時期] 出土遺物がなく時期不明であるが、位置関係から6～8・10号掘立柱建物跡に伴う井戸跡と思われる。

（4）土坑

今回の調査では18基の土坑を検出した。個々の土坑の特徴については一覧表に整理している。

第2表 土坑類観察表

遺構名	位置	検出面 規模 長軸、短軸、 深さ	底面	埋 土	出土遺物 時期	その他	計測値の単位: cm												
							1号土坑	2号土坑	3号土坑	4号土坑	5号土坑	6号土坑	7号土坑	8号土坑	9号土坑	10号土坑	11号土坑	12号土坑	13号土坑
1号土坑	A区	Ⅲ層 215. (149). 53	平坦	自然堆積、5-6号溝より新しい	12世紀より新しい														
2号土坑	B区	Ⅲ層 141. 60. 40	やや平坦	人為堆積	平安時代														
3号土坑	B区	Ⅲ層 136. 57. 12	平坦	地土ブロックを含む人為堆積	平安時代	土封22													
4号土坑	B区	Ⅲ層 68. 67. 17	やや平坦	地土・周縁を多量に含む人為堆積	平安時代														
5号土坑	B区	Ⅲ・Ⅳ層 155. 136. 17	平坦	地土・周縁を多量に含む人為堆積	平安時代														
6号土坑	B区	Ⅲ層 135. 125. 12	やや平坦	人為堆積か	平安時代														
7号土坑	B区	Ⅲ層 128. 98. 6	縦層	地土微微量、人為堆積か															
8号土坑	D区	Ⅲ層 308. 158. 28	やや丸	人為堆積	時期不明														
9号土坑	B区	Ⅲ層 65. 60. 48	平坦	人為堆積か	現代か														
10号土坑	F区	Ⅲ層 77. (35). 6	やや但凸	人為堆積か															
11号土坑	F区	Ⅲ層 90. (70). 43	やや丸	自然堆積か	時期不明														
12号土坑	F区	Ⅲ層 112. 80. 13	平坦	17・18号溝と重複															
13号土坑	G区	Ⅲ層 80. 68. 30	平坦	自然堆積	時期不明														
14号土坑	G区	Ⅲ層 100. 100. 73	平坦	人為堆積	12世紀 遺構開闢	3号住居跡													
15号土坑	E区	Ⅲ層 (90). (75). 23	やや但凸	21号溝より新しい	現代														
16号土坑	C区	Ⅲ層 160. 146. 70	丸底	人為堆積	遺構なし 時期不明														
17号土坑	C区	Ⅲ層 125. 114. 87	平坦	自然堆積	縦24斜25	陥入穴か													
18号土坑	J区	Ⅲ層 99. 58. 22	やや丸	暗褐色土主体	時期不明														

（5）焼 土

1号焼土（第24図、写真図版19）

[位置・検出状況] B区、砂礫層（IV層）にて検出した。

[規模・形状] 検出面での焼土の広がりは80×35cmあり、最大3cmの焼成面を形成していた。平面的には不整な長円形をしている。

[焼土] 別の場所から持ち込まれたものではなく、この場で焚かれて形成されたものである。

[出土遺物・時期] 周囲には土師器・須恵器が散在していた。2号堅穴住居跡のカマドの燃焼部の可能性が高いと考えている。

（6）道路遺構・溝跡

1号道路跡（第25図、写真図版20・21）

[位置・検出状況] 遺跡のはば中央にあたるA区に位置し、Ⅲ層上面にて検出された。

[重複関係] 1号土坑、2・3・5号溝と重複する。

[路面の規模・形状] 両側に側溝（4・6号溝跡）を持つ道路である。路面の幅は最少で2.2m、最大で4.5mあり、平均幅は3.4mとなる。道路は西北西～東南東方向に延びているが、直線ではなく緩やかに弧を描くように曲がっている。その際に東南東方向の道路幅が少し広くなっていくよう見られる。路面は平坦であるが、特に疊ぐ織るような箇所も見られない。これらのことから遺構検出面が当時の使用面ではないことは窺える。調査区外の現地形でのこの道路遺構の延長線を推測できるような地形は見られない。

[4号溝跡の規模・形状] 検出された全長は31.5m、上幅は0.7～1.5mあり西北西方向がやや幅広で、東南東部分が狭い。西北西部分は掘り返しを行っているようで溝の壁に段が付いている。深さは0.2～0.3mを測る。

[埋土] 暗褐色土を主体とする自然堆積。

[6号溝跡の規模・形状] 検出された溝の長さは30mで上幅は0.5～1.1mある。4号溝跡と同様に西北西方向の上幅が広く、東南東部分の幅が狭い。どちらも溝に堆積した土砂を掘り返したことにより、幅が広くなったものだが、東南東部分の幅が狭いのは、硬い砂礫層を掘り込んでいたために幅広にならなかったと解釈される。

[埋土] 暗褐色土を主体とする自然堆積で黄褐色土粒を微量含む。

[出土遺物・時期] 常滑産陶器片が1点出土している。12世紀後半。

（7）溝 跡（第25～33図、写真図版19～27）

調査区の全域に分布している。時期不明のものが多いが、4・6号溝跡のように12世紀後半の道路側溝となるものもある。各溝跡の特徴については一覧表にまとめた。

第3表 溝跡観察表

遺構名	位置	検出面 規模 長さ、上幅、深さ	方向	埋 土	出土遺物期	その他	計測値の単位: m
							1号溝跡 2号溝跡 3号溝跡 4号溝跡 5号溝跡 6号溝跡
1号溝跡	A区	Ⅲ層 (5.8)×0.5×0.06	東～西	自然堆積	12世紀頃か は埋土が解釈		
2号溝跡	A区	Ⅲ層 (3.2)×0.4×0.07	南東～北西	自然堆積、3・4号溝跡より古い	12世紀頃か		

遺構名	位置	検出面	規模	長さ、上幅、深さ	方向	埋 土	遺物・時期	その他
3 号溝跡	A区	III層	(20.0) × 0.6 × 0.11	西北西-東南東		自然堆積	12世紀	
4 号溝跡	A区	III・IV層	(31.5) × 1.5 × 0.35	西北西-東南東		自然堆積	開闢 12世紀	1号道路跡
5 号溝跡	A区	III層	(7.0) × 0.7 × 0.11	西北-南東		自然堆積	12世紀頃	
6 号溝跡	A区	III・IV層	(30.0) × 1.1 × 0.26	西北西-東南東		自然堆積	12世紀	1号道路跡
7 号溝跡	B区	III・IV層	13.0 × 0.5 × 0.20	西北西-東南東			時期不明	
8 号溝跡	B区	III・IV層	(13.5) × 0.3 × 0.10	西北西-東南東		自然堆積(水の流れ た感じはない)	時期不明	
9 号溝跡	B区	III・IV層	(15.0) × 0.6 × 0.04	西北西-東南東			時期不明	
10 号溝跡	B区	III層	(4.2) × 0.8 × 0.17	東-西		人為堆積か	時期不明	
11 号溝跡	C区	III層	(7.7) × 0.8 × 0.19	北北西-南南東		自然堆積	時期不明	
12 号溝跡	C区	III層	(7.3) × 0.9 × 0.48	東-西		自然堆積	時期不明	
13 号溝跡	A区	III・IV層	(16.7) × 0.7 × 0.08	西北西-東南東		暗褐色土+土体	時期不明	
14 号溝跡	F区	III層	(1.1) × 0.6 × 0.17	北北東-南南西		自然堆積か	時期不明	
15 号溝跡	F区	III層	(1.9) × 2.0 × 0.26	北北東-南南西		人為堆積か	時期不明	
16 号溝跡	F区	III層	(11.5) × 1.5 × 0.28	北北東-南南西		暗褐色	現代	
17 号溝跡	F区	III層	(1.9) × 0.9 × 0.10	西北西-東南東		暗褐色土+地山ブ ロック測量	時期不明	
18 号溝跡	F区	III層	(1.9) × 0.4 × 0.16	西北西-東南東		暗褐色土+地山ブ ロックごく微量	時期不明	
19 号溝跡	F区	III層	(0.6) × 0.5 × 0.12	西北西-東南東			時期不明	
20 号溝跡	G区	III層	(16.5) × 0.7 × 0.09	北北東-南南西		暗褐色土、SX2との 切り合ひは不明	12世紀	SX2関連
21 号溝跡	E区	III層	(10.0) × 0.4 × 0.13	西北西-東南東		褐灰色土	現代か	
22 号溝跡	E区	III層	(2.5) × 0.4 × 0.05	北北東-南南西		暗褐色土	現代か	
23 号溝跡	E区	III層	(2.6) × 0.6 × 0.12	北北東-南南西		暗褐色土	現代か	
24 号溝跡	E区	III層	(2.7) × 0.5 × 0.11	北東-南西		自然堆積	時期不明	
25 号溝跡	欠						欠番	
26 号溝跡	C区	III層	(8.2) × 0.3 × 0.05	東-西	にぶい黄褐色土		時期不明	
27 号溝跡	C区	III層	(8.2) × 1.2 × 0.53	東-西	にぶい黄褐色土+ 燒土、炭化含む		現代	
28 号溝跡	C区	III層	7.1 × 0.6 × 0.14	北北東-南南西		暗褐色土	時期不明	
29 号溝跡	J区	III層	(7.5) × 1.7 × 0.13	西北西-東南東		人為堆積か	時期不明	

(8) 性格不明遺構・その他

S X 1 (第34・35図、写真図版28)

【位置・検出状況】本遺跡の北端部にあたるG区の中でも北側に位置している。III層面で検出した。

【重複関係】長さ5.3m、上幅約0.3m、西北西-東南東方向にびびる溝跡と重複する。溝跡は本遺構に伴うか、古い時期の遺跡である。

【規模平面形】遺構検出面での規模は4.6×3.2mの長円形である。長軸は西北西-東南東方向である。深さは最大で0.9mある。

【底面・壁】底面は2.0×0.8m程の長円形で、方向は上端部と同じである。III層内に部分的に見られる粘土層（層厚約30cm）を掘り込むように構築されており、粘土層より下層の砂質シルト面に達したところで底面としている。壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がっており、途中で段がついたり、不規則な掘り込み痕を持つわけではない。

【埋土】底面付近は自然堆積である。これは遺構が機能している間に堆積したものであろう。埋土上位は人為堆積で遺構底絶時に埋め戻している。

【付属施設】溝跡は本遺構の中心長軸線上を通っていることから、時期の異なる遺構とは考え難い。よってここでは溝跡と本遺構二一体の施設であると解釈する。

【出土遺物】（第38・40図、写真図版34～37）常滑産陶器片が廃棄された状態で出土した。

【時期・性格】12世紀後半。粘土層を掘り込んでいることから粘土採掘坑ではないかと考えているが、底面や壁面があり凸凹していない。溝が取り付くことから小規模な池の可能性もある。この場合は庭園などにある蓄水池ではなく、生業関連の池であろう。S X 2・3も同様の施設と考えている。

S X 2 (第34・35図、写真図版29)

【位置・検出状況】本遺跡の北端部にあたるG区に位置している。III層面で検出した。北側にはS X 1が、南側にはS X 3が近くにある。

【重複関係】長さ16.5m、上幅約0.6m、北東-南西方向に延びる溝跡と重複する。溝跡は本遺構より新しいものではない。同時期か、古い遺構である。

【規模平面形】遺構検出面での規模は7.1×3.5mの不整な長円形である。長軸は北東-南西方向である。深さは最大で0.7mを測る。

【底面・壁】底面は3.9×1.6m程の不整長円形で、長軸方向は上端部と同じである。S X 1と同じくIII層内に部分的に見られる粘土層（層厚約30cm）を掘り込むように構築されており、粘土層より下層の砂質層に達したところで底面としている。底面は概ね平坦である。壁は底面から緩やかに外傾しながら立ち上がっており、不規則な掘り込み痕を持つわけではない。

【埋土】底面付近は自然堆積である。これは遺構が機能している間に堆積したものであろう。埋土上位は人為堆積で遺構底絶時に埋め戻している。

【内部施設】前述した溝跡は本遺構の中心長軸線上を同じ方向で通っていることから、時期の異なる遺構ではなく、本遺構と一緒に施設であると見たい。その他の施設は見られなかつた。

【出土遺物】（第38・39・41図、写真図版34～38）常滑産陶器片や木製品が埋め戻した土に混入した状態で出土している。

【時期・性格】12世紀後半。粘土層を掘り込んでいることから粘土採掘坑ではないかと考えているが、底面や壁面があり凸凹していない。溝が取り付くことから小規模な池の可能性もある。S X 1と同

様に庭園などにある池ではなく、生業関連の池であろう。SX3も本遺構と類似する施設と考えている。

SX3 (第36・37図、写真図版30)

【位置・検出状況】本遺跡の北端部のG区に位置している。北側にはSX1が、北側にはSX2と3号住居状遺構が近くにある。Ⅲ層面で検出した。

【重複関係】遺構検出した段階では2号井戸跡と重複していたが、埋土が浅く新旧関係を把握できなかつた。本遺構の平面形状からは1号井戸跡を避けて構築されたように見える。

【規模・平面形】遺構検出面での規模は6.5×2.5mの不整な長円形である。長軸はSX2と同じく北東～南西方向である。深さは最大で4mを測る。

【底面・壁】底面は5.8×1.9m程の不整長円形で、長軸方向は上端部と同じである。SX1・2と同じくⅢ層内に部分的に見られる粘土層（厚約30cm）を抜くように掘り込まれており、粘土層より下層の砂質シルト層に達したことから底面としている。底面は概ね平坦である。壁は底面から外傾しながら立ち上がっており、段が付いていたり不規則な掘り込み痕を持つわけではない。

【埋土】底面付近は自然堆積である。これは遺構が機能している間に堆積したものであろう。埋土上位は人為堆積で遺構廃絶時に埋め戻している。

【内部施設】却跡、柱穴、周溝といったその他の施設は見られなかった。

【出土遺物】(第38・39・41図、写真図版34・35)常滑産陶器片や木製品片が埋め戻した土に混入した状態で出土している。

【時期・性格】12世紀後半。底面や壁面に土取り穴特有の不規則な掘り込みは見られないが、粘土層を掘り込んでいることから粘土探査坑ではないかと考えている。SX1・2と同様小規模な池の可能性もある。何れにせよSX1～3は同じ性格の遺構で、同時に存在か場所をずらして造り替えたと推測される。

G区埋没沢 (第37図、写真図版19)

遺跡北側にあたるG区にてされた。限られた調査区であったため長さ5.5m、幅6.1m、深さ0.7m程を確認するにとどまつたが、想定される沢の上幅は10～15mと推測される。深さは1mを超える可能性があり、東西方向に流れていったと考えられる。検出面から約10cm掘り下げる段階で十和田a火山灰と巨大な倒木を検出した。十和田a火山灰は1～5cmの厚を持ち、面上にも広がりをもって堆積していた。断面で観察すると、ほぼ水平に近い位緩やかな傾斜で堆積している。このことから火山灰堆積段階ではこの沢もかなり埋まっており、流れは殆どなく湿地的な状態となっていたようである（本稿では沢跡としているものの確たる根拠に基づいて沢跡としているわけではない。よって沢ではなく池や湿地の可能性もある）。この火山灰は何処か別の場所に降り積もったものが時間の経過とともにこの地に流れてきて溜まつたものではない。この沢跡に降下し堆積した原位置を保った状態にある。

倒木は十和田a火山灰と共にあった。倒木周辺の火山灰は部分的に2層に分かれたり、攪拌されたような状態になっているところもあった。このことから火山灰降下直後にこの木は倒れたといえる。火山灰の降下と木の倒れたのは殆ど同時期である。この倒木には人為的な加工痕は見られなかつた。

火山灰下層からは土師器が複数出土している。土師器は何れも坏であった。その特徴については4節で記述するが、底面付近をハラケザリ再調整している。そして墨書・線刻もされている（どちらも

「一万」と読むのか）。前述したように沢は殆ど流れを失っていることから、これらの坏も遠距離から流れてきたのではない。調査区外のすぐ近くに9世紀中葉頃の集落が想定される。

G区の北側には現在、明後沢川が東西方向に流れている。これは圃場整備に伴う河川改修によるものであり、以前は松ノ木沢川の流路であった。遺跡周辺は平野であるため、小河川はその流路を時折変えていたことが、古地図・古写真・遺跡調査などから明らかになっている。G区埋没沢もその規模や方向などから、嘗ての松ノ木沢の可能性があり、その時期は平安時代前半及びそれ以前であるから、別の地点でこの沢の継ぎが見つかった場合は考古学的な調査の必要があろう。

4 出 土 遺 物

(1) 概 要

出土遺物は平安時代の土師器・須恵器、中世陶磁器、かわらけ、鉄製品などが中コンテナ1.5箱。下駄、柱材、杭等の木製品が大コンテナ1箱である。時期別にみると绳文時代・9・10世紀・12世紀後半、近世及びそれ以降の遺物が出土しているが、主体を占めるのは12世紀後半である。

(2) 陶磁器・かわらけ (第38～40図、写真図版34～36)

12世紀の陶磁器を主体に、近世及び近世以降の陶磁器が微量出土している。かわらけは12世紀後半と見られる手づくねかわらけが1点出土している。

12世紀の陶磁器では常滑産陶器が30片、1941.35g。渥美産陶器が12片1013.33g。中国産白磁片4片、24.42gが出土しその殆どを掲載した。また須恵器系陶器が須恵器かよく分からない破片が2片出土している。

常滑産陶器

今回の調査で最も多く出土した陶器である。その多くは遺跡の北端にあたるG区に集中している。器種をみると甕或いは広口甕となるような破片が多いようである。明らかに壺となるような資料は1・2点といったところで、その他の器種には鉢類が微量だがある。何れの器種もG区にあるSX1～3で出土したもののが大半である。この遺構は粘土探査坑或いは農業用池地と考えている施設であるが、12世紀後半にこれらの中の遺構を埋め戻す際に必要な土をもてて廃棄している。破片は接合するものがありなく、廃棄される段階で既に碎片になっていたと推察される。特に1号縁部のものは殆ど見られなかった。常滑2型式段階に殆どが属すると考えている。1b型式段階のものが含まれている可能性があるが破片資料により分けることができなかつた。206は壺の底部と考えている。96は壺の体部であるが、窓内に付着した溶解物がある。225a～cは壺の体部上半であるが沈線が見られる。押印があるものは328・80・105・243b・228である。22は1号道路跡を構成する4号溝跡からの出土で、道路跡が12世紀後半であるとする根拠に用いている。

渥美産陶器

12世紀代の陶磁器の中では常滑産陶器に次いで出土量が多く、その中から10片を掲載している。鉢が2片であることは全部甕類であった。SX1・2・12・18号溝から出土しているが、何れの破片もあまり接合せず、もともと破片の状態でSX1・2に廃棄されたのであろうし、12・18号溝に入ったのであろう。

白 磁

5片出土し、そのすべてを掲載した。何れも12世紀代のもので器種は碗と皿である。43は高台を持

たない皿で内面には線描き文様がある。47は口縁部端反りの碗である。白化粧を施すものはないよう
に観察したが、あまり自信はない。

その他の陶器

48は瀬戸産の擂鉢である。49は瀬戸美濃産天目碗である。鋳釉が施されるので大窯期（16世紀前半
か）のものである。50・51は大堀相馬産の陶器である。52～54は肥前窯である。

かわらけ

12世紀後半の手づくねかわらけである。小形で口縁部に面取と1段のヨコナデが施されている。

(3) 木 製 品 (第41図、写真図版36・37)

12世紀の遺構である1号井戸跡、3号竪穴遺構、S X 2から出土した中の殆ど全てを掲載している。
57・62・63は漆器椀である。62の底面裏に刻まれているのは「大」の字であろうか。58・59は加工痕
のある材である。60は縄で下駄の縒であろう。61は下駄で燃えた痕跡がある。64・65は薄い板材に細
く浅い切れ込みが等間隔で入れられている。曲物の一部であった可能性がある。66は横位に小さな削
り込みを持つ。67には平坦な面を削り出し、その後には複数の傷が付いている。

(4) 金 属 製 品 (第40図、写真図版36)

今回の調査では殆ど出土しなかったので、全点掲載した。55は祥符元寶、56は銅製の煙管とともに
遺構外からの出土である。

(5) 土 器 器・須恵器 (第42図、写真図版37・38)

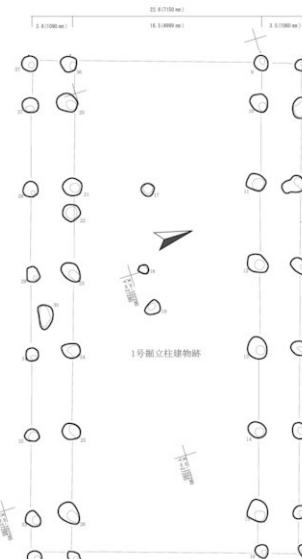
68～70の杯はG区にある沢跡に堆積していた十和田a火山灰よりも下層から出土している。71～83
は須恵器である。溝・土坑・遺構外等から破片の状態で出土したものである。73は東海地方産の短頭
壺か脚付短頭壺の可能性があり、9世紀代かそれより古いものかもしれない。その他は在地の壺・壺
・壺類である。84は時期不明のミニチュア器である。

(6) 石 器 (第40図、写真図版38)

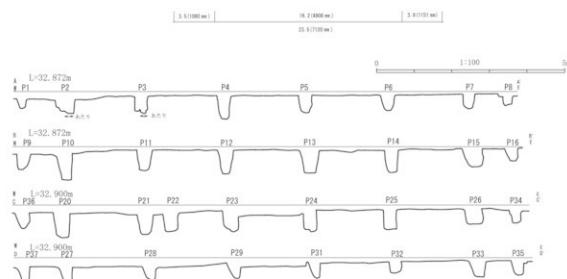
遺構外から出土した縄文時代の石鏃が2点（85・86）ある。

(7) そ の 他 (写真図版38)

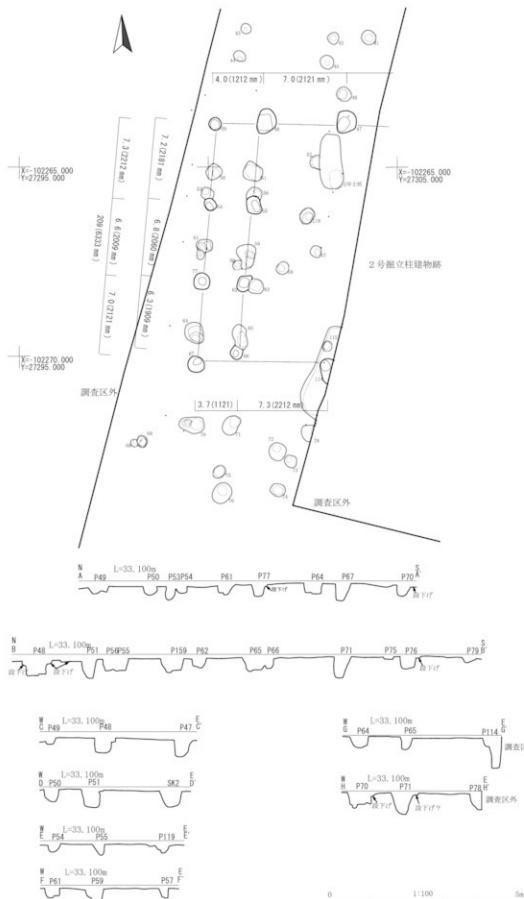
遺構内から各種の種実が出土している。また、骨片も僅かだが残っているものがあった。詳細は遺
物観察表と第VI章に整理した。



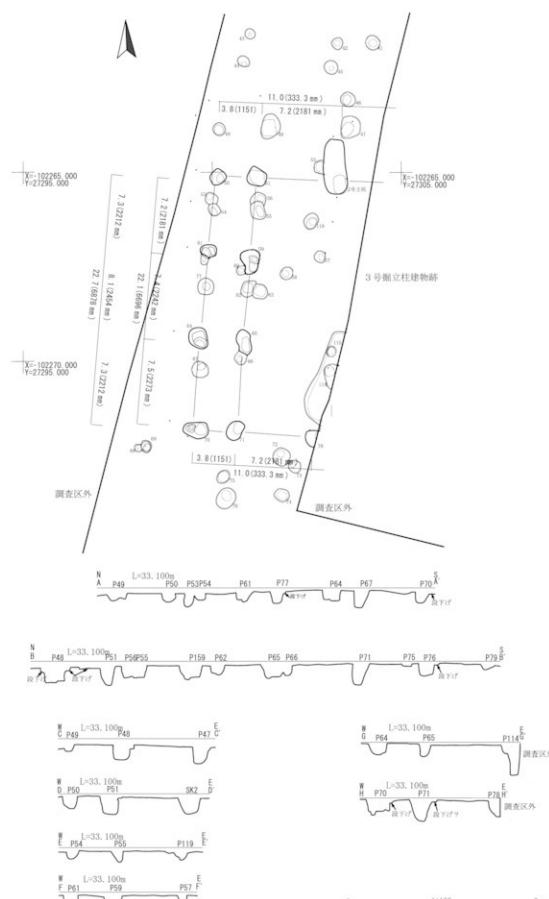
1号掘立柱建物跡



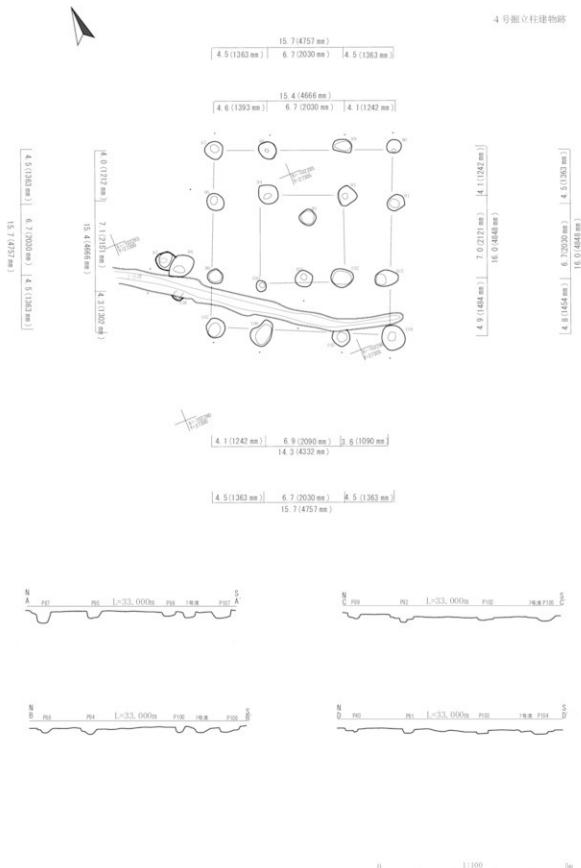
第13図 1号掘立柱建物跡



第14図 2号掘立柱建物跡



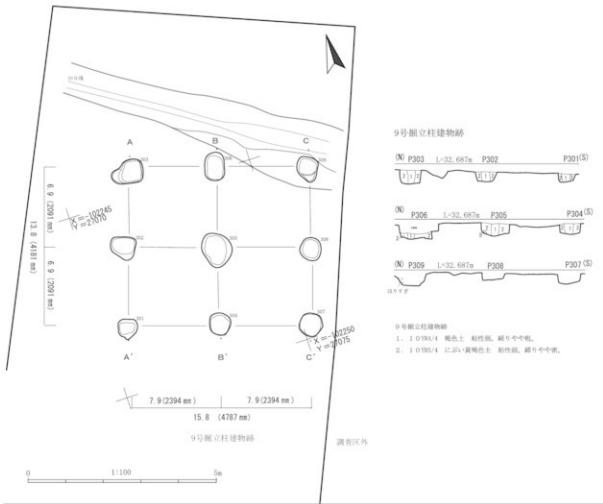
第15図 3号掘立柱建物跡



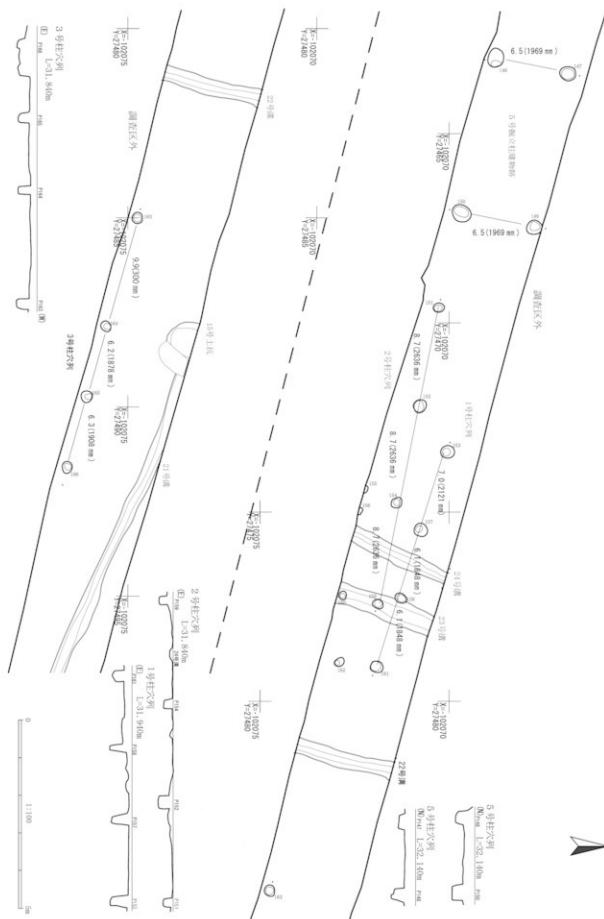
第16図 4号掘立柱建物跡



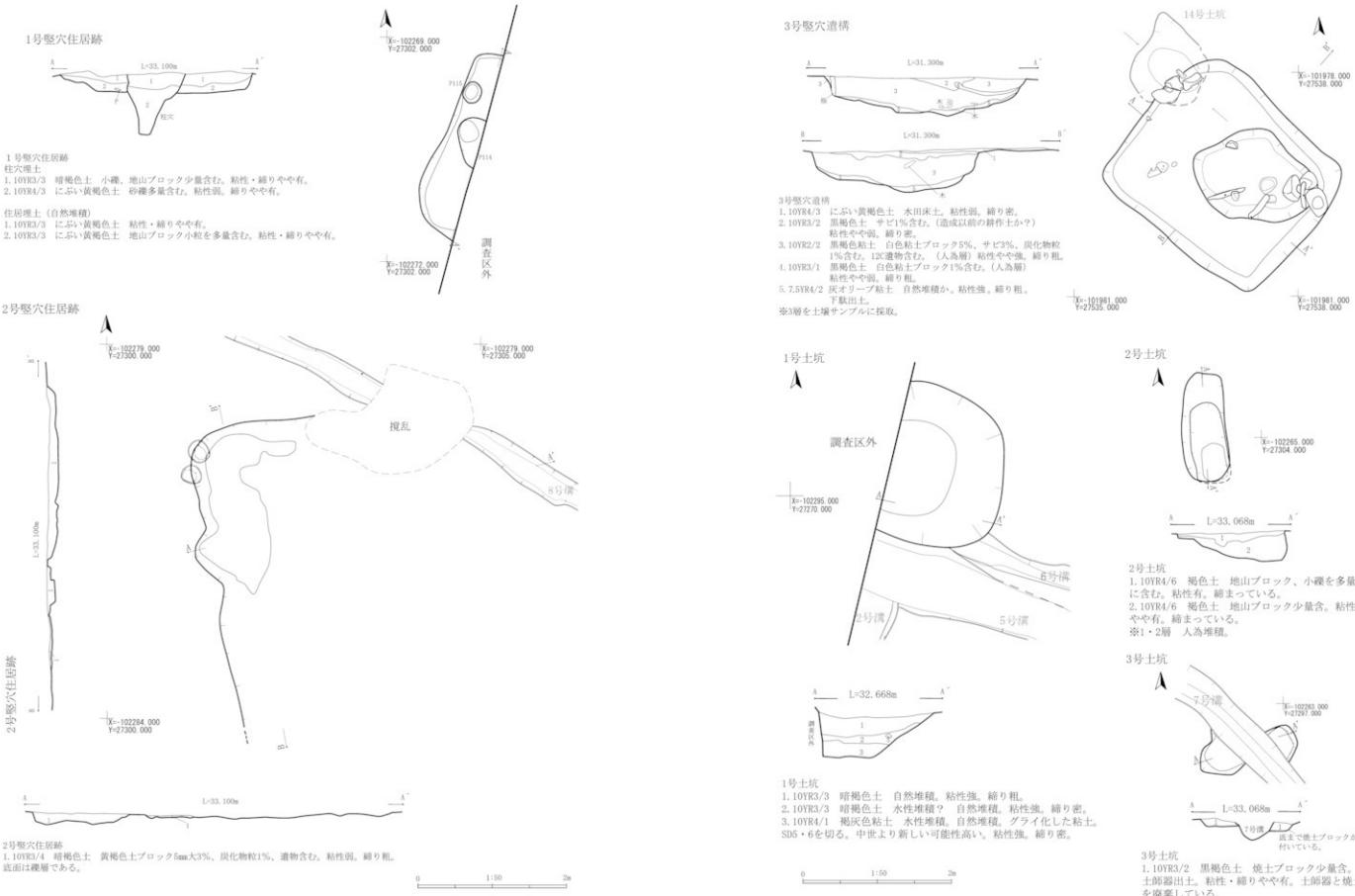
第17図 6~8号掘立柱建物跡



第18図 9-10号掘立柱建物跡

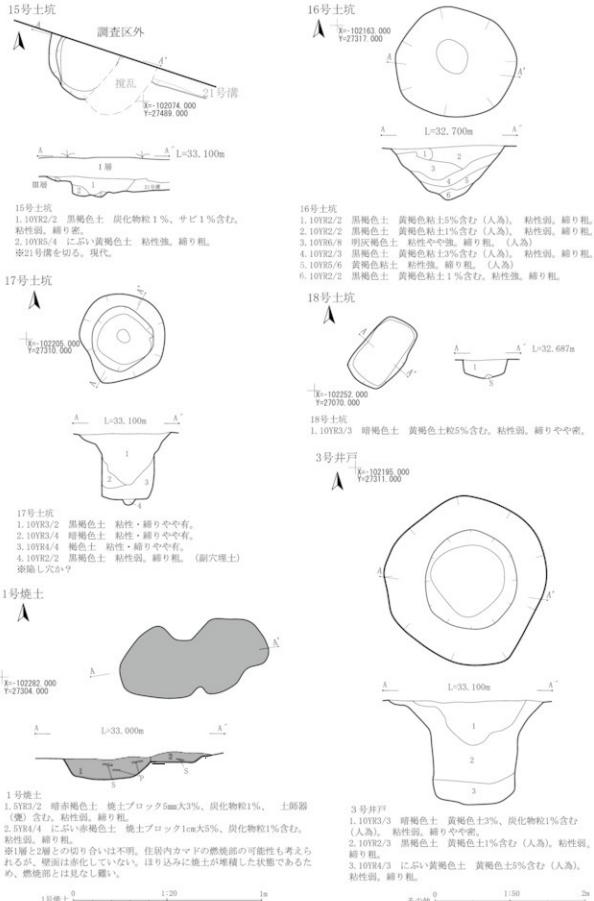


第19図 5号掘立柱建物跡、1-3号柱穴跡

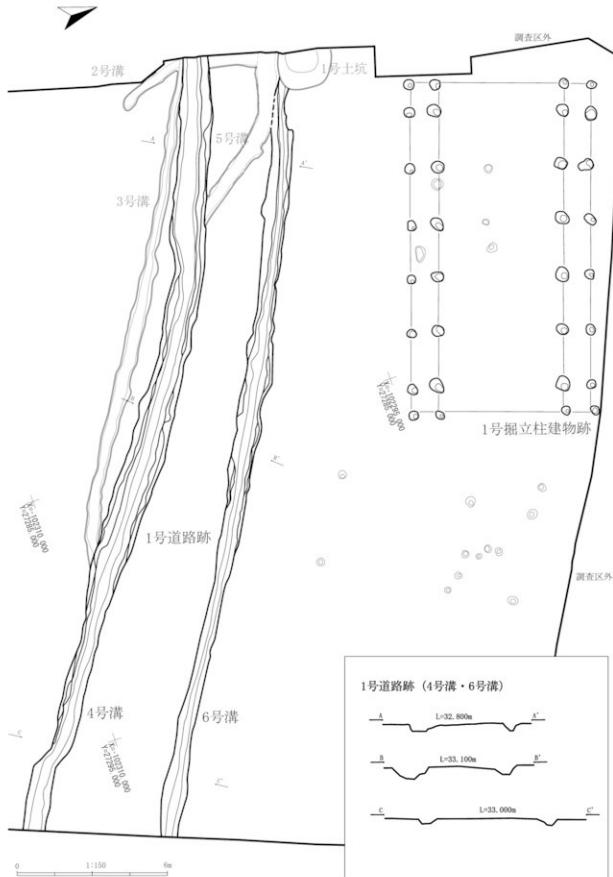


第20図 1・2号竪穴住居跡

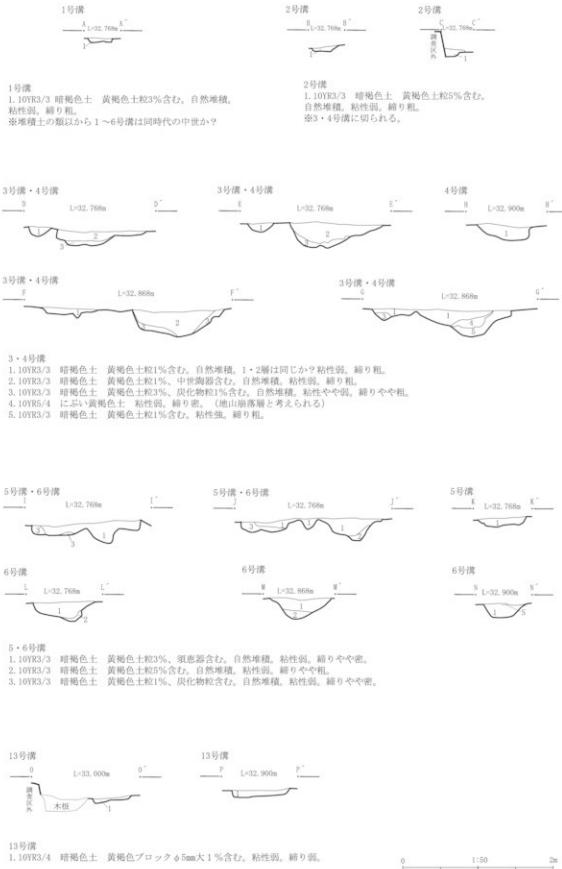
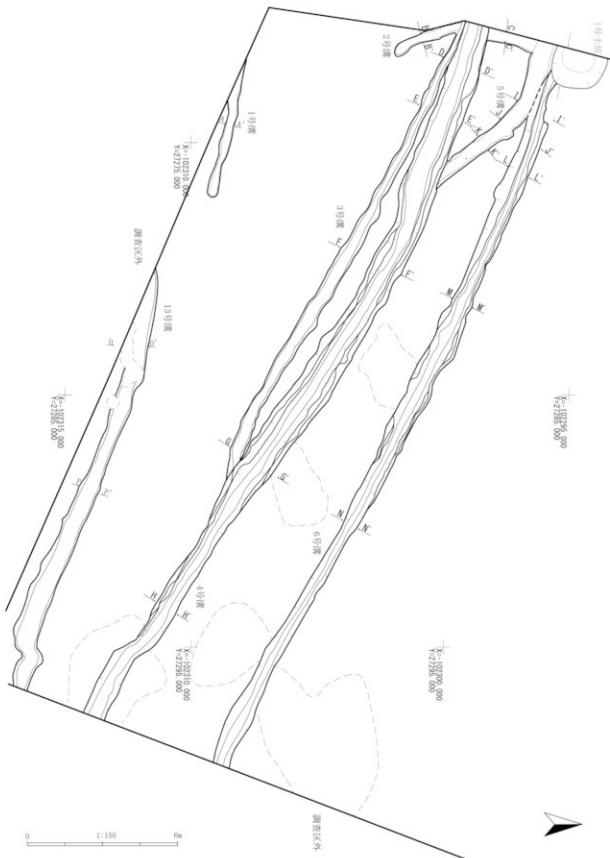
第21図 3号竪穴遺構、1~3号土坑



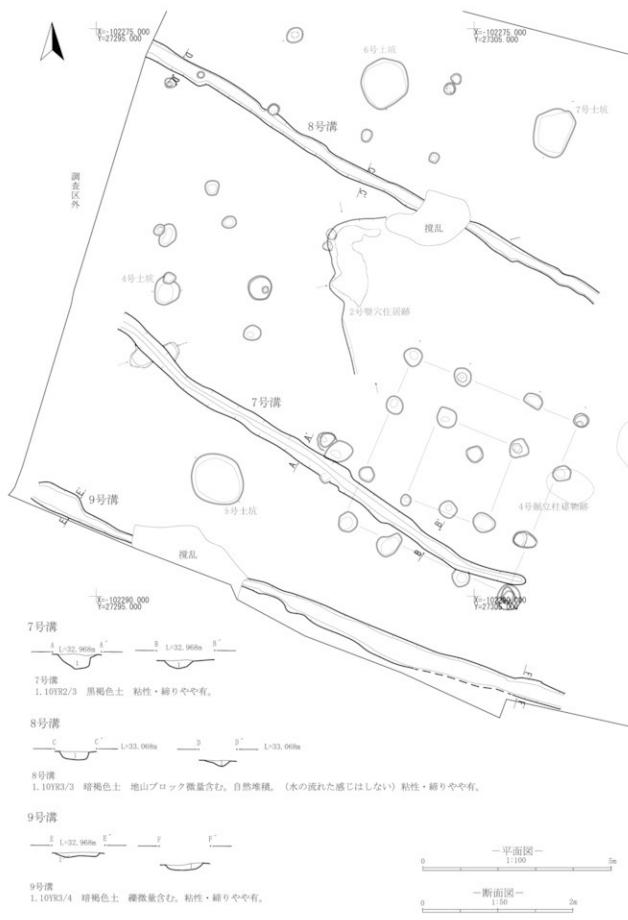
第24図 15~18土坑、1号焼土、3号井戸跡



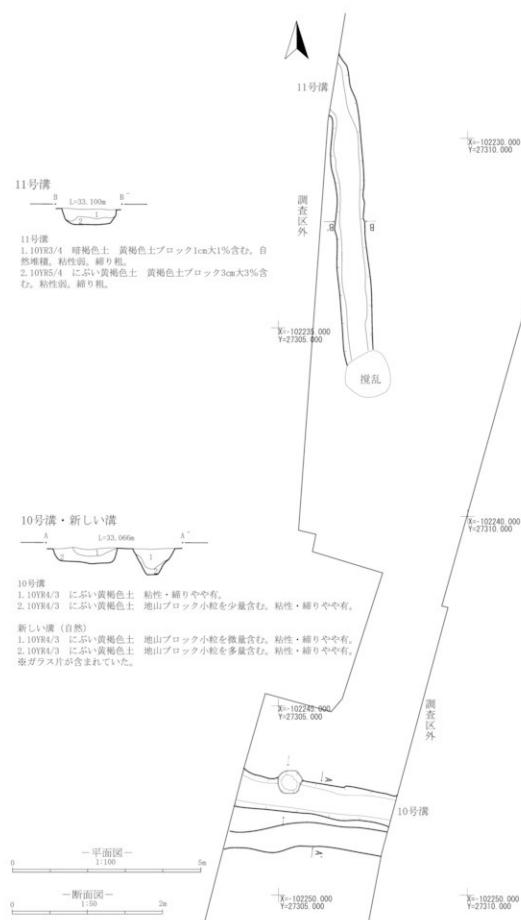
第25図 1号道路跡

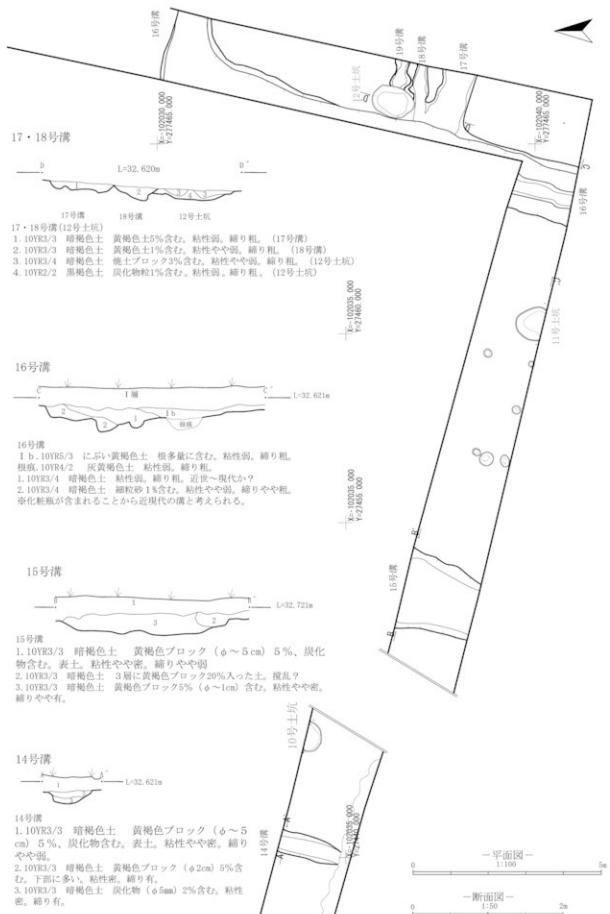


第27図 1~6号・13号溝跡②

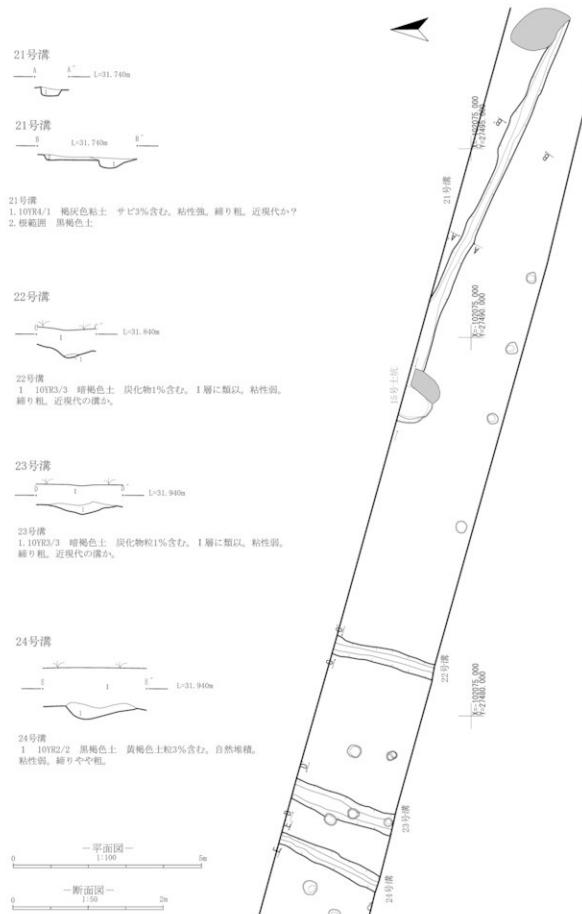


第28図 7~9号溝跡

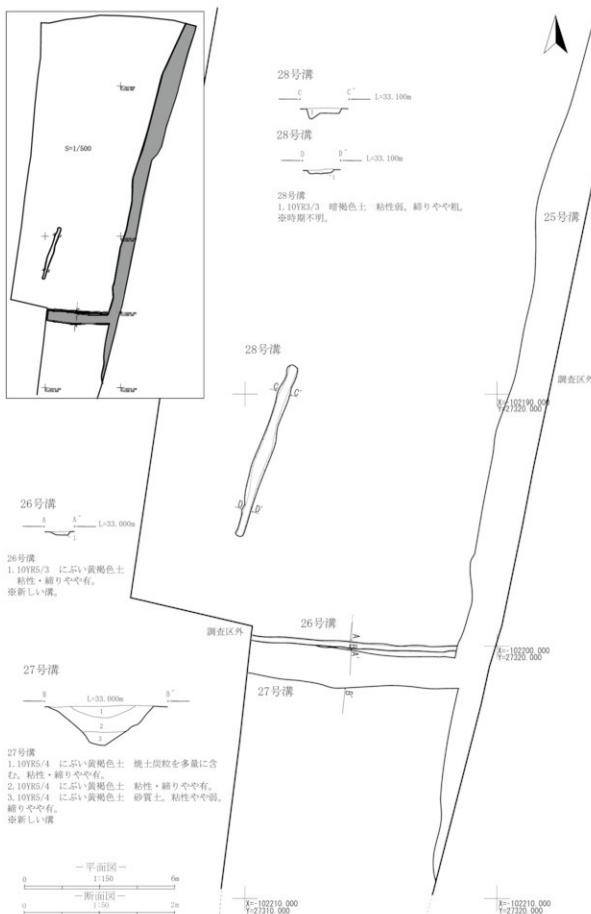




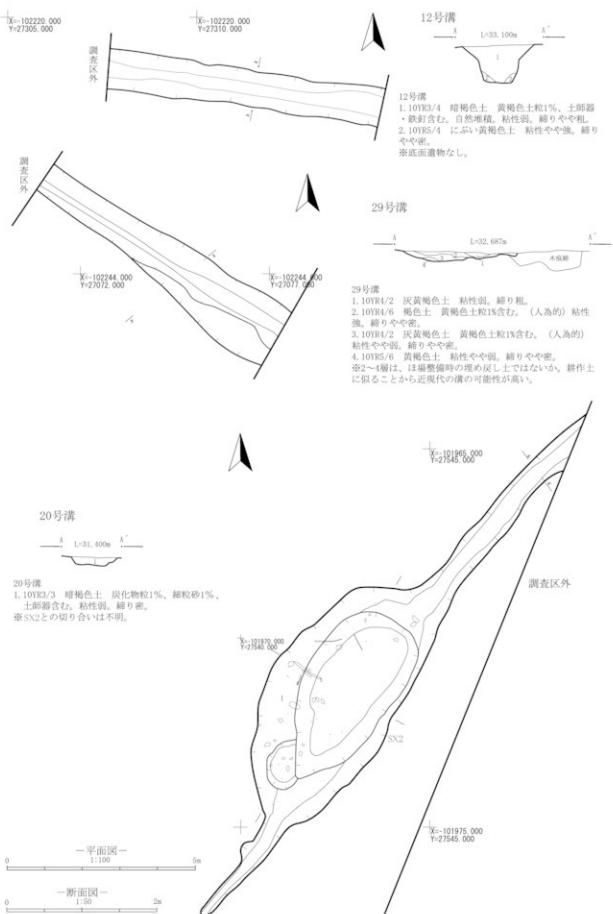
第30図 14～19号溝跡



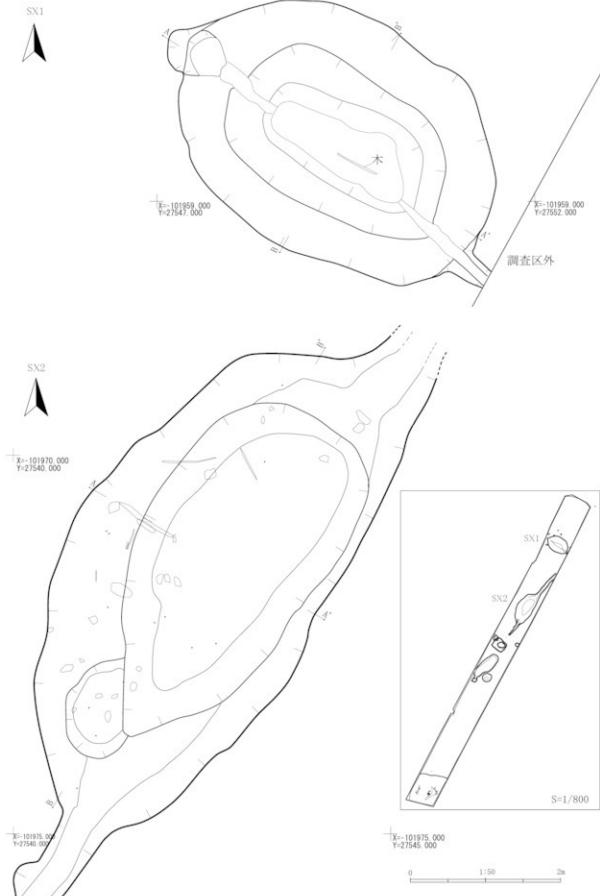
第31図 21～24号溝跡



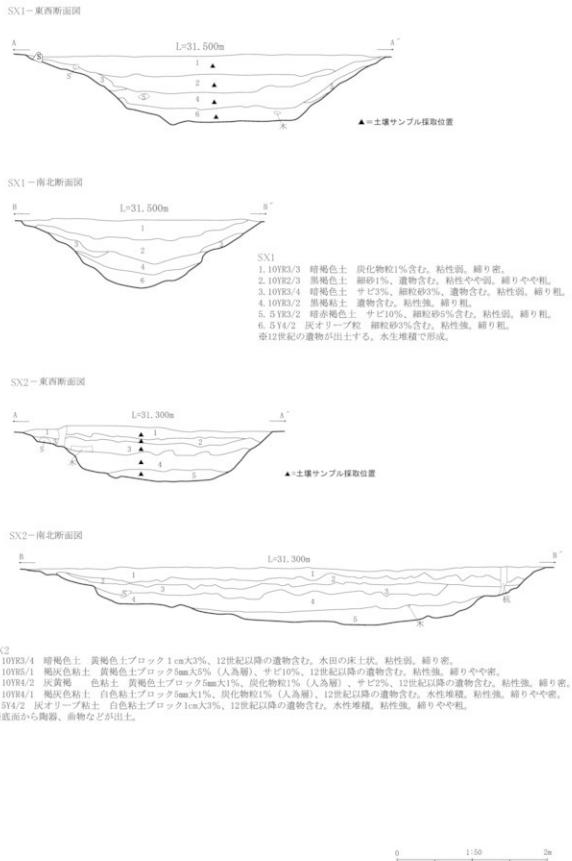
第32図 25~28号溝跡



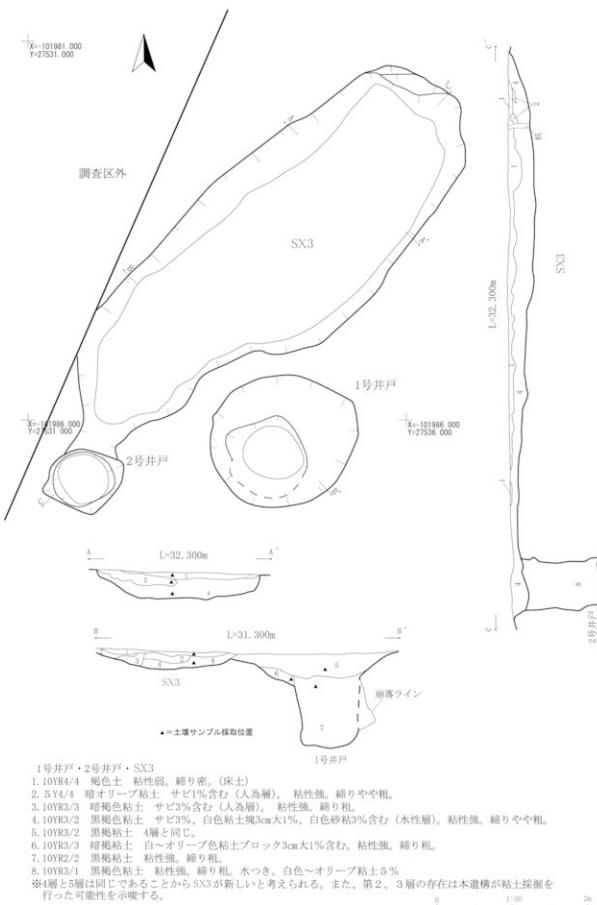
第33図 12-20-29号溝跡



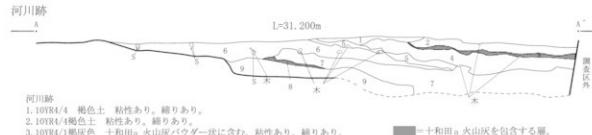
第34図 SX1-SX2①



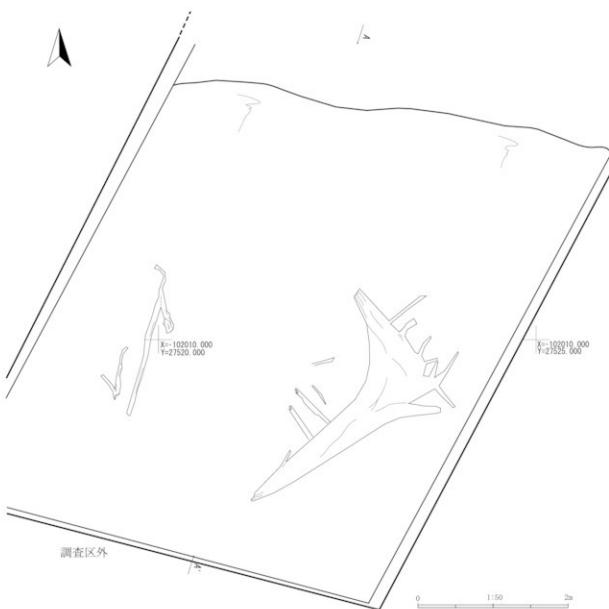
第35図 SX1-SX2②

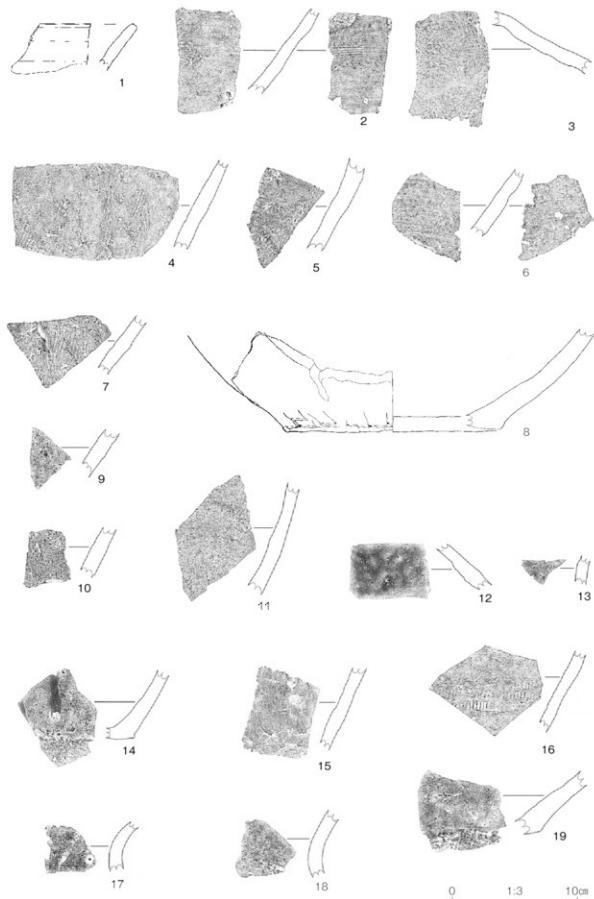


第36図 1・2号井戸・SX3

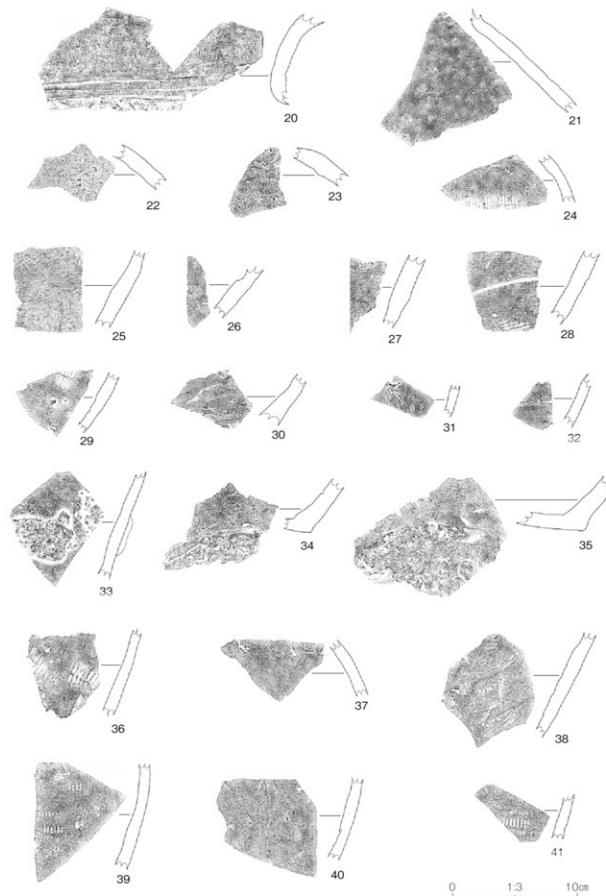


第37図 河川跡

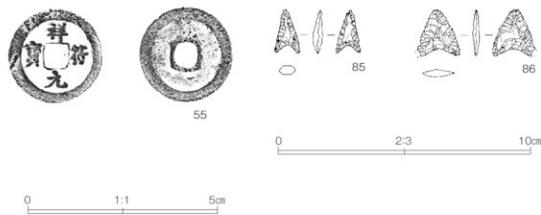
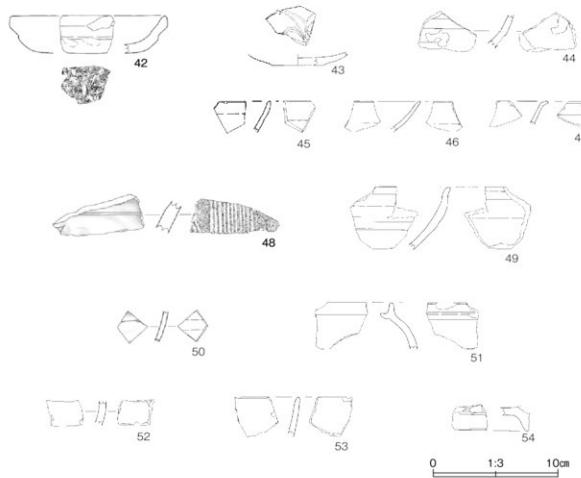




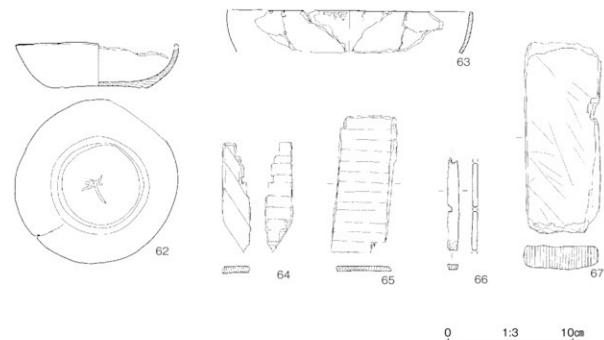
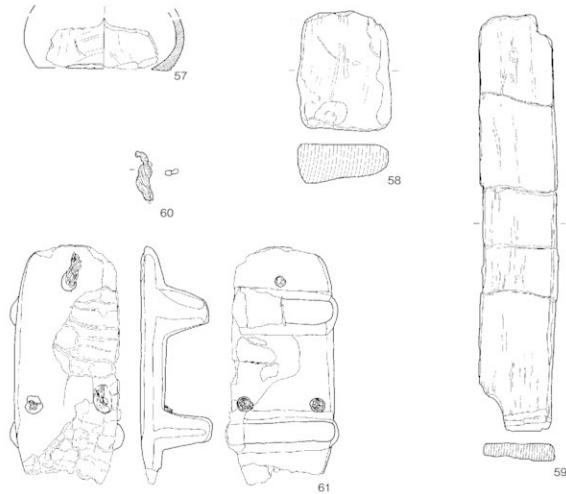
第38図 国產陶器(渥美・常滑)



第39図 国產陶器(常滑)



第40図 かわらけ・陶磁器ほか



第41図 木製品



第43図 中畠城跡地形図

V 中畠城跡

1 概 要

(1) 位 置 な ど

中畠城跡はJR東北本線前沢駅の北東北約3.5kmに位置している。水沢段丘高位面にある小規模な微高地を複数の堀で囲んで城跡としている。調査区の現況は標高32m前後の水田であった。

中畠城跡は江戸時代の史料である「風土記御用書出」によると桜山館（御城主桜山平次郎）と記載される城館である。調査区は主に城館を取り囲む北側の外堀と内堀の一部にあたる。

(2) 繩 張

発掘調査成果、明治時代の絵図、戦後まもないころの航空写真に写る地形などから想定される中畠城跡の構造は第45図のとおりである。

一曲輪 中畠城跡の本丸にあたる。岩手県の中世城館にはこの部分のみが中畠城跡として紹介されている。北東-南西110m、南東-北西80m、標高34mと僅かではあるが城跡の中では最も高い場所である。西縁辺部と北縁辺部には土塁が一部残っている。周りは全て幅6~10mの堀（内堀）で囲まれている。

一曲輪の北東端部と南東端部には細長く舌状に張り出した場所がある。これは出入口施設で張出の先に橋を架けて、それぞれ二曲輪や三曲輪へと内堀の上を渡れるようになっていたようである。

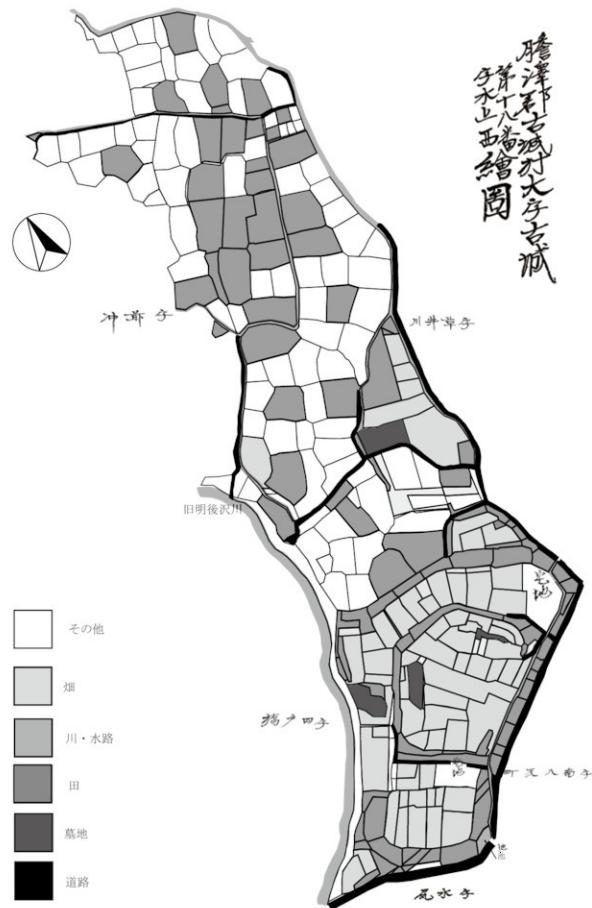
内堀 特に北側は堀内部に障壁のある「畠堀」となっていた。内堀の西側は「畠堀」ではないことが分かったため、東-南側も「畠堀」ではないと考えている。

二曲輪 一曲輪の北側に配される。東-西150m、南西-北東40mで標高は33.3m前後、東西方向に細長く西側は旧明後沢川まで達している。曲輪内部はごく一部を発掘調査したに過ぎないが、柱穴や土坑、溝跡などが確認されている。二曲輪を取囲むように北側から東側にかけて外堀が巡っている。

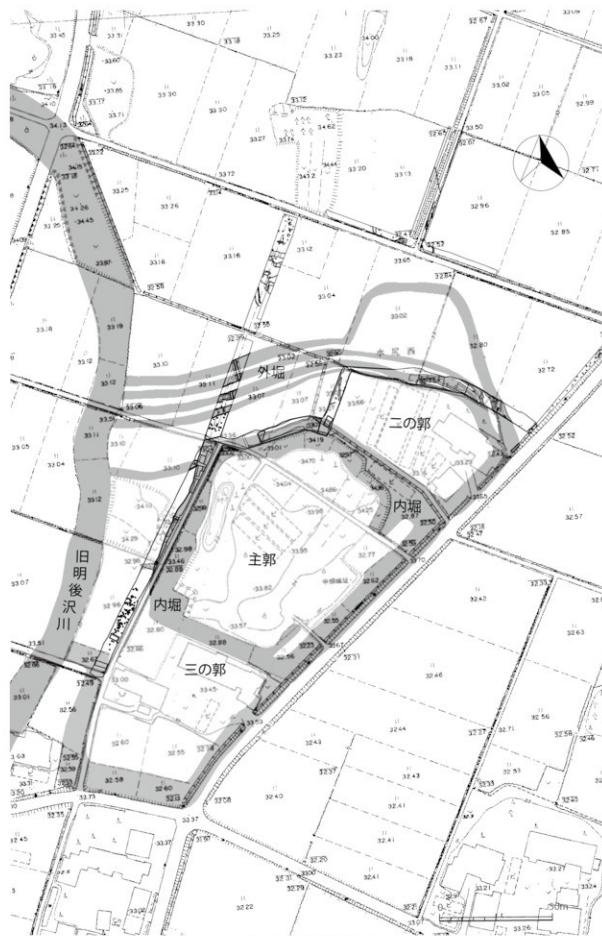
北側の外堀 二曲輪の東側から北側を巡り西側は旧明後沢川まで達している。この北側の外堀は発掘調査の結果「障子堀」であることが明らかとなった。全長210m、幅14m、深さは横断面からで0.6~0.9mである。「障子堀」の構造は間隔や深さの異なる障壁を不規則に4列配置するもので、粘土などを張って障壁とするのではなく、地山をそのまま掘らずに残すことで障壁を造り出している。あたかも大小の堅穴が連続して並んでいるような形態をしていた。幾つかの障壁には堅穴から隣の堅穴へと水が流れるように浅い溝が掘られているものがあった。外堀は旧明後沢川と連結していることからも、堀に水を引き入れて水堀にしていたといえる。水を張り、障壁が見えないように隠していたのであろう。

堀に障壁を持つ「畠堀」「障子堀」は本県においては金ヶ崎町にある柏山館にのみで、極めて珍しい事例である。

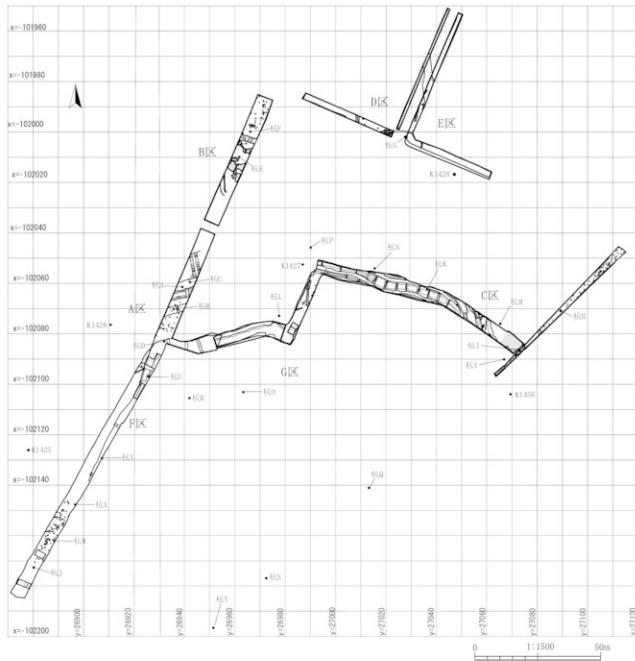
三曲輪 一曲輪の南側から西側にかけてある。規模を計測しにくいが南北110m東西75mで標高は32.9~33.5mを測る。発掘調査では狭い範囲のみの調査であったがカド状遺構や柱穴群が広がっており、遺構密度はかなり濃いと推察される。曲輪北西端部に標高34.3mと周りより1mほど高い方形の場所があるが、城館に関連するのか後世の盛土なのか分からなかった。一曲輪との通路は現在宅地のある部分であろう。一曲輪南東にあたる細長い張出部分から橋が架かって内堀を渡るようになっていたと考えられる。三曲輪から外堀を渡って外側へと出入りする場所については南西側が最も有力である。



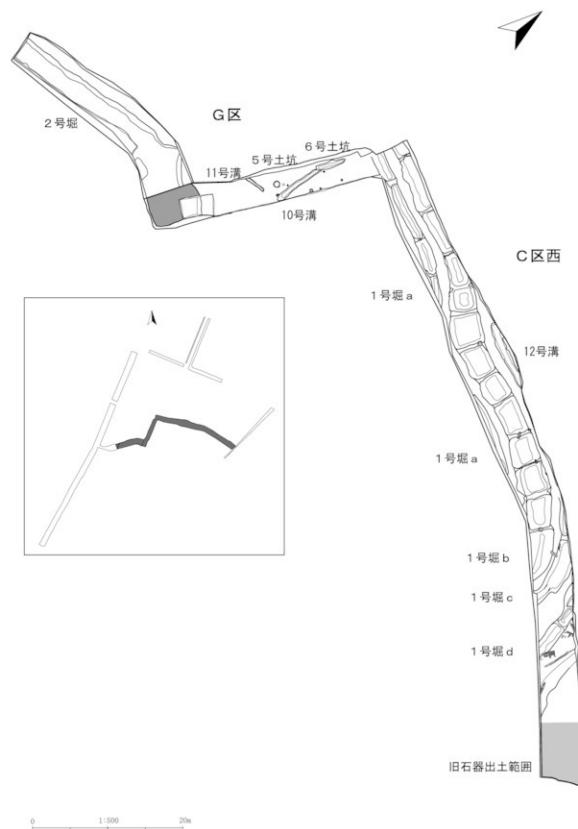
第44図 中畠村古絵図



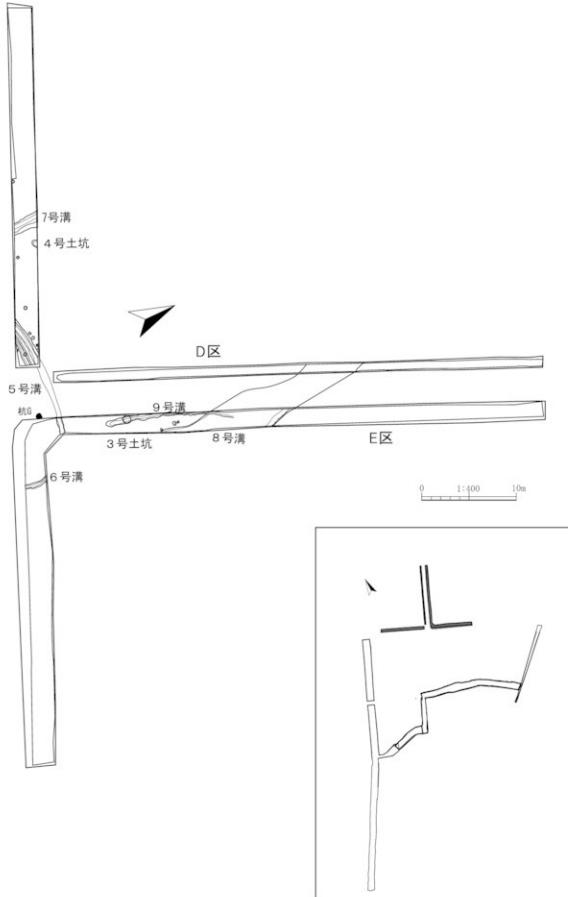
第45図 中畠城全体図



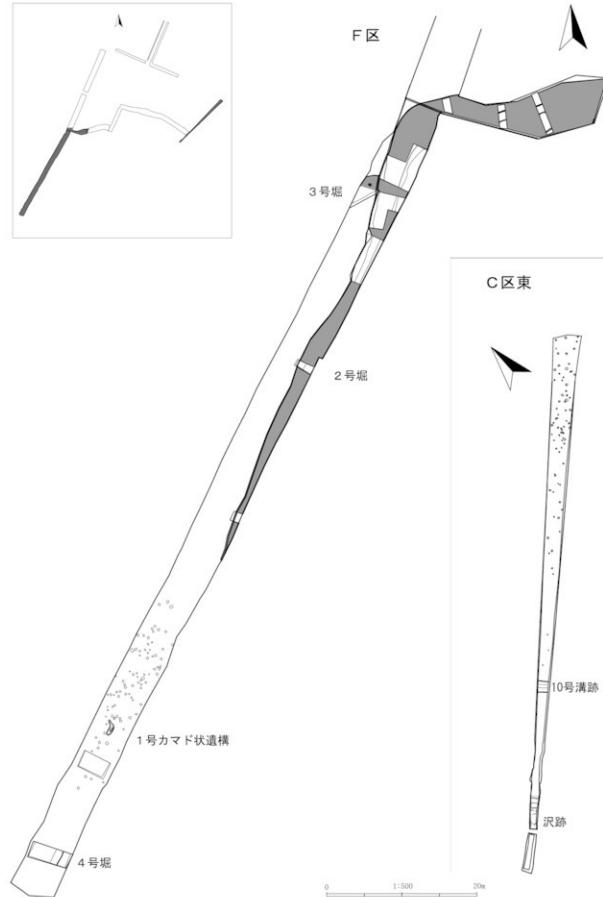
第46図 遺構配置図1



第47図 遺構配置図2



第48図 遺構配置図3



第49図 遺構配置図4

ると考える。それは古絵図に南西隅から北東隅へと直線的に道路が描かれていること、現在も南西隅にあたる場所には曲輪内に入るように道路があることを根拠としている。曲輪の南西隅から外に出たら、そのまま南西－西側へと進み、現道と同じ場所に旧明後沢川を渡る橋が架かっていたのではないかだろうか。

馬出し 古絵図から北側の外堀の北に台形状の小規模な曲輪らしき平場が見つかっている。東西50m、南北25m、標高32.8mと一曲輪の三分の一程度の広さしかない。その形状から馬出しと思われるが、発掘調査で確認したわけではない。古絵図に描かれた地割を見る限り、馬出しから外へ出るのは東側からと推測される。この平場が馬出してあるならば二曲輪に虎口があったことになるのであるが、その場所についてはよく分からなかった。

その他 古絵図の解説でも述べるがここに掲げた曲輪の他に、馬出し及び二曲輪の北側にもう一つ曲輪が存在するかもしれないこと、三曲輪の南側にも更に一つ曲輪がある可能性を指摘した。何れも現時点では不明瞭な部分が多く決め手を欠いているが、別な古絵図の発見や発掘調査などが実施されれば明らかにできるであろう。一曲輪の東側にも曲輪があると城館としては理想的だと思うが、現時点ではよく分からぬ。検討史料もなく今後の課題として残っている。

2 基本層序

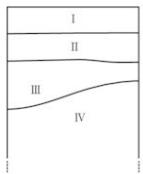
調査区の殆どが水田でありその下に旧表土がのこっている場所は僅かしかなかった。遺構検出は基本的に地表面（Ⅲ層）で行ったが、堀跡はⅢ層よりもやや上層から精査を始めた。

I層 暗褐色土～黒褐色土：現在の表土・水田の耕作土（30～40cm）。

II層 黑褐色土：旧表土でその残りはよくなない（0～20cm）。

III層 黄褐色土：地山。遺構検出面。上位からは旧石器が出土（30～70cm）

IV層 褐色砂礫層：部分的にみられる。直径5～10cm大の円礫。（層厚不明）



第50図 基本土層

3 検出遺構

検出された遺構には中世の堀跡4条、古代の溝跡6条、旧河道1箇所、旧石器集中区1箇所他である。複数ある堀跡はそれが間仕切りを有する「障子堀」であることが判明した。出土遺物から16世紀に構築されたと言え、県内では金ヶ崎町にある柏山館跡に次ぐ2例目で極めて珍しい事例である。

（1）堀跡

1号堀跡（第51～54図、写真図版46・47・51～58）

【位置・検出状況】1号堀跡は中畠城跡の二曲輪を囲む北側の外堀である。A区とC区にて検出され

ている。検出面はⅡ層上面であるが、C区ではⅠ層の途中から掘削を重機から手掘りに換えて精査した。

【規模・形状】1号堀の全長は、調査区外まで達している部分も含めて凡そ210mである。西は旧明後沢川から始まり、やや北に膨らみながら東に伸び、南に曲がって内堀と合体するようである。

本遺構は堀内部に障壁（築）を多段配置する「障子堀」であることが判明した。実際に各調査区で検出された部分の計測値（単位はm）は下表のとおりである。

遺構名	A区			C区			全体
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	
1号堀a	7	2.6	0.6	45	1.8-0.9	0.6-0.3	210
1号堀b	7	2.8	0.9	60	4.3-3.1	0.8-0.4	
1号堀c	7		0.7	15	2.6-1.4	0.5	
1号堀d	7	8.5		10	1.8	0.6	

1号堀跡の障壁堀は、まずa～dの細長い4条の堀からなり、これらの堀が横に並べられて1条の堀となっている。1号堀a～dそれぞれに障壁が設けられているが何れも地山をそのまま利用したものであり、後から粘土などを積んで造られたものではない。障壁の高さは基本的に各堀の深さと等しい。障壁と障壁との間隔は8.5～3.5mとばらつきがあるが、これは意識的にそうしていると理解される。深さについても同じである。障壁は堀の長さに対してほぼ直交するように設けられている。直線的なもので、折れ曲がるものや、曲線的なものはない。こうしたことから上から見ると長方形や方形の升が不規則に連なっているように見える。それぞれの底面は概ね平坦である。

障壁のいくつかには上部部に浅い溝が掘られているものがある。これは堀の中に溜まった水が溝へと徐々に流れしていくように設けられた導水溝と考えられる。今回の調査ではこのような小溝が7箇所で確認されている。

1号堀跡に関しては旧明後沢川と接続していること、障壁に導水溝が設けられていること、障子堀そのものが水を張ってその姿を隠したうが防護施設としてより有効であることなどから、水堀であったと解釈される。

逆茂木、橋脚の痕跡なども注意して探したが見られなかった。

【埋土】C区に於いては何れも自然堆積と判断されたが、A区になると様相が異なる。A区でも1号堀c・dは基本的に自然堆積であったが、1号堀a・bでは底面近くに堀が機能していたときに堆積したとみられる泥があり、その上は地山ブロックを多量に含む人為堆積で埋め戻されていた。廃城となったときに土塁を崩して堀を埋めたのかもしれない。その後、同じ場所に小さな溝が出来ていたようであるが、これは17世紀以降であろう。

【出土遺物・時期】（第67～72図、写真図版66～71）今回の調査で得られた遺物の9割は1号堀跡のC区からの出土で陶器やかわらけ、木製品、金属製品、獸骨などが出土した。何れの遺物も壊れたものを堀に捨てたような状態で見つかっており、完形品はない。獸骨なども散在して出土しており、祭祀を示すような出土状況のものはない。個々の遺物の特徴については4節で記述する。

瀬戸美濃産陶器は何れも大窯期のものであった。17世紀代の遺物、15世紀以前の遺物も基本的には見られないことから、本遺構は16世紀代に構築され、16世紀末には廃絶したと考えられる。

2号堀跡（第55・56図、写真図版48～50）

【位置・検出状況】2号堀跡は中堀城跡の一曲輪を圍む内堀である。今回の調査ではF区からG区にかけて見つかったが、F区は検出のみ、G区は精査まで行っている。検出面はF区がⅢ～Ⅳ層、G区はⅡ層上面である。

【規模・形状】2号堀跡は一曲輪を全て圍むので全長は約350mとなる。調査したのは西部（F区）から北西部（G区）のみで、調査区の関係で堀幅がきちんとあらわしているところはない。調査区内で測定した2～4号堀跡の規模（単位はm）は下表のとおりである。

遺構名	F区			G区			全長
	長さ	幅	深さ	長さ	幅	深さ	
2号堀跡	67	5	1.2	45	6	1.5	1 350
3号堀跡	4	2.5	0.4	-	-	-	0 30
4号堀跡	-	-	0.7	-	-	-	0 150

G区における2号堀は1号堀跡と断面形が異なる。1号堀跡は断面形が逆台形を基調としていたのに対して2号堀跡は中段・下段といった具合に少なくとも2つの段差が付くようである。そしてこの下段・つまり最も深くなる部分に障壁が造られていることを確認した。2号堀跡は調査区の外に延びているため堀の幅が不確実であるのだが、調査区外の現況をみると限り1号堀跡のように複数の列を成さずに1列のみと推測される。によって障子堀というよりも「畝堀」と称したほうが適切かもしれない。障壁は1号堀跡と同じく地山をそのまま掘り残して利用したものである。

橋脚や柵などの施設も注意して探したが見つからなかった。

F区における2号堀跡は基本的に確認調査区であることから、基本的に検出しとその段階での実測である。部分的に底面まで掘り下げを行つて3号堀跡との新旧関係や障壁の有無などを調査した。その結果、本遺構が3号堀跡よりも新しいように断面では見えた。また障壁については検出されず、この内堀もF区にくると障壁を持たない堀へと変わることが分かった。

2号堀跡も1号堀跡と同じ理由から水を漲えた堀跡であったと考えられる。

【埋土】F区もG区も基本的に自然堆積と判断された。本遺構と3号堀跡との新旧関係はあまり自信がないのだが、本遺構のほうが新しいように断面では見えた。これは使用されていた時期というよりも堀としての機能が失われた後の埋まり方の早さの違いなのかと思われる。

【出土遺物・時期】（第67・68図、写真図版66～69）G区から陶磁器片やかわらけ、木製品が出土した。何れも16世紀代のもので、15世紀や17世紀以降の遺物は出土しなかった。その場に置かれたもの、祭祀を意図する出土状況を呈するものはなかった。

16世紀に構築され、16世紀末葉に廃絶したと考えられる。

3号堀跡（第55図、写真図版49）

【位置・検出状況】旧明後沢川から一曲輪を圍む内堀の西側に向かって延びている。その一部をF区にて検出した。

【規模・形状】調査区内には3号堀跡の一部が入っているに過ぎない。その規模については前表に記したとおりである。1号堀跡のように西～東北東方向に延びていると推測される。堀跡というよりも二曲輪と三曲輪を分ける区画溝といったほうが適切かもしれない。

【埋土】自然堆積である。本遺構と2号堀跡は重複しており、あまり自信はないのだが本遺構のほう

が古いと判断した。

【出土遺物・時期】遺物は出土しなかった。広い意味で他の堀跡と同時期であろう。

4号堀跡（第57図、写真図版45）

【位置・検出状況】旧明後沢川から三曲輪を圍むように巡る南側の外堀である。F区の南端部にてその一部を検出した。

【規模・形状】4号堀跡は確認調査区内にその一部が入っているのみである。その規模については前表に整理した。旧明後沢川から始まり、三曲輪を圍むように南側に影らみ最後は北側に向きを変えて一曲輪南東端部で内堀と接続する。トレンチを1箇所入れて中を確認したが障壁はなかった。形状としてはF区にある2号堀跡の形状と似ている。

【埋土】自然堆積である。旧明後沢川から近いせいいか底面近くまで掘り下げると湧水してきた。堀が機能していた時は水堀であったと考えられる。

【出土遺物・時期】陶磁器などの時期を示すような遺物は出土していないが、1～3号堀跡と同じく16世紀の遺構である。

（2）土 坑

5基の土坑を検出したがその用途や性格が明らかになったものは少ない。個々の内容については下表に整理した。

第11表 土坑類はか観察表

遺構名	位置	規 模	形狀 底面	埋 土	計測値の単位：cm	
					長軸	短軸
1号土坑	B区北	(120)、92.12	不整形 六角形四面	地山ブロックと岩塊を小量含む黒褐色 研磨シルト	なし 不明	
2号土坑	B区北	105、90)、32	不整形 六角形	シルト	なし 不明	
3号土坑	E区	85、84、39	不整形 六角形四面	灰色粘土筒を多量に含む人為堆積	土器罐・消泡器片 平安時代	
4号土坑	D区	84、(50)、65	不整形円形 六角形四面	黒褐色・黒色土を主体とする自然堆積	不明	
5号土坑	G区	90、84、30	円形 平型	黒褐色土を中心とする自然堆積	なし 平安時代	
6号土坑	G区	402、96、23	長方形 平型	大小岩粒を小量含む褐色灰褐色土質シルト	なし 平安時代	
1号カマド状遺構	F区	158、61、13に張り出 しや56	不整形圓形 六角形四面	底面の少しうらいで燒土層あり、底面 付近は焼粒を多量に含む黒色土、自然 堆積	なし 中世後半	埋接・露出 が確認され

（3）カ マ ド 状 遺 構**1号カマド状遺構（第58図、写真図版64）**

F区の南端部にある。不整形円形の燃焼部の底部には炭が薄く敷かれたようになつた。その上には焼土粒を多く含む層となる。北側に細長い張出があり煙出の可能性が高い。本施設の上部は完全に削られしており残っていない。周囲には多くの柱穴があるが、本遺構と直接関係のあるものを抽出することはできなかつた。

(4) 溝 跡(第59~62図、写真図版60~64)

溝跡は主に二曲輪の外側(北側)で見つかっている。時期不明のものも多いが、その特徴については下表にまとめた。

第12表 溝跡観察表

遺構	位置	規 模 長軸、短軸、深さ	方向	埋土、重複など	計測値の単位:m	
					出土遺物 時期	その他
1号 溝跡	B区	(6.1)/4.4/0.4	西北西~ 東南東	上辺は自然堆積、下辺は人為堆積か、2 引跡より新しい。	須恵器剥片 平安時代~	
2号 溝跡	B区	(6.7)/2.6/0.3	北西~東 南東	上辺に十和田瓦しき火山灰ブロックあ り。1号跡跡より古い。	平安時代	
3号 溝跡	B区	(7.1)/0.4/0.1	北~南東	理土薄く、自然堆積か人為堆積かよくわ からない。	不明	
4号 溝跡	B区	(4.9)/0.2/0.1	北~南東	理土薄く、自然堆積か人為堆積かよくわ からない。	不明	
5号 溝跡	D+E 区	(12.8)/2.1/0.4	東~西	黒褐色土の単層。	調文土器片、土師 器、須恵器 平安時代	
6号 溝跡	E区	(2.4)/0.5/0.1	南北	黒褐色土の単層。	不明	
7号 溝跡	D区	(2.7)/1.5/0.2	南北	黒褐色土を主体とする自然堆積か。	不明	
8号 溝跡	D+E 区	(10.1)/4.6/0.5	西北~南 東	黒褐色土を主体とする自然堆積。9号溝 跡より古い。	近世爲器類・金属 器、土師器、須恵 器 近世 しれない。	平安時代から近世ま で開口していたかも
9号 溝跡	E区	(13.5)/0.5/0.1	南北	黒褐色土を主体とする自然堆積。8号溝 跡より新しい。	土師器、須恵器 近世	
10号 溝跡	C区	(1.3)/1.4/0.2	北西~南 東	直跡なし。	平安時代~	1号溝跡と同じもの の可能性高い。
11号 溝跡	G区	(6.5)/0.7/0.1	西北西~ 東南東	黒褐色土に地山ブロックや块状を微量含 む。	平安時代から	
12号 溝跡	G区	(2.8)/0.4/0.1	東北東~ 西南西	黒褐色土に地山ブロックや块状を微量含 む。	不明	
13号 溝跡	C区	(6.5)/0.7/0.1	東~西	黒褐色土に地山ブロックが少載。	平安時代	

8号溝跡はC区の東側にある沢跡と同じものの可能性がある。

(5) 柱 穴 群(第64~65図、写真図版65)

A区の南側、B区の北側、C区の東側、Fの南側に分布している。A区の柱穴群が二曲輪内部、B・C区が二曲輪の外部、F区が三曲輪内部に相当するが、遺構に伴う形で遺物が出土したものはない。個々の柱穴の内容については一覧表にまとめた。なお、C区柱穴群の中には掘立柱建物跡になりそうなものが1箇所あるので図示している。(第64図)が、調査区の幅が狭いため確認ではない。周囲からは12世紀の陶器片が出土しており、C区柱穴群と建物跡は12世紀の可能性がある。A・F区の柱穴群は中畠城に伴う可能性が高い。

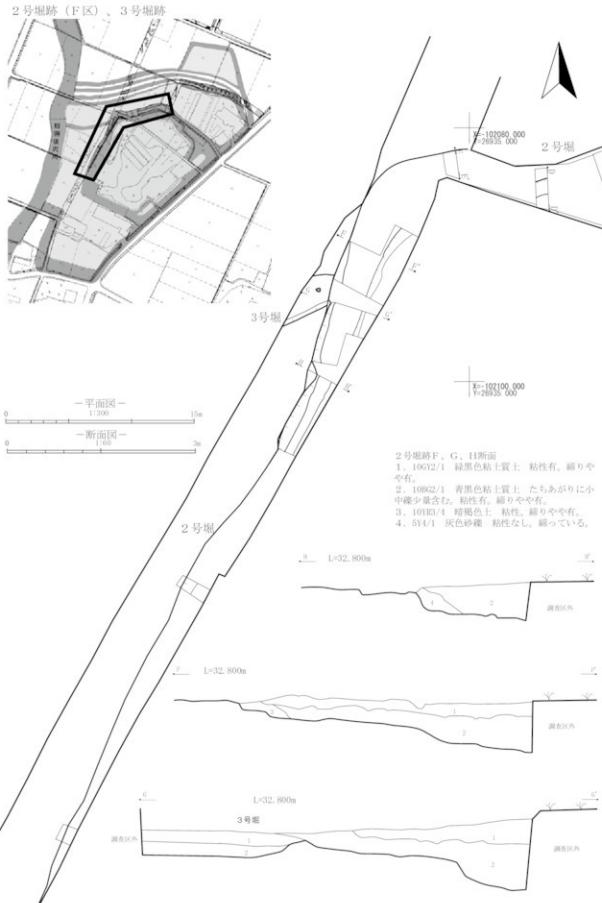
(6) 旧石器集中区(第66図、写真図版64)

C区の南東隅で1箇所の旧石器集中区が確認された。細長い調査区のため、全体的な広がりを把握することはできなかったが、凡そ6m四方に分布しているようである。石器類はⅢ層の表面～20cm掘り下げた間にほぼ収まる。実際にこれはよりもさらに深くまで掘り下げて遺物の有無を調査し、出土しないことを確認した。今回の調査では石器集中区がこの1箇所のみであった。周囲の調査区をみると南側にこの集中区よりも約2m高い場所(中畠城跡の一曲輪にあたる)があるので、そこにも石器集中区が形成されている可能性が高い。むしろ本遺構より主なる活動域であったと思われる。各石器の特徴や石器の出土した層位などは本遺跡の南隣にある水尻遺跡の石器群と似ている。後期旧石器時代前半期、概ねA-T段階前後までの石器群と考えられる。

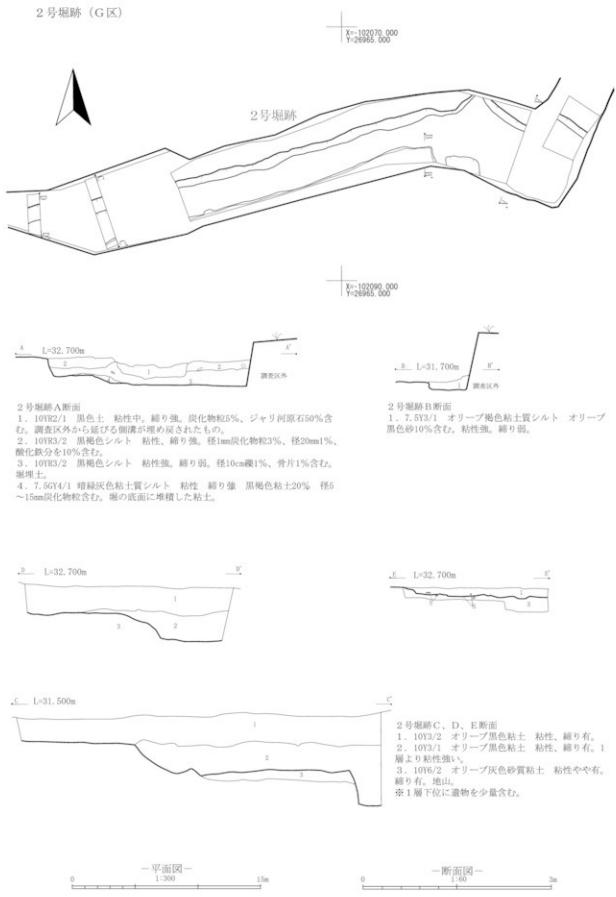
(7) 自然地形・沢跡(第55図、写真図版62)

自然地形 遺跡北西部のB区にある。東西約7m、南北約10mにわたり不整形な落ち込みを検出した。確認調査区であったため、一部分のみを掘り下げて下部の状況を観察した。それによると深さは10cm～27cm程あり、底面不規則形な形をしていることが分かった。近現代の遺物は出土していないので中世かそれ以前のものであろう。

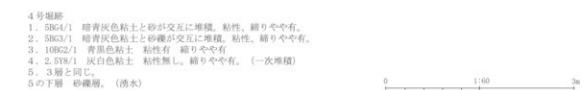
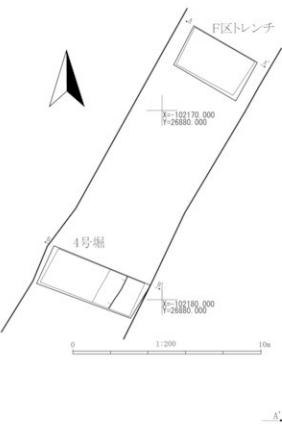
沢跡 C区の東側で1号堀跡と重複した状態で検出された。1号堀跡よりは古い。調査区外にも達しているため全体の規模は不明であるが長さ6.4m、幅3.1mほどが検出されている。深さは0.3mを測る。平面的には検出された沢跡のはば全体、層位でいえば底面付近を中心とした大小の自然木が多量に見つかった(大コンテナ換算で20箱)。この場に置かれていたといふよりは、その多くは流溜まったような状態で分布していた。埋土上位には十和田瓦火山灰が薄く堆積しており、この火山灰も降下後それほど動いていない状態で見つかった。このことから自然木群については十和田瓦火山灰降下の直前頃に流溜まったものである可能性が高い。同じ層位からは土師器が出土しており、こちらも十和田瓦火山灰降下直前頃のもので、重なるように出土しており何れも共判関係にある。自然木群は1号堀跡が中世後半に掘られた際には削りとられており、本来もっと多くの自然木が広がっていたと推測される。



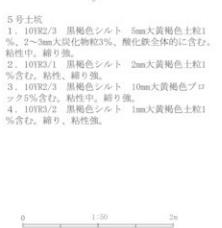
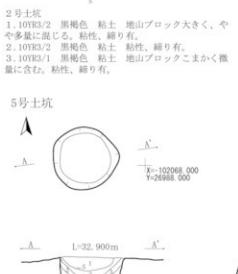
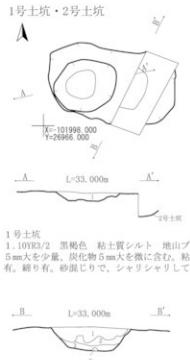
第554図 2号堀跡 (F区)、3号堀跡



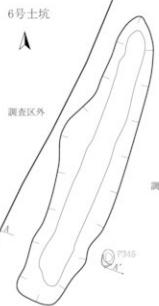
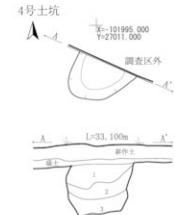
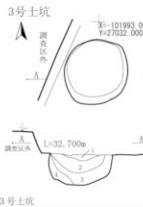
第554図 2号堀跡 (G区)



第57図 4号塚、F区トレーニチ



0 1:50 2m

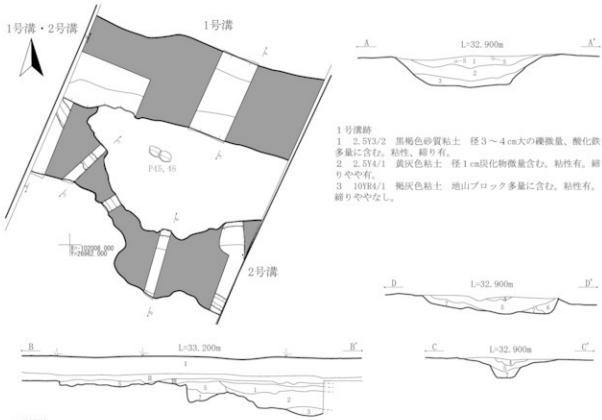


カマド状遺構



0 1:50 2m

第58図 1~6号土坑、カマド状遺構



2号溝

I. 10Y3/2 (やや明るめ4/2に近い) 黒褐色粘土シルト 縮りやや有。粘性有。表土。下面に酸化したうすい層(灰土)が有。

II. 10Y3/2 黑褐色粘土 縮り、粘性有。旧木頭土。

III. 酸化した木土層。

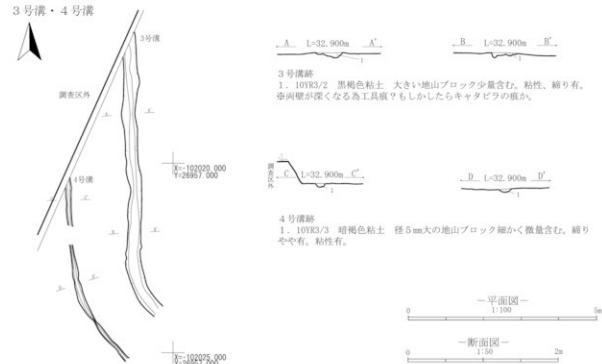
1~3層 1号溝。土層観察は、1号溝のA断面と対応する。

4. 10Y3/1 黑褐色粘土 上面(被出面)に灰白色ブロック(十和田大火山灰か?) 少量含む。縮り、粘性有。

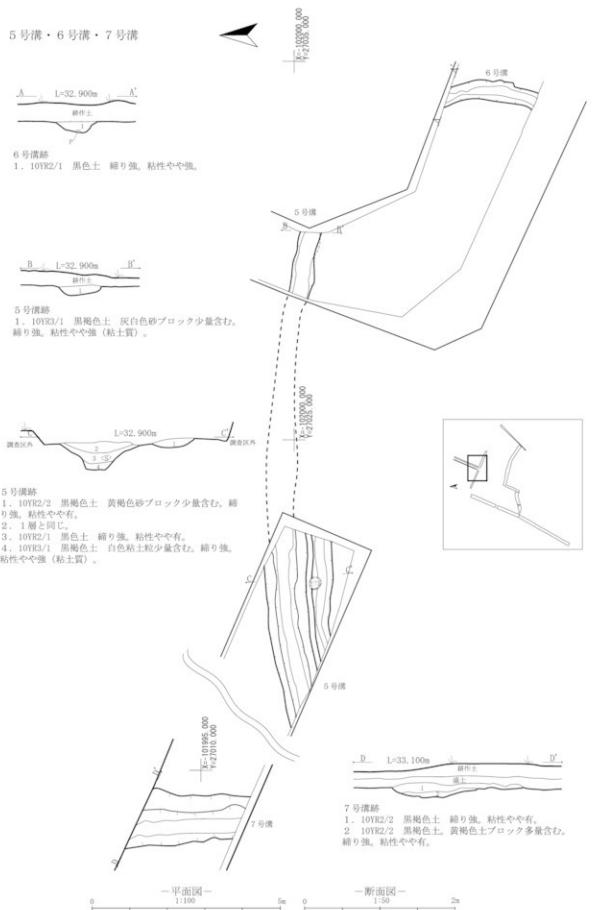
5. 10Y3/2 黑褐色粘土 地山ブロック少く炭化物含む。縮り、粘性有。

6. 地山(10Y3/6黄褐色) 地山ブロック層(?) 黑褐色粘土少量含む。

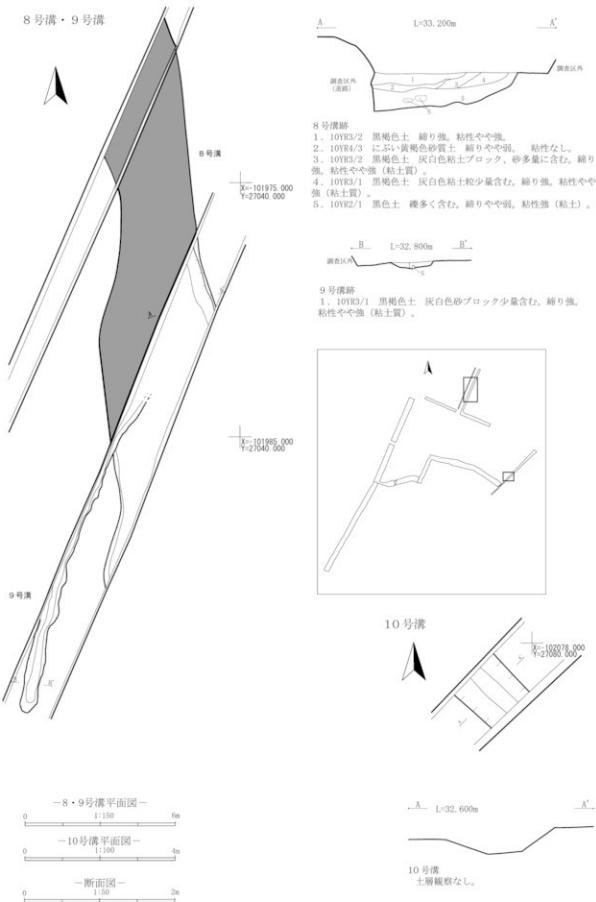
7. 10Y3/2 黑褐色粘土 地山(ブロック層状)にやや多量含む。縮り、粘性有。



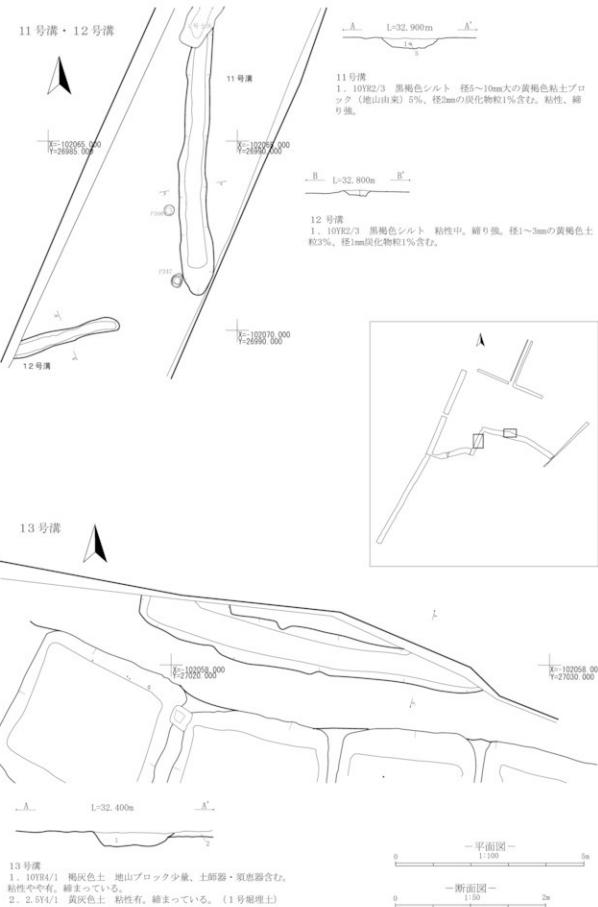
第59図 1~4号溝跡



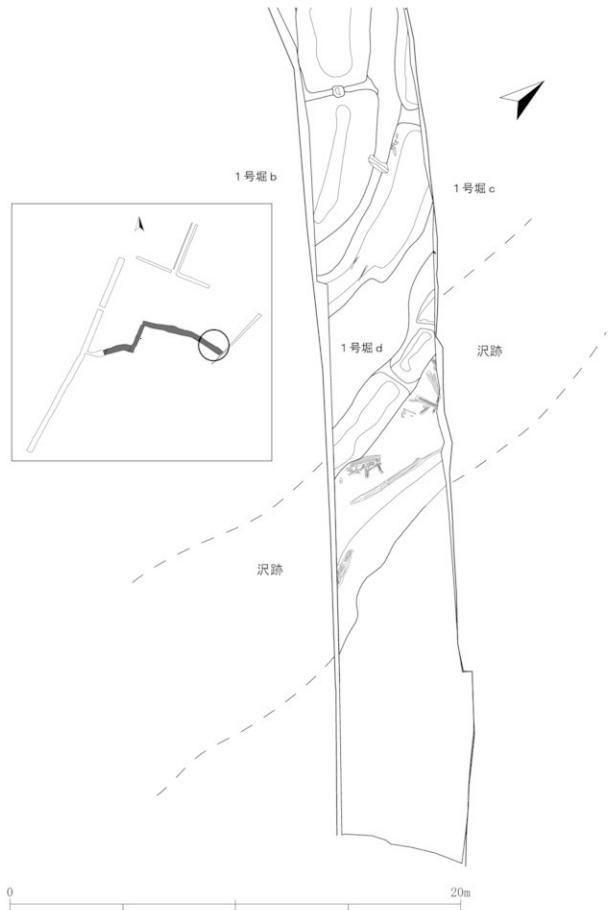
第60図 5~7号溝



第61図 8~10号溝跡



第62図 11~13号溝跡



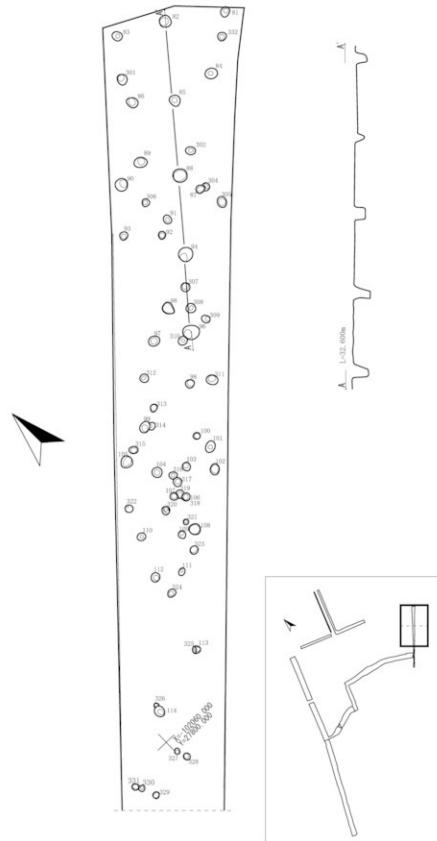
第63図 自然地形、沢跡

柱穴群 (C区東)

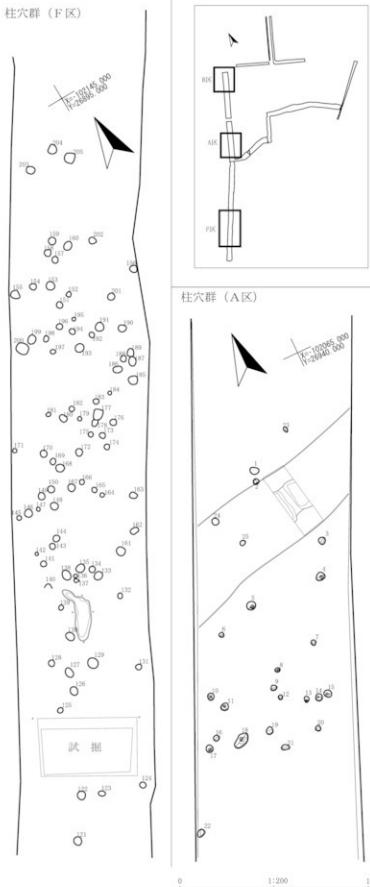


0
1:100
5m

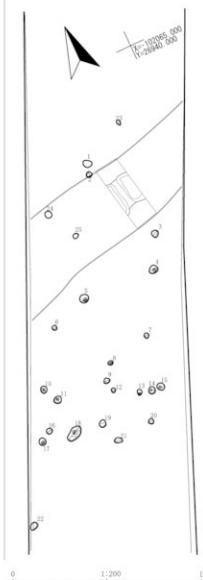
第64図 柱穴群(C区)



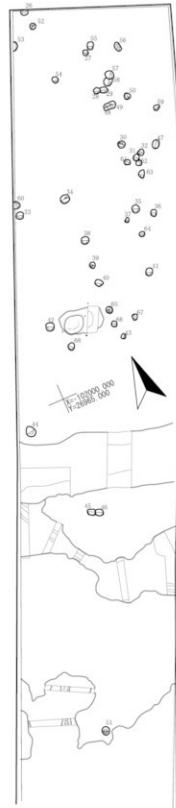
柱穴群 (F 区)



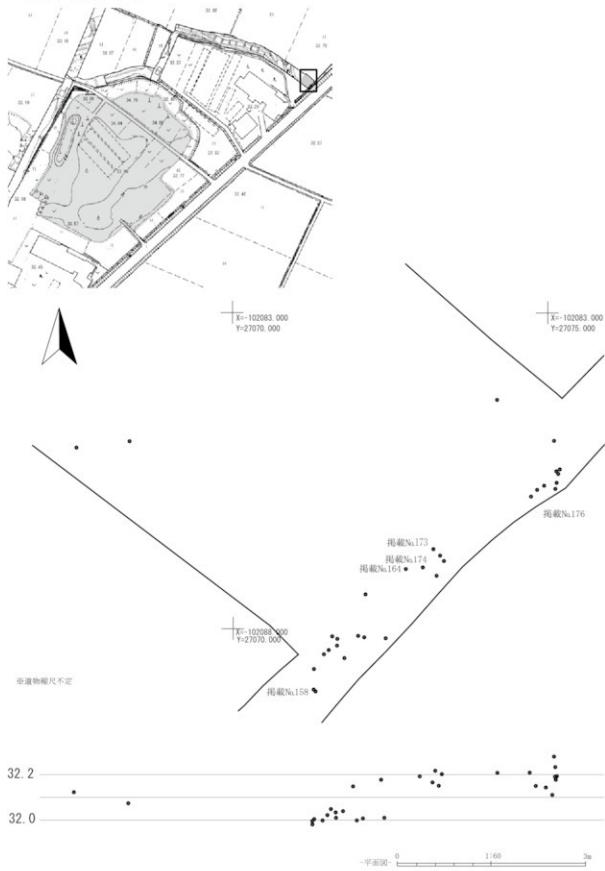
柱穴群 (A 区)



柱穴群 (B 区)

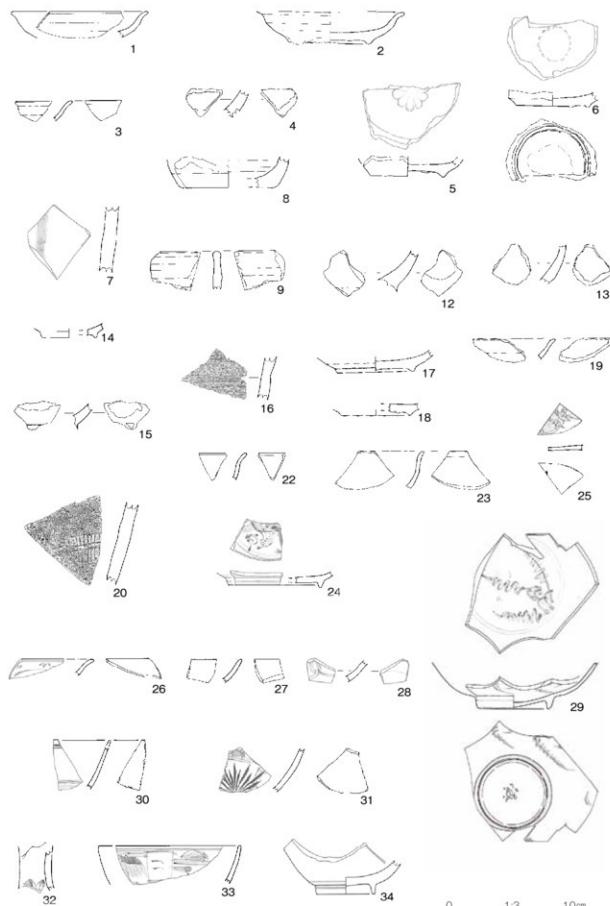


旧石器出土範囲 (C 区)

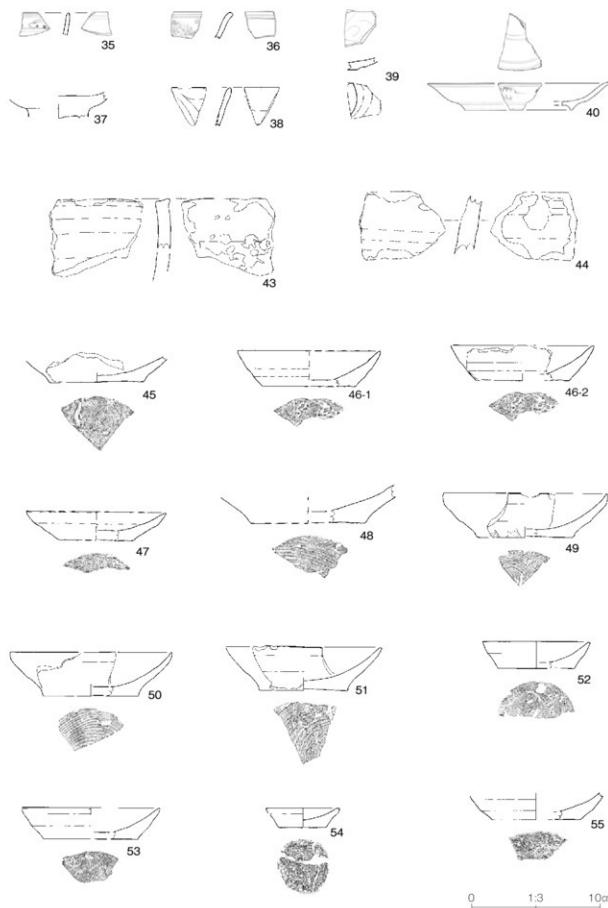


第65図 柱穴群(A+B+F区)

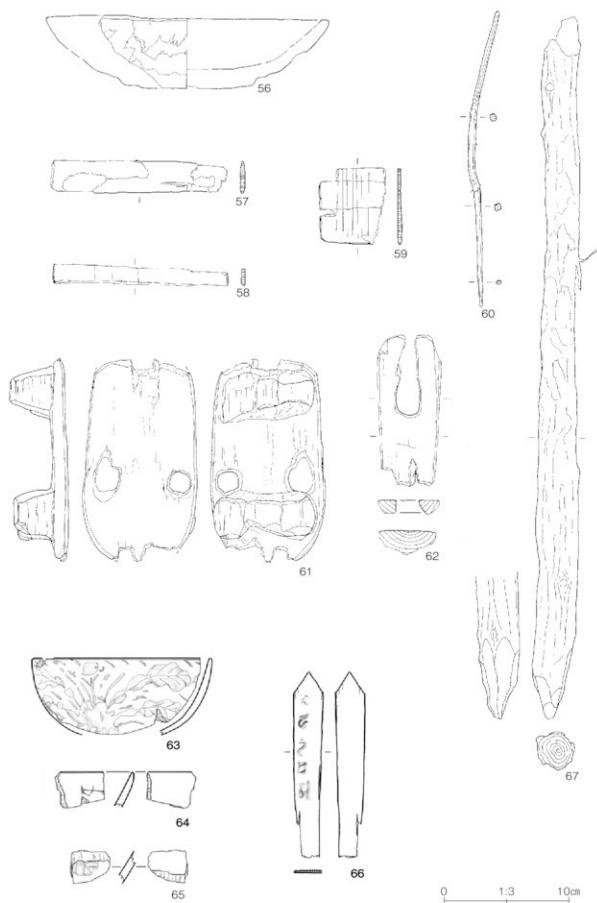
第66図 旧石器出土地点



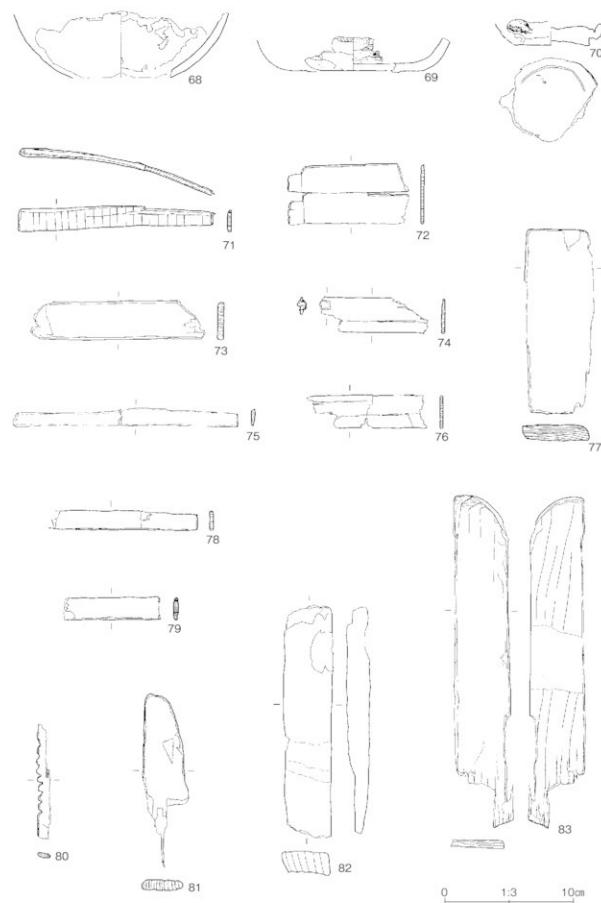
第67図 陶磁器1



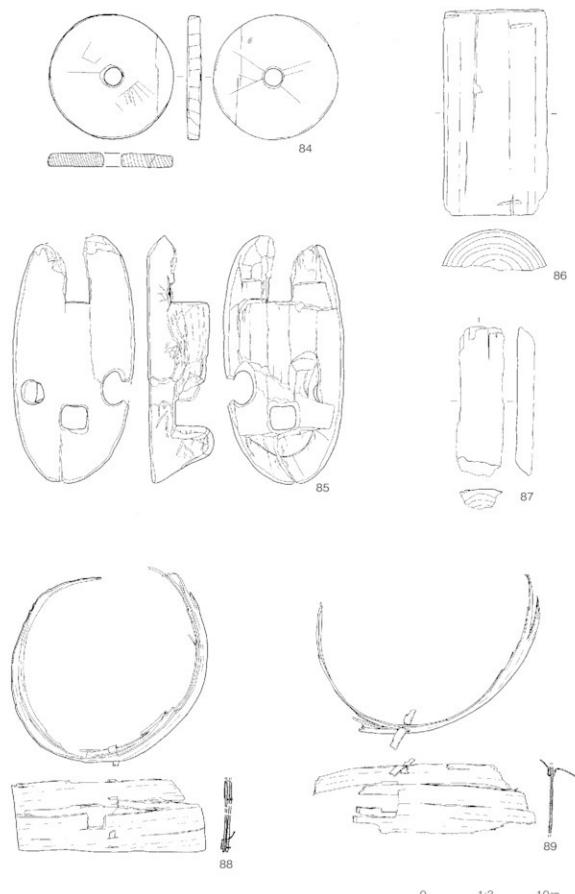
第68図 陶磁器2. かわらけ



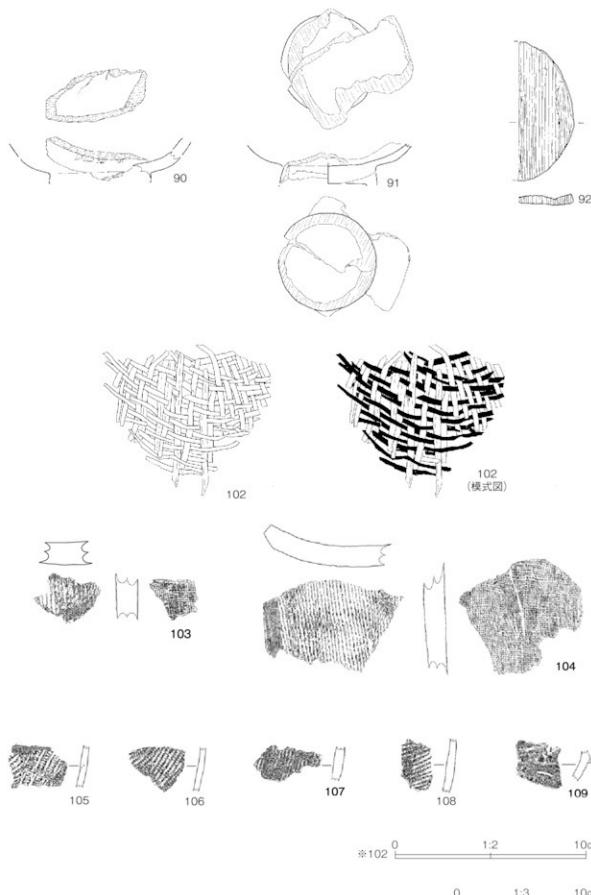
第69図 木製品1



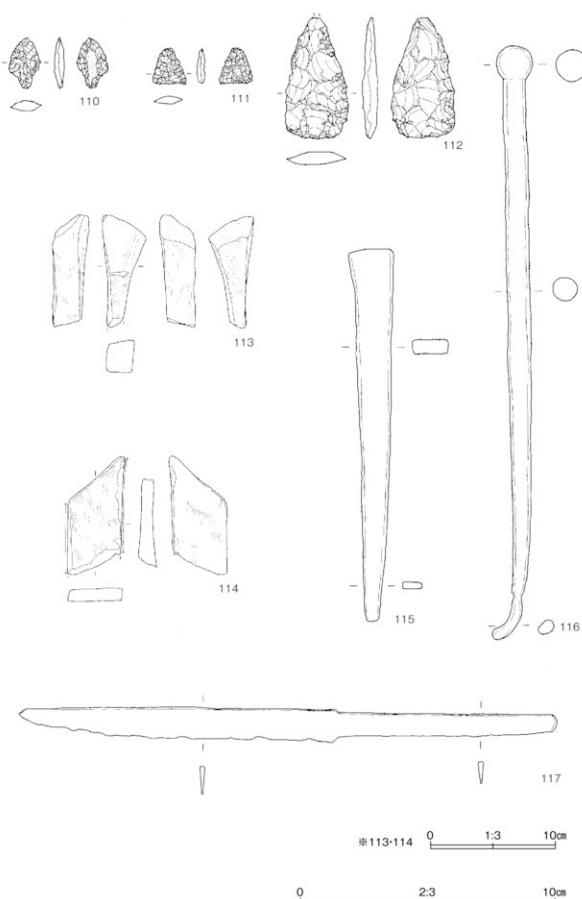
第70図 木製品2



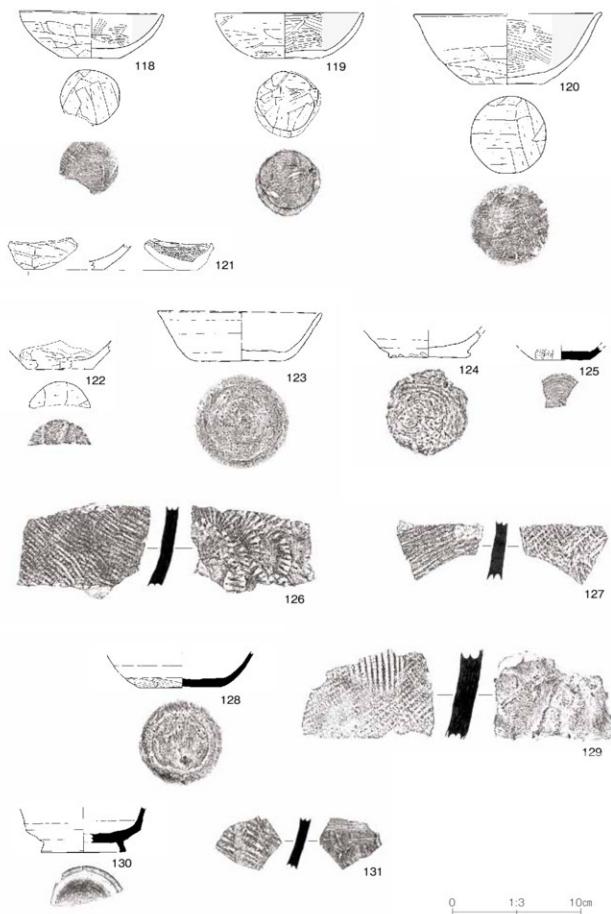
第71図 木製品3



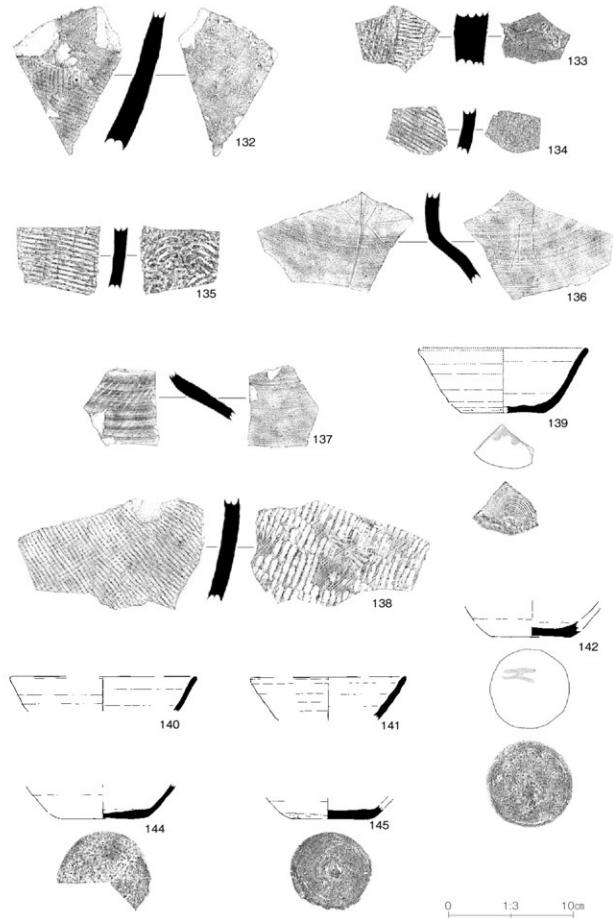
第72図 木製品4、瓦、縄文土器



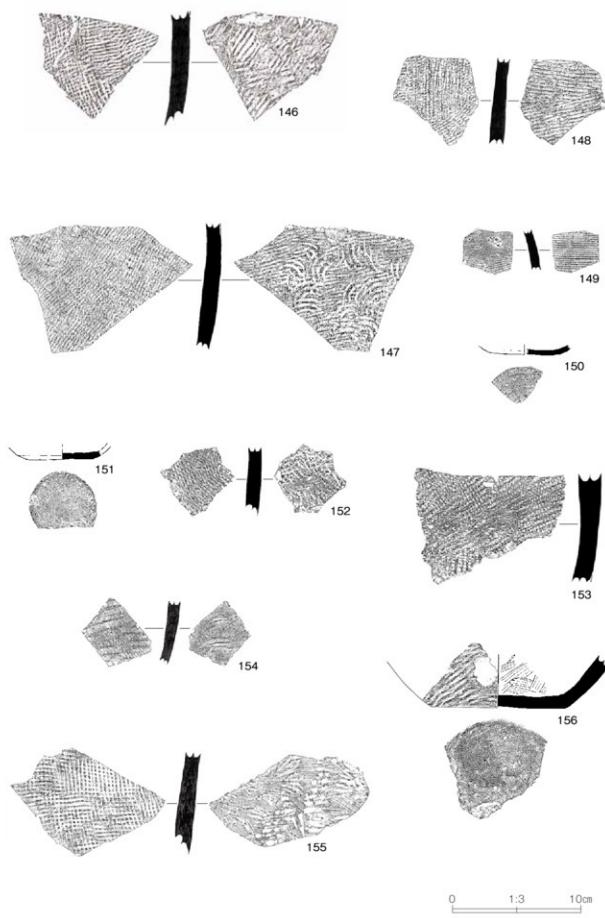
第73図 石器(縄文)、鉄製品



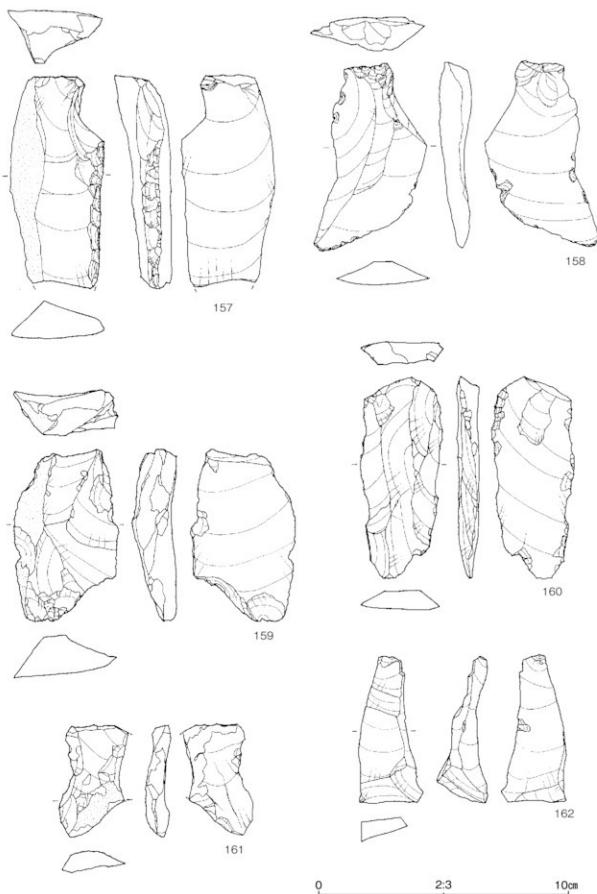
第74図 土師器・須恵器1



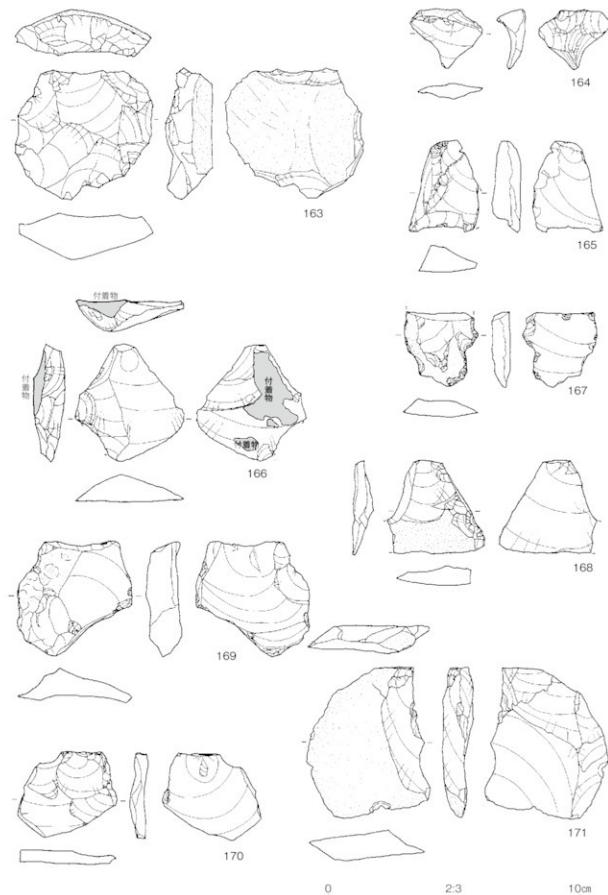
第75図 須恵器2



第76図 須恵器3



第77図 石器1



第78図 石器2

VI 自然科学分析

1 放射性炭素年代測定

八反町遺跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

八反町遺跡は、岩手県奥州市前沢区古城字南八反47番地1ほかに所在する。測定対象試料は、SX2埋土出土木片（63：IAAA-112765）、SX3埋土出土木片（59：IAAA-112766）の合計2点である（表1）。

2 測定の意義

遺構の時期決定の一助とする。

3 化学処理工程

- (1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。
- (2) 酸-アルカリ-酸（AAA：Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/l? (1M) の塩酸（HCl）を用いる。アルカリ処理では水酸化ナトリウム（NaOH）水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合は「AaA」と表1に記載する。
- (3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素（CO₂）を発生させる。
- (4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。
- (5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出（水素で還元）し、グラファイト（C）を生成させる。
- (6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイルにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした14C-AMS専用装置（NEC社製）を使用し、¹⁴Cの計数、¹⁴C濃度（¹⁴C/¹²C）、¹³C濃度（¹³C/¹²C）の測定を行う。測定では、米国国立標準局（NIST）から提供されたシュウ酸（HOx II）を標準試料とする。この標準試料とバックグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

- (1) $\delta^{13}\text{C}$ は、試料炭素の¹³C濃度（¹³C/¹²C）を測定し、基準試料からのずれを千分偏差（‰）で表した値である（表1）。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と記する。
- (2) ¹⁴C年代（Libby Age : yrBP）は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年（yrBP）として測る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期（5568年）を使用する（Stuiver and Polach 1977）。¹⁴C年代は $\delta^{13}\text{C}$ によって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差（ $\pm 1\sigma$ ）は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が96.2%であることを意味する。
- (3) pMC (percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹³C濃度の割合である。pMC が小さい（¹³Cが少ない）ほど古い年代を示し、pMCが100以上（¹³Cの量が標準現代炭素と同等以上）の場合Modernとなる。この値も $\delta^{13}\text{C}$ によって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 暴露較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。暴露較正年代は、¹⁴C年代に対応する較正曲線上の暴露年代範囲であり、1標準偏差 ($1\sigma = 68.2\%$) あるいは2標準偏差 ($2\sigma = 95.4\%$) で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が暴露較正年代を表す。暴露較正プログラムに入力される値は、 $\delta^{13}\text{C}$ 補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、暴露較正年代の計算に、IntCal09データベース（Reimer et al. 2009）を用い、0xCa1v4.1較正プログラム（Bronk Ramsey 2009）を使用した。暴露較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに入力する値とともに参考値として表2に示した。暴露較正年代は、14C年代に基づいて較正（calibrate）された年代値であることを示すために「cal BC/AD」（または「cal BP」）という単位で表される。

6 測定結果

試料の¹⁴C年代は、SX02埋土の63が 890 ± 20 yrBP、SX03埋土の59が 1100 ± 20 yrBPである。暴露較正年代（ 1σ ）は、63が 1053 ± 120 cal AD、59が 989 ± 98 cal ADの間に各々2つの範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超え、化学処理、測定上の問題は認められない。

表1 [#4918]

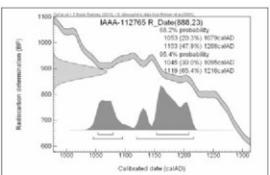
測定番号	試料名	採取場所	測定条件		$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	Libby Age (yrBP)	pMC (%)	$\delta^{13}\text{C}$ 補正値
			測定法	形態				
IAAA-112765	63 (仮番 92)	SX2 埋土	AAA	木片	-30.74 \pm 0.79	890 \pm 20	89.53 \pm 0.27	
IAAA-112766	59 (仮番 268)	SX3 埋土	AAA	木片	-27.92 \pm 0.75	1,100 \pm 20	87.25 \pm 0.25	

表2 [参考]

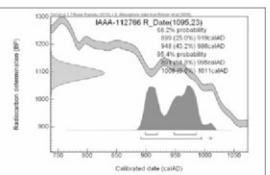
測定番号	$\delta^{13}\text{C}$ 補正値		1σ 暴露年代範囲	2 σ 暴露年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)		
IAAA-112765	980 ± 20	88.47 ± 0.22	888 ± 23	1053calAD - 1079calAD (20.3%) 1153calAD - 1208calAD (47.9%)
IAAA-112766	$1,140 \pm 20$	86.73 ± 0.21	$1,095 \pm 23$	899calAD - 919calAD (25.0%) 948calAD - 986calAD (43.2%) 1008calAD - 1011calAD (0.6%)

文献

Stuiver M. and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, *Radiocarbon* 19(3), 355-363
Brook Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, *Radiocarbon* 51(1), 337-360
Reimer P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, *Radiocarbon* 51(4), 1111-1150



[参考] 暴露較正年代グラフ



中畠城跡における放射性炭素年代（AMS測定）

(株) 加速器分析研究所

1 測定対象試料

中畠城跡は、岩手県奥州市前沢区古城字水上西88番地はかに所在する。測定対象試料は、4号堀跡埋土出土木片(61: IAAA-112763)、A区堀跡埋土出土木片(94: IAAA-112764)の合計2点である(表1)。

2 測定の意義

遺構の時期決定の一助とする。

3 化学処理工程

(1) メス・ピンセットを使い、根・土等の付着物を取り除く。

(2) 酸-アルカリ-酸（AAA: Acid Alkali Acid）処理により不純物を化学的に取り除く。その後、超純水で中性になるまで希釈し、乾燥させる。AAA処理における酸処理では、通常1mol/? (1M) の塩酸(HCl) を用いる。アルカリ処理では液状ナトリウム(NaOH) 水溶液を用い、0.001M から1Mまで徐々に濃度を上げながら処理を行う。アルカリ濃度が1Mに達した時には「AAA」、1M未満の場合には「NaOH」と表1に記載する。

(3) 試料を燃焼させ、二酸化炭素(CO₂) を発生させる。

(4) 真空ラインで二酸化炭素を精製する。

(5) 精製した二酸化炭素から鉄を触媒として炭素のみを抽出(水素で還元)し、グラファイト(C)を生成させる。

(6) グラファイトを内径1mmのカソードにハンドプレス機で詰め、それをホイールにはめ込み、測定装置に装着する。

4 測定方法

加速器をベースとした¹⁴C-AMS専用装置(NEC社製)を使用し、¹⁴Cの計数、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)、¹⁴C濃度(¹⁴C/¹³C)の測定を行う。測定では、米国国立標準局(NIST)から提供されたシュウ酸(HOx II)を標準試料とする。この標準試料とバッケグラウンド試料の測定も同時に実施する。

5 算出方法

(1) ¹⁴C₁₂は、試料炭素の¹⁴C濃度(¹⁴C/¹²C)を測定し、基準試料からのずれを千分偏差(‰)で表した値である(表1)。AMS装置による測定値を用い、表中に「AMS」と記する。

(2) ¹⁴C年代(Libby Age: yrBP)は、過去の大気中¹⁴C濃度が一定であったと仮定して測定され、1950年を基準年(yrBP)として過る年代である。年代値の算出には、Libbyの半減期(5568年)を使用する(Stuiver and Polach 1977)。¹⁴C年代は¹⁴Cによって同位体効果を補正する必要がある。補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。¹⁴C年代と誤差は、下1桁を丸めて10年単位で表示される。また、¹⁴C年代の誤差(±1σ)は、試料の¹⁴C年代がその誤差範囲に入る確率が68.2%であることを意味する。

(3) pMC(percent Modern Carbon)は、標準現代炭素に対する試料炭素の¹⁴C濃度の割合である。pMCが小さい(¹⁴Cが少ない)ほど古い年代を示し、pMCが100以上(¹⁴Cの量が標準現代炭素と同上)の場合Modernとする。この値も¹⁴Cによって補正する必要があるため、補正した値を表1に、補正していない値を参考値として表2に示した。

(4) 历年較正年代とは、年代が既知の試料の¹⁴C濃度を元に描かれた較正曲線と照らし合わせ、過去の¹⁴C濃度変化などを補正し、実年代に近づけた値である。历年較正年代は、¹⁴C年代に対応する

較正曲線上の历年年代範囲であり、1標準偏差($1\sigma = 68.2\%$)あるいは2標準偏差($2\sigma = 95.4\%$ %)で表示される。グラフの縦軸が¹⁴C年代、横軸が历年較正年代を表す。历年較正プログラムに入力される値は、¹⁴C補正を行い、下1桁を丸めない¹⁴C年代値である。なお、較正曲線および較正プログラムは、データの蓄積によって更新される。また、プログラムの種類によっても結果が異なるため、年代の活用にあたってはその種類とバージョンを確認する必要がある。ここでは、曆年較正年代の計算に、IntCal09データベース(Reimer et al. 2009)を用い、0xGa1v4.1較正プログラム(Bronk Ramsey 2009)を使用した。历年較正年代については、特定のデータベース、プログラムに依存する点を考慮し、プログラムに依する値とともに参考値として表2に示した。历年較正年代は、¹⁴C年代に基づいて較正(calibrate)された年代値であることを明示するに「cal BC/AD」(または「cal BP」という単位で表される)。

6 測定結果

試料の¹⁴C年代は、4号堀跡埋土の61が 400 ± 20 yrBP、A区堀跡埋土の94が 420 ± 30 yrBPである。历年較正年代(1σ)は、61が $1446 \sim 1485$ cal AD、94が $1439 \sim 1472$ cal ADの範囲で示される。

試料の炭素含有率はいずれも50%を超えるが、化学処理、測定上の問題は認められない。

文献

- Stuiver M, and Polach H.A. 1977 Discussion: Reporting of ¹⁴C data, Radiocarbon 19(3), 355-363
 Bronk Ramsey C. 2009 Bayesian analysis of radiocarbon dates, Radiocarbon 51(1), 337-360
 Reimer, P.J. et al. 2009 IntCal09 and Marine09 radiocarbon age calibration curves, 0-50,000 years cal BP, Radiocarbon 51(4), 1111-1150

表3

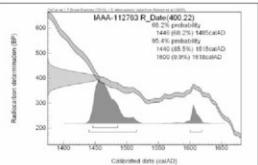
[#4917]

測定番号	試料名	採取場所	試料 形態 (AMS)	処理 方法 (AMS)	$\delta^{14}\text{C}$ (‰)	$\delta^{14}\text{C}$ 補正あり
					Libby Age (yrBP)	pMC (%)
IAAA-112763	61 (仮番920)	4号堀跡 埋土	木片	AAA	-27.66 ± 0.57	400 ± 20 95.13 ± 0.27
IAAA-112764	94 (仮番905)	A区堀跡 埋土	木片	AAA	-31.90 ± 0.96	420 ± 30 94.89 ± 0.32

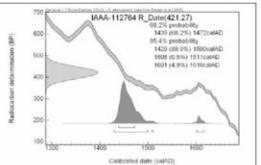
表4

[参考値]

測定番号	$\delta^{14}\text{C}$ 補正なし		历年較正用(yrBP)	1σ 历年年代範囲	2σ 历年年代範囲
	Age (yrBP)	pMC (%)			
IAAA-112763	440 ± 20	94.61 ± 0.24	400 ± 22	1446 calAD - 1485 calAD (68.2%)	1440 calAD - 1515 calAD (85.5%) 1600 calAD - 1615 calAD (9.9%)
IAAA-112764	540 ± 20	93.55 ± 0.26	421 ± 27	1439 calAD - 1472 calAD (68.2%)	1429 calAD - 1500 calAD (89.9%) 1508 calAD - 1515 calAD (0.5%) 1601 calAD - 1616 calAD (4.9%)



[参考]历年較正年代グラフ



2 花 粉 分 析

八反町遺跡の花粉分析

吉川昌伸（古代の森研究会）

1.はじめに

八反町遺跡は、奥州市前沢区古城地区にあり、北上川の右岸側で扇状地の末端付近に立地している。本遺跡では古代の堅穴住居跡や掘立柱建物跡、藤原氏と同時に形成された12世紀後半の溝跡などが確認されている。ここでは、12世紀後半頃の溝内と周辺の植生及び生業を解明することを目的に花粉化石を調査した。

2. 試料と分析方法

花粉分析試料は、SX2の4層(H1)と、SX3南ベルト4層(H2)の2試料である。堆積物は、SX2の4層が灰色細粒砂質シルト、SX3の4層はオリーブ色細粒砂質シルトからなる。

花粉化石の抽出は、試料約1.5gを秤量し体積を測定後に10%KOH(湯煎約15分)、傾斜法と節分(0.25mmの節)により砂と大型の植物遺体を取り除き、48%HF(約15分)、重液分離(比重2.15の臭化亜鉛)、アセトニン処理(濃硫酸1：無水酢酸9の混液で湯煎5分)の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタツミキサーで十分攪拌後、マイクロビペットで取り重量を測定(感量0.1mg)しクリシリエンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、シルト以下の細粒成分、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750°Cで3時間強熱し、強熱による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで75μmより大きいサイズの微粒炭の積算面積を計測した。

3. 結 果

花粉分析試料の堆積物の特性を表1に示す。堆積物は、2試料ともおおむね同様な特性を示し、シリト以下の細粒成分を主とし有機物を12~13%といく分多く含む(表1)。

表1 八反町遺跡の分析試料の堆積物の特性(重量%)

試料	遺構	堆積物の特徴	砂 シルト～粘土		強熱減量 (有機物量)
			砂	シルト～粘土	
H1	SX2-4層	灰色細粒砂質シルト	17.8	69.2	13.0
H2	SX3-4層	オリーブ色細粒砂質シルト	11.6	76.7	11.7

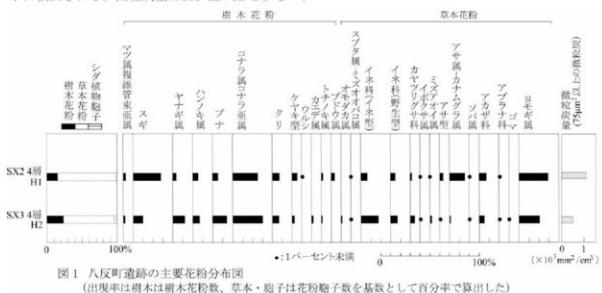
出現した分類群のリストとその個数を表2に、主要花粉分布図を図1に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、クワ科やバラ科で樹木と草本の区別が出来ない分類群は草本花粉としてまとめた。

花粉化石群の組成は、SX2の4層(H1)では、針葉樹のスギと落葉広葉樹のコナラ亞属が比較的の高率で出現し、クリ、ケヤキ型、ブナ、ハンノキ属、ヤナギ属などやつる植物のブドウ属などが出現している。草本では、ヨモギ属とアサ属-カナムグラ属が比較的多く占め、アサ型やアカザ科の頻度がいく分高い。また、イネ科(イネ型)や水生植物のスバ属-ミズオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属が出現し、ソバ属も僅かに検出される。微粒炭量は1128 mm²/cm²と多い。

表2 八反町遺跡より出現した花粉化石の一覧表

和名	学名	SN2	
		H1	H2
樹木			
マツ属複雑葉束葉属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diplosylon</i>	3	2
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.f.) Don	30	10
ヤナギ属	<i>Salix</i>	4	12
サワガニ属	<i>Pterocarya</i>	-	1
クヌギ属	<i>Juglans</i>	1	1
クマシダ属-アサグ属	<i>Carpinus - Ostrea</i>	-	1
ハシバミ属	<i>Corylus</i>	-	1
カバノキ属	<i>Betula</i>	3	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	6	7
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blume	6	14
イヌクチ	<i>Fagus japonica</i> Maxim.	1	-
コナラ属コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lepidobalanus</i>	27	30
コナラ属アカガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanus</i>	-	2
タリ	<i>Castanea crenata</i> Sieb. et Zucc.	8	7
ニレ属	<i>Ulmus</i>	-	1
ケヤキ型	<i>Zelkova serrata</i> type	6	3
カツラ属	<i>Cercidiphyllum</i>	1	1
カラン属	<i>Baileya undulatum</i> (Stokes) F.A.Barkley	-	1
カエデ属	<i>Acer</i>	-	2
トチノキ	<i>Aesculus turbinata</i> Blame	2	1
クロウメモドキ科	<i>Rhamnaceae</i>	-	1
ブドウ属	<i>Vitis</i>	4	-
ウコギ科	<i>Araliaceae</i>	3	-
イヌクチ属	<i>Fraxinus</i>	-	1
草本			
ミクリ属	<i>Sparaganium</i>	2	-
オモダカ属	<i>Spiraea</i>	-	6
スブタ属-ミズオバコ属	<i>Blyxa - Otidia</i>	1	1
イネ科(イネ型)	<i>Gramineae</i> (<i>Oryza</i> type)	46	75
イネ科(野生型)	<i>Gramineae</i> (Wild type)	33	30
カヤツリグサ科	<i>Cyperaceae</i>	13	19
ホシクサ属	<i>Erodium</i>	-	2
ツユクサ属	<i>Comella</i>	1	1
イボクサ属	<i>Anemona</i>	2	3
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	1	8
アサ型	<i>Cannabis sativa</i> type	25	4
カガツモ属	<i>Hamamelis</i>	22	1
アサ属-カナムグラ属	<i>Cornus - Hamamelis</i>	106	5
クワ科-カクサ科	<i>Moraceae - Urticaceae</i>	2	-
ギシギシ属	<i>Rumex</i>	1	-
イヌタケ属	<i>Persicaria</i>	7	2
ソバ属	<i>Fagopyrum</i>	4	2
アカザ科	<i>Chenopodiaceae</i>	51	23
カタバミ属-ヒユ科	<i>Cleome</i> - <i>Thlaspi</i>	11	2
ナデシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	7	5
キンポウゲ科	<i>Ranunculaceae</i>	-	1
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	6	3
バラ科	<i>Rosaceae</i>	4	2
ミゾハギ属	<i>Lythrum</i>	-	1
アリトウクサ属	<i>Haloragis</i>	-	1
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	6	4
シソ科	<i>Labiatae</i>	1	-
ゴマ	<i>Sesamum indicum</i> L.	-	1
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	199	87
オナナキ属	<i>Xanthium</i>	5	-
他のイモ科	other <i>Tubuliflorae</i>	2	7
タンガボ酢栗科	<i>Liguliflorae</i>	1	7
シダ植物			
單条型胞子	<i>Monolete spore</i>	7	13
三条型胞子	<i>Trilete spore</i>	2	4
他のバノモノヅ		1	-
日本(非生息地)	<i>Asci</i>	-	1
釋虫(非生息地)	<i>Tricharis</i>	-	-
樹木花粉	Arborescent pollen	106	99
草木花粉	Nonarboreal pollen	560	304
シダ植物胞子	Fern spores	9	17
花粉・胞子数	Pollen and Spores	675	420
不明花粉	Unknown pollen	8	6
樹木花粉量 (1cm ²)		2680	2190
微粒炭量 (mm ² /cm ²)		1128	508

SX3の4層(H2)では、コナラ亜属が高率を占め、ブナ、ヤナギ属、ハンノキ属、クリなどが比較的多く出現する。草本ではヨモギ属イネ科(イネ型)が比較的高率で占め、カヤツリグサ科と水生植物のオモダカ属、ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属が出現し、ソバ属やゴマ、アサ型が僅かに検出される。微粒炭量は308 mm³/cm³と少ない。

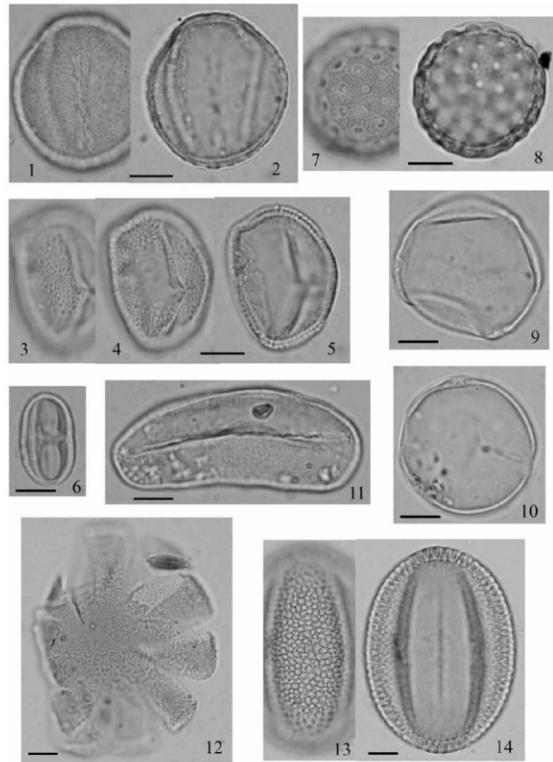


4. 考 察

SX2とSX3の各4層の花粉化石群は、同様な植物の分類群から構成される。SX2のスギの頻度が高いため相対的に他の分類群の頻度が低くなっているとみれば、スギを除く花粉組成はSX3とおむね同様であると考えられる。さらに、樹木花粉の比率が16~24%と低いことから周辺の樹木は疎林、あるいは林分が点在していた可能性がある。また、クリが7~8%と虫媒花粉としては比較的高い頻度で出現している。クリ花粉は、クリ林の周間に落葉広葉樹林が広がっている地点においては、樹木花粉比率はクリ純林内で30%以上、林内に約25m以上入った中央部で約60%以上を占め、クリ林から離れるほど急減し、風下側の樹冠縁から約20mで5%以下、約200mでは1%以下とクリ花粉の散布範囲が狭いことが明らかになっている(吉川、2011)。さらに、クリ林からの距離とクリ花粉量の関係からも散布範囲が狭いことが明らかになっている(未公表)。つまり、周辺にはクリや落葉広葉樹のコナラ亜属などが分布し、針葉樹のスギや落葉広葉樹のブナやハンノキ属、ヤナギ属はより離れた所に分布していたと推測される。クリ個体は分析地点より約20mの範囲にあった可能性が高い。また、溝内にはイネやオモダカ属、スプタ属-ミズオオバコ属、イボクサ属、ミズアオイ属などの抽水植物が生育し、溝の周辺は日当たりのよい開けた環境にあり、そこにはヨモギ属やつる草のカナムグラ属などが繁茂していたと考えられる。さらに、周辺ではウルシやソバ、アサ、ゴマなどを栽培されていたと推測される。

引用文献

吉川昌伸. 2011. クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況. 植生学研究, 18: 65-76



図版1 八反町遺跡から出現した花粉化石の顕微鏡写真

1-2: コナラ亜属、SX2, AFR.MY 2090. 3-5: ブナ、SX2, AFR.MY 2096. 6: クリ、SX2, AFR.MY 2093. 7-8: アザレア科、SX2, AFR.MY 2088. 9: アサ型、SX2, AFR.MY 2091. 10: カナムグラ属、SX2, AFR.MY 2094. 11: ミズアオイ属、SX2, AFR.MY 2090. 12: ゴマ、SX3, AFR.MY 2115. 13-14: ソバ属、SX2, AFR.MY 2095. スケール= 10 µm

中畠城跡の堀内堆積物の花粉分析

吉川昌伸（古代の森研究室）

1.はじめに

中畠城跡は、奥州市前沢区古城地区にあり、現在、周辺には水田が広がりその中に周囲より少し高い所に立地している。本城跡は出土遺物から16世紀後半（戦国時代）の城館であることが明らかになっている。中畠城跡では、一曲輪及び二曲輪を区切る内堀と、二曲輪の外側を巡る外堀が発見されている。ここでは、16世紀後半の城と周辺の植生及び生業を解明すること目的に堀内堆積物の花粉化石を調査した。

2.試料と分析方法

花粉分析試料は、C-5堀西の埋土下層（N1）と、C-4堀中～西の埋土下層（N2）の2試料である。堆積物は、C-5埋土下層が灰オーリーブ色細粒砂質シルト、C-4埋土下層は灰オーリーブ色細粒砂質シルトとなる。

花粉化石の抽出は、試料約2gを秤量し体積を測定後に10%KOH（湯煎約15分）、傾斜法と節分(0.25mmの筒)により砂を取り除き、48%HF（約15分）、重液分離（比重2.15の臭化亜鉛）、アセトリシス処理（濃硫酸1:無水酢酸9の混液で湯煎5分）の順に処理を行った。プレパラート作製は、残渣を適量に希釈しタッチャミキサーで十分攪拌後、マイクロビペットで取り重量を測定（重量0.1mg）しグリセリンで封入した。また、堆積物の性質を調べるために、有機物量、シルト以下の細粒成分、砂分量、及び生業の指標となる微粒炭量について調査した。有機物量については強熱減量を測定した。強熱減量は、電気マッフル炉により750℃で3時間強然し、強然による減量を乾燥重量百分率で算出した。微粒炭量は、デジタルカメラでプレパラートの顕微鏡画像を取り込み、画像解析ソフトのImageJで75μmより大きいサイズの微粒炭の積算面積を計測した。

3.結果

花粉分析試料の堆積物の特性を表1示す。C-5とC-4堀内下層堆積物は、2試料ともシルト以下の細粒成分を主とするが、C-4が相対的に砂分少なく有機物量が多い（表1）。

表1 中畠城跡の分析試料の堆積物の特性（重量%）

試料	造構	堆積物の特徴	砂 粘土	シルト～ （有機物量）
N1	C-5堀西（埋土下層）	灰オーリーブ色細粒砂質シルト	16.3	74.3 9.4
N2	C-4堀中～西（埋土下層）	灰オーリーブ色シルト	7.9	80.4 11.7

出現した分類群のリストとその個数を表2に、主要花粉分布図を図1に示す。出現率は、樹木は樹木花粉数、草本胞子は花粉胞子数を基準として百分率で算出した。図表中で複数の分類群をハイフンで結んだのは、分類群間の区別が明確でないものである。また、クワ科やバラ科で樹木と草本の区別が出来ない分類群は草本花粉としてまとめた。

花粉化石群の組成は、C-5堀西埋土下層（N1）では、優占する分類群はなく落葉広葉樹のヤナギ属、クリ、ブナ、ハンノキ属、コナラ属と、針葉樹のスギの頻度が比較的高く、クマシデ属-アサダ属、ケヤキ型、カエデ属などを伴う。草本ではイネ科（イネ型）が比較的高率で出現し、水生植物のサジオモダカ属、オモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キカ

表2 中畠城跡より出現した花粉化石の一覧表

和名	学名	C-5 N1	C-4 N2
		C-5 N1	C-4 N2
樹木			
マツ属單球管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Haploxylo</i>	2	-
マツ属複複管束亞属	<i>Pinus</i> subgen. <i>Diploxylon</i>	6	-
スギ	<i>Cryptomeria japonica</i> (L.fil.)D.Don	12	23
イネ科-ヒノキ科-イヌガヤ科 ヒノキ型	<i>Taxaceae - Cupressaceae - Cephalotaxaceae</i> <i>Chamaecyparis</i> type	-	1
ヤナギ属	<i>Salicaceae</i>	18	58
サクランボ属	<i>Prunus</i>	-	3
ガムシ属	<i>Juglans</i>	2	1
クマシデ属-アサダ属	<i>Carpinus - Ostrya</i>	4	5
ハンバミ属	<i>Corylus</i>	-	2
カバノキ属	<i>Betula</i>	4	1
ハンノキ属	<i>Alnus</i>	10	11
ブナ	<i>Fagus crenata</i> Blame	11	16
コナラ属-コナラ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Lobataulus</i>	9	36
コナラ属アガシ亜属	<i>Quercus</i> subgen. <i>Cyclobalanopsis</i>	1	-
カシ属	<i>Castanopsis</i>	17	30
シイタキ属	<i>Zelkova serrata</i> type	5	4
ケヤキ型	<i>Rhus javanica</i> var. <i>roburghii</i>	1	6
スルデ	<i>Acer</i>	2	-
カニズミ属	<i>Aesculus turbinata</i> Blame	-	1
トチノキ	<i>Vitis</i>	-	4
ブドウ属	<i>Araliaceae</i>	2	6
ウコギ科	<i>Cornus</i>	-	1
ニンジン属	<i>Sambucus</i>	1	5
麻木			
ガム属	<i>Typha</i>	-	2
ヒルムシロ属	<i>Pota muticoides</i>	-	13
サジオモダカ属	<i>Alisma</i>	3	1
オモダカ属	<i>Sagittaria</i>	7	12
イネ科（イネ型）	<i>Gramineae</i> (<i>Oryza</i> type)	161	76
イネ科（野生型）	<i>Gramineae</i> (Wild type)	42	26
カワツリヅメ科	<i>Cyperaceae</i>	15	19
ホンダツリヅメ属	<i>Ectemniella</i>	-	2
ホンダツリヅメ属	<i>Coniellula</i>	5	1
イボクサ属	<i>Ancistrochila</i>	3	-
ミズアオイ属	<i>Monochoria</i>	9	21
カガムグラ属	<i>Humulus</i>	2	2
アヒル-カガムグラ属	<i>Cannabis - Humulus</i>	5	13
クワ科-ラクサ科	<i>Moraceae - Urticaceae</i>	1	1
イヌタデ属	<i>Persicaria</i>	6	-
ソク属	<i>Fagopyrum</i>	6	2
アザチ科	<i>Chenopodiaceae</i>	38	10
サツキヤエヒユ科	<i>Cleomaceae - Amaranthaceae</i>	11	4
ナシコ科	<i>Caryophyllaceae</i>	13	2
アブラナ科	<i>Cruciferae</i>	6	11
バラ科	<i>Rosaceae</i>	-	4
フリフネソウ属	<i>Impatiens</i>	1	1
キカシグサ属	<i>Rotala</i>	3	1
アリトウクサ属	<i>Haloragis</i>	-	1
セリ科	<i>Umbelliferae</i>	1	2
オオバコ属	<i>Plantago</i>	1	1
カシワヅクロ属-ツツジガネニジン属	<i>Campanula - Adenophora</i>	-	1
ヨモギ属	<i>Artemisia</i>	112	56
他のキク科	<i>other Tuberolflorae</i>	6	4
タンボポ科	<i>Liguliflorae</i>	5	2
シダ植物			
ゼンマイ属	<i>Osmunda</i>	1	-
前のシダ植物胞子	<i>other Pteridophyta</i>	45	13
前のバリコミルク 静虫（苦生虫卵）	<i>Trichurus</i>	-	5
静虫花粉	<i>Acanthoceras pollen</i>	107	216
静虫孢子	<i>Nothriporous pollen</i>	463	290
シダ植物胞子	<i>Fern spores</i>	46	13
花粉・胞子類	<i>Pollen and Spores</i>	616	519
不明花粉	<i>Unknown pollen</i>	9	22
樹木花粉量 (粒/cm ³)		990	4640
微粒炭量 (mm ² /cm ³)		424	209

シゲサ属を伴う。また、ヨモギ属やイネ科(野生型)、アカザ科、ソバ属などが出現している。微粒炭量は424mm³/cm³といく分多く含まれる。

C-4堀中央から西の埋土下層では、ヤナギ属が比較的高率で出現し、他の樹木花粉の出現傾向はC-5とおおむね同様で、コナラ亜属やクリ、ブナ、スギの頗度が比較的高い。草本花粉もC-5に比較してイネ科(イネ型)の出現率が相対的に低いものの他の分類群の出現傾向は類似し、ヒルムシロ属やサジオモダカ属、オモダカ属、ミズアオイ属、キカシグサ属などの多種の水生植物が出現する。微粒炭量は208mm³/cm³と少量含まれる。

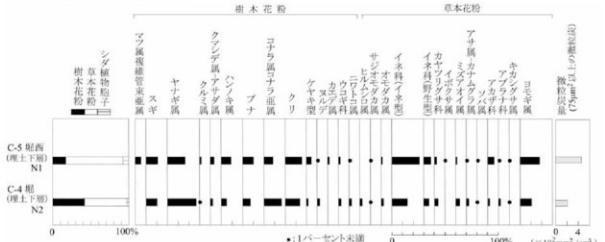


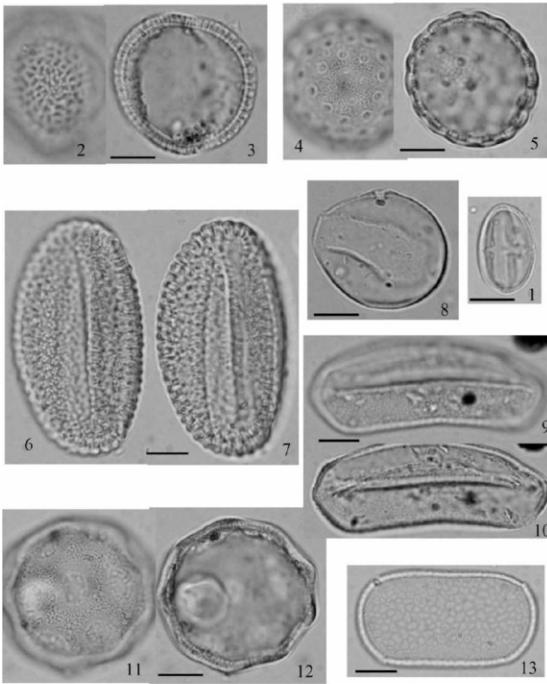
図1 中細城跡の主要花粉分布
(出現率は樹木花粉数、草本・孢子は花粉胞子数を基数として百分率で算出した)

4. 考 察

C-5とC-4の2地点の堀内堆積物下層から出現した花粉組成は類似し、特に虫媒のクリ花粉の頗度が14~16%と比較的高い特徴がある。クリ花粉は、クリ林の周囲に落葉広葉樹林が広がっている地点においては、樹木花粉比率はクリ純林内で30%以上、林内に約25m以上入った中央部で約60%以上を占め、クリ林から離れて急減し、風下側の樹冠縁から約20mで5%以下、約200mでは1%以下とクリ花粉の散布範囲が狭いことが明らかになっている(吉川、2011)。さらに、空中花粉と落下花粉数がクリ林から約15m以内で急減することが明らかになっている(未公表)。中細城跡のC-5とC-4の2地点間の距離は不明であるが、少なくとも分析地点の約5m以内にはクリの樹冠が広がっていたと考えられる。さらに2地点で花粉頗度が比較的高いヤナギ属も堀周辺に生育していた可能性がある。また、樹木花粉の比率が低いため、城の周辺は疎林ないし小林自分が点在していたと推測され、落葉広葉樹のコナラ亜属やブナ、針葉樹のスギなどは分析地点から離れた所に分布していたと推測される。一方で、堀内にはイネや抽水植物のサジオモダカ属やオモダカ属、イボクサ属、ミズアオイ属、キカシグサ属が繁茂し、C-4では枕水ないし浮葉植物のヒルムシロ属も繁茂していた。また、堀の外には日当たりのよい開けた場所があり。そこにはヨモギ属などが生え、周辺ではソバ栽培も行われていた可能性がある。

引用文献

吉川昌伸。2011。クリ花粉の散布と三内丸山遺跡周辺における縄文時代のクリ林の分布状況。植生史研究, 18: 65-76.



図版1 中細城跡から出現した花粉化石の顕微鏡写真

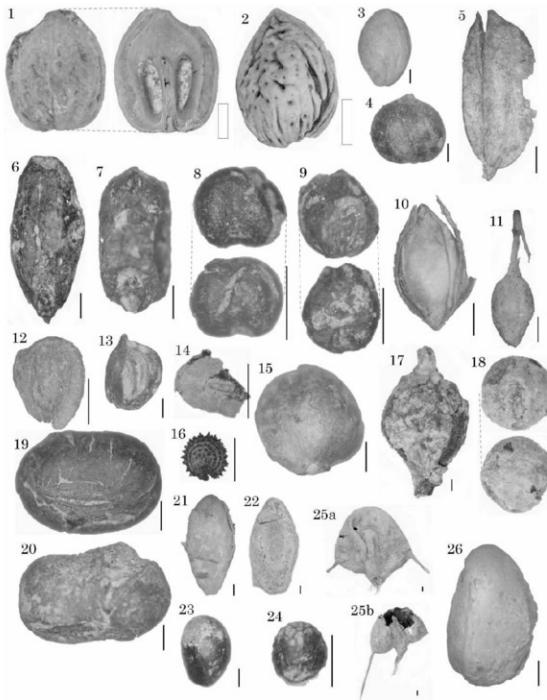
1-2:クリ, C-4, AFR.MY 2102. 2-3:アブラナ科, C-4, AFR.MY 2101. 4-5:アカザ科, C-5, AFR.MY 2098. 6-7:ソバ属, C-4, AFR.MY 2097. 8:カヌムグラ属, C-4, AFR.MY 2103. 9-10:ミズアオイ属, C-5, AFR.MY 2100. 11-12:サジオモダカ属, C-5, AFR.MY 2099. 13:ツリフネソウ属, C-4, AFR.MY 2104. スケール=10 μm

八反町遺跡の溝や堀などからはモモ、利用痕跡が残るオニグルミや炭化したイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエなどが検出され、少量であるがアサやベニバナなども出土した。一方で各遺構からはミクリ属やヘラオモダカなど湿地性の植物が、特に堀からはオニバスやコウホネ属、ヒルムシロ属やヒメビシなどある程度水深がある場所に生育する種類を多く出土した。こうしたことから様々な水生植物が生育する堀などに不要物を廃棄していたかあるいは生活排水が比較的多く流れ込んでいた。

本遺跡のSX-2からは水生植物は出土しなかったがホタルイ属とヤナギタデを出土することから地下水位が高く湿った環境であると言える。ここではイネ、オオムギ、コムギ、アワ、ヒエなどの利用後の種実が多く検出され、これらが排水で流れ込んだ可能性もあるが、流水で流れにくいモモも多く出土するのでこれらはおもに廃棄されていたと考えられる。SX-3からはオニグルミとアサや炭化マメ科を出土し、抽水植物のヘラオモダカやイボクサも出土するため、水がある溝にこれらの利用種実が廃棄されたと考えられる。堀からはオニバスの種子を多く出土し、オニバスの未熟果やコウホネ属の種子、ヒメビシも出土したことから、堀には50~1m程度の水深があり流入水は生活排水で極端には汚れていないものの、栄養塩類が供給されるため水質は富栄養に傾いていたと考えられる。また、SX-2、SX-3と堀からはヒユ属やサナエタデ近似種、ギシギシ属など日当たりの良い路傍などに生育する雑草の種子が多く、ノブドウやクマヤナギ属、カナムグラなどの蔓植物の種子も出土するため、堀や溝の周間に木本の個体は少なく裸地が多かったと考えられる。

引用文献

大滝末男. 1980. 水草の観察と研究. ニューサイエンス社.



図版1 八反町遺跡出土大型植物化石

1. オニグルミ、内果皮半分割(140) 2. モモ、核(97) 3. サクラ属、核(105) 4. ノブドウ、種子(105) 5. イネ、穎(106) 6. オオムギ、炭化種子(105) 7. コムギ、炭化種子(105) 8. アワ、炭化種子(100) 9. ヒエ、炭化種子(100) 10. ヒエ、穎果(106) 11. ミクリ属、果実(106) 12. ヘラオモダカ、果実(102) 13. ヒルムシロ属、果実(106) 14. イボクサ、種子破片(102) 15. アサ、核(106) 16. ハコベ属、種子(100) 17. オニバス、未熟果(105) 18. オニバス、種子(105) 19. ダイズ属、炭化種子(105) 20. ササゲ属、炭化種子(105) 21. メロン仲間、種子(105) 22. ウリ科、種子(105) 23. コウホネ属、種子(106) 24. イスコウジ属、果実(102) 25. ヒメビシ、果実(105) 26. ベニバナ、果実(106) スケールは1mm

中畠城跡から出土した大型植物化石

吉川純子（古代の森研究会）

1.はじめに

中畠城跡は奥州市前沢区古城地区に位置し、藤原氏より後の16世紀後半に権山氏が居館とした城館跡で内外からなる堀跡が複数確認されている。この堀や溝跡からは種実等が比較的良好な状態で検出されたことから、当時の植物利用状況を把握する目的でこれら大型植物化石の同定をおこなった。分析に充てた試料は発掘担当者により現地取り上げないし水洗選別して得られた計16試料である。大型植物化石は肉眼ないし实体顕微鏡で観察・同定した。

2. 同定結果

出土した大型植物化石の同定結果を表1に示す。本遺跡の堀からはオニグルミ、モモ、トチノキ、サトイモ科、オニバスを出土した。2号住跡からはオニグルミを出土し、4号土坑と5号溝からはモモを出土した。他の遺構からはオニグルミ、モモ、オニバスを出土した。以下に特筆すべき分類群の記載を行う。

表1 中畠城跡出土大型植物化石

分類群	出土部位＼番号	遺構	2号住跡	T1	T2	T4	-	-	4号土坑	5号溝跡
		位置	A北側	A北側	A北側	A北側	B北側	B北側	D北側	D北側
		層位	堆積土上 位黒色土							
オニグルミ		内果皮完形	-	-	-	-	-	-	-	-
		内果皮完形食糞	-	-	-	-	-	-	-	-
		内果皮半分炭化	1	-	-	-	-	-	-	-
		内果皮半分炭化	-	-	-	-	-	-	-	-
		内果皮破片	-	-	-	-	-	-	-	-
モモ		核完形	-	-	-	-	1	-	-	-
		核完形風化	-	-	-	-	1	-	1	1
		核半分	-	-	-	1	-	-	-	-
		核半分	-	-	-	2	1	-	-	-
トチノキ		核皮半分	-	-	-	-	-	-	-	-
		核皮破片	-	-	-	-	-	-	-	-
		塊茎表皮半炭化	-	-	-	-	-	-	-	-
		種子	-	S	-	-	-	-	-	-
サトイモ科		遺構								
		位置	E区北側	E区北側	E区北側	-	-	-	CIS	種(大根)
		層位	堆積土上 位	堆積土上 位	堆積土上 位	堆積土上 位	堆積土上 位	堆積土上 位	-	-
		番号	194	195	196	197	198	199	200	201

サトイモ科：出土した塊茎は表皮のみで半分炭化しており、薄い繊維状の膜が半球形に残っており、子イモ部分の表皮も残っていた。形状としてはサトイモに近似するがサトイモ科の他属の塊茎に近似する形態があるかどうか検討できなかつたため種の同定に至らなかった。

オニバス：種子は球形で一端がやや突出し、大きな特徴として稍円形のへその隣に円形の珠孔が並んでる。表面は平滑で光沢がない。オニバスの1975年時点の北限は宮城県遠田郡戸尻町(大滝180)

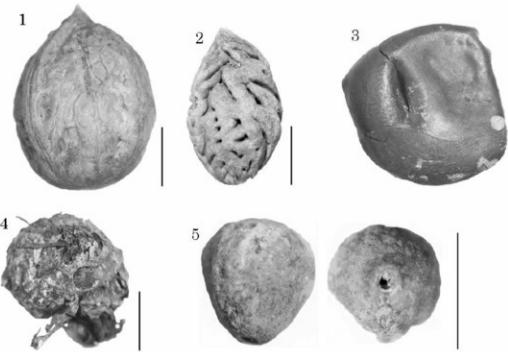
であるが、奥州市八反町遺跡の12世紀の試料からも出土しており、本遺跡で出土したことで岩手県奥州市には16世紀後半まで生育が継続していたことが確認された。

3. 考察

本遺跡の堀からは完形のオニグルミとモモ、トチノキ、オニバス、サトイモ科を出土しオニグルミとモモが堀の近辺に生育していた可能性が考えられる。ただし出土個数は少ないため、サトイモ科とともに廃棄された可能性もある。同様にトチノキも積極的に利用された痕跡はないが少數のみの出土で破片の状態であることからほかから廃棄された可能性がある。オニバスは水生植物で種子の利用例はないことから堀に生育していたものが堆積したと考えられる。堀にはある程度の水深があったと思われるが、ほかの水生植物が出土しない。要因として考えられるのは、堀の水質の富栄養化が進んで他の植物が繁茂できずさらに水位が下がって種実等が枯死したが、オニバスの種子は休眠期間が長いため休眠種子がかなり遅くまで生き残っていた可能性も考えられる。種子は生存中は大変丈夫だが、枯死すると弱くなり保存状態が悪い場合には腐敗が始まる。

引用文献

大瀧末男, 1980. 水草の観察と研究. ニューサイエンス社.



図版1 中畠城跡出土大型植物化石

1. オニグルミ、内果皮(201)2. モモ、核(193)3. トチノキ、種子半分(200)4. サトイモ科、塊茎表皮半炭化(197)5. オニバス、種子(201) スケールは1cm

4 樹種同定

八反町遺跡出土木製品の樹種

吉川純子（古代の森研究会）

1. はじめに

八反町遺跡は奥州市前沢区古城地区に位置し、12世紀後半の藤原氏と同時期の堀や溝、井戸跡などの遺構が検出されている。これらの遺構から若干の木製品が出土し、当時の木材利用状況を把握する目的で木製品の樹種同定をおこなった。分析に用いた試料は椀2点、下駄1点、板材1点、曲げ物2点の合計6点である。出土木製品からは直接剥刀を用いて横断面、接線断面、放射断面の3方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。

2. 同定結果

出土した木材の樹種同定結果を表1に示す。出土した樹種は、スギ、クリ、ケヤキであった。以下に同定された分類群の記載を行う。

表1 八反町遺跡木製品樹種

番号	遺構	位置	層位	器種	分類群
57 SE-1(1号井戸)	—	—	—	木椀	ケヤキ
61 SI-3	—	—	—	一本下駄	クリ
63 SX-2	ベルト南側	4層	—	木椀	ケヤキ
64 SX-2	北西部	—	—	曲げ物側板	スギ
65 SX-2	No.11	—	—	曲げ物側板	スギ
67 SX-2	北東区	底面	—	板材	スギ

スギ (*Cryptomeria japonica* (Linn. Fil.) D.Don) : 早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い楕円形となり、1分野に2~3個ある。

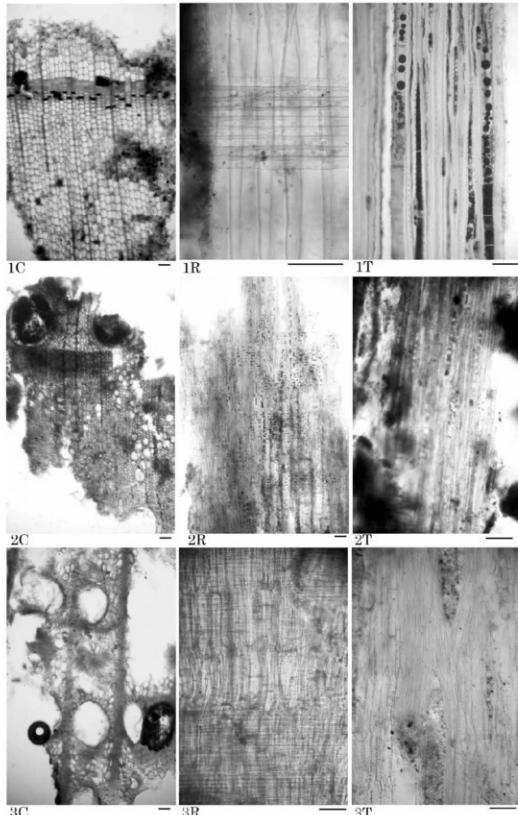
クリ(*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.) : 年輪はじめに大きい道管が花弁状に配列し、急に径が減じて火炎状に配列する環孔材である。道管は單孔材。放射組織は1~2列ではほぼ同性である。

ケヤキ(*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino) : 年輪はじめに大型で丸い道管が単独で1列並び、晩材部では小型で薄壁の角張った管孔が多數集合して斜めないし接線方向に帶状に連なる環孔材。道管の穿孔板は單一で小道管内壁にらせん肥厚がある。本部柔組織は周間状で晩材部では小道管の周囲を囲んで帯状となる。放射組織は異性で1~8細胞幅で放射細胞の縁にしばしば大型の結晶がある。

本遺跡で調査した6試料中3点がスギであり、曲げ物と板材に使用されていた。試料数は少量であるが本地域のスギ依存の高さがうかがえる。また木椀は2点ともケヤキであった。蘭県ではあるが、宮城県多賀城市の市川橋遺跡(大山ほか2004)では古代の椀のうちチバ属は全て漆椀であったが塗りのない椀はケヤキが用いられていた。分析点数は少ないが本遺跡でもこうした樹種選択があった可能性がある。

引用文献

大山幹成・小川とみ・鈴木三男. 2004. 宮城県多賀城市市川橋遺跡出土木製品の樹種. 多賀城市文化財調査報告書第75集 市川橋遺跡 第三分冊, 多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地地区画整理組合. 1~38.



図版1 八反町遺跡出土木製品の顕微鏡写真

1.スギ(65曲げ物側板) 2.クリ(61下駄) 3.ケヤキ(57椀)

C;横断面R;放射断面T;接線断面, スケールは0.1mm

中畠城跡出土木製品の樹種

吉川純子(古代の森研究会)

1.はじめに

中畠城跡は奥州市前沢区古城地区に位置し、藤原氏より後の16世紀後半齊山氏が居館とした城跡跡で内外からなる堀跡が複数確認されている。この堀や溝跡からは多数の木製品等が良好な保存状態で検出されたことから、当時の木材利用状況を把握する目的でこれら木製品の樹種同定をおこなった。分析に充てた種類は漆椀、曲げ物、木筋、下駄、部材など合計16点である。出土木材からは直接刃を用いて横断面、接線断面、放射断面の3方向の薄片を採取し、ガムクロラールを用いてプレパラートに封入し、生物顕微鏡で観察・同定した。なお、編み物は組織が潰れていたため破片をアルカリ・尿素処理で復元した後パラフィン包埋して切片を作成した。

2. 同定結果及び考察

中畠城跡から出土した木材の樹種同定結果を表1に示す。出土した樹種は、マツ属複維管束亞属、スギ、ヒノキ、ヒノキ属、アスナロ属、針葉樹、クリ、ブナ属、ケヤキ、モクレン属、ナナカマド属、タケア科であった。以下に同定された分類群の記載を行う。

表1 中畠城出土木製品樹種

番号	遺構	位置	層位	器種	分類群
60	4号屋	A区南側	禹灰粘土下	箸	ヒノキ属
61	4号屋	A区南側	禹灰粘土中	漆塗下駄	クリ
63	5号屋	C区	理土	漆塗椀	ブナ属
65	5号屋	C区	理土	漆塗椀	ケヤキ
66	C-4屋	-	-	木筋	スギ
67	4号屋	A区南側	禹灰粘土中	机	クリ
68	4号屋	G区	理土	漆塗椀	ケヤキ
77	4号屋	G区	-	桶側板	アスナロ属
80	4号屋	G区	-	継状加工板	マツ属複維管束亞属
84	1号屋	-	理土	曲げ物蓋板	針葉樹
85	1号屋	-	理土	下駄(ぼっくり)	モクレン属
88	溝跡	C区東側	理土	曲げ物側板	ヒノキ
91	-	C区西側	-	漆塗椀	ブナ属
92	溝	C区西側	堆積土	容器底板	針葉樹
101	-	G区検出	-	部材	ナナカマド属
102	4号屋	C区	-	網代編み編組製品破片	タケア科

マツ属複維管束亞属(*Pinus subgen. Diploxyylon*)：晩材部がやや厚く水平樹脂道と垂直樹脂道がある針葉樹。放射状道管の内壁は内宮に向かって著しく鋸歯状に突出して、放射柔細胞の分野壁孔は窓状である。

スギ (*Cryptomeria japonica* (Linn. Fil.) D.Don)：早材から晩材への移行は急で晩材部が厚い。分野壁孔はスギ型で横に長い円形となり、1分野に2～3個ある。

ヒノキ (*Chamaecyparis obtusa* Endl.)：早材から晩材の移行は急で晩材部が薄い針葉樹で晩材部に樹脂細胞が点在する。分野壁孔は典型的なヒノキ型で1分野に2個存在する。

アスナロ属 (*Thujopsis*)：早材から晩材への移行はゆるやかで年輪界が比較的明瞭なヒノキに似た針葉樹。晩材部付近に樹脂細胞があり水平壁が数珠状に肥厚する。分野壁孔はスギないしヒノキ型で小さく1分野に2～3個存在する。

針葉樹：放射組織は柔細胞のみからなるようであるが、分野壁孔が溶けて確認できず、細胞壁も薄く組織が失われている可能性があるものを針葉樹とした。

クリ (*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.)：年輪はじめて大きい道管が花弁状に配列し、急に径が減じて次炎状に配列する環孔材である。道管は單穿孔、放射組織は1～2列ではほぼ同性である。

ブナ属 (*Fagus*)：中程度の管孔が年輪内に均一に分布する散孔材で晩材部で径が減じる。広放射組織のところで年輪界が外側に引きずられる。道管には單穿孔と階段穿孔があり、放射組織はほぼ同性で單列や2、3細胞幅と幅広い広放射組織の3種類がある。

ケヤキ (*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino)：年輪はじめて大型で丸い道管が単独で1列並び、晩材部では小型で薄壁の角張った管孔が多数集合して斜めないし接線方向に帯状に連なる環孔材。道管の穿孔板は單一で小道管内壁にらせん肥厚がある。本部柔組織は周間帶で晩材部では小道管の周縁を開んで帯状となる。放射組織は異性で1～8細胞幅で放射細胞の縁にしばしば大型の結晶がある。

モクレン属 (*Magnolia*)：中程度の管孔が單一あるいは數個複合して年輪内にはほぼ均一に分布する散孔材。道管の穿孔板は單一で道管隔壁は交互状から階段状、放射組織は上下が方形細胞ではほぼ平伏細胞からなり異性で1～2細胞幅で細長い。

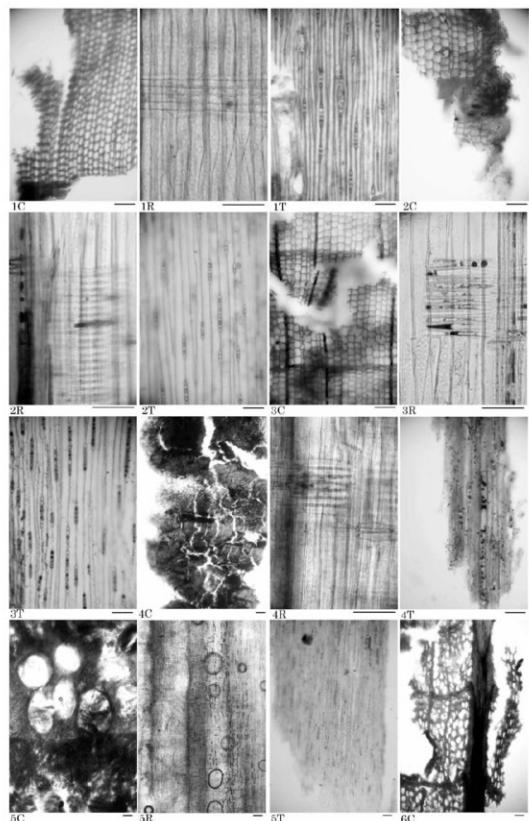
ナナカマド属 (*Sorbus*)：やや小さい管孔が単独ないし數個複合して年輪内にはほぼ均一に散布する散孔材。道管の穿孔板は單一で放射組織は異性で1～7細胞幅である。

タケア科 (*Bambusoideae*)：年輪はなく、原生本部と一对の大なる後生本部道管と節部からなり、外側を繊維組織がとり開んで総管束鞘となり、この東が散在している。総管束のかなたは潰れているが外側に固い光沢がある表皮が確認できるためタケア科とした。

漆椀は4点の内2点にブナ属、2点にケヤキが使われ、下駄はクリとモクレン属が使われていた。東北では杣材としてブナ属とケヤキの頻度がかなり高く、クリは様々な日用品に、モクレン属は下駄の歯として現在も用いられている。いずれも調達しやすい樹種から器種により樹種を選択して利用していたことがうかがえる。また舟形や箸など容器類にはスギ、ヒノキ、アスナロ属などの針葉樹を用いており、近世になくなって多様な針葉樹が利用が展開されていたことがうかがえる。ヒノキはもともと関東地方北部以西の分布あり、近世には東北地方でも植林されるようになる。宮城県古代の市川橋遺跡(大山ほか2004)では舟形、人形、曲げ物などが出土し、他地域から持ち込まれたと考えられているが、近世の沼向遺跡(鈴木ほか2010)になるとヒノキが箸や下駄、杭など実用品に多用されるようになるため調達が容易になったと考えられる。なお、編み物素材の切片作成に際し東北大植物園の小林和貴氏に大変お世話になりました。ここに謝意を表します。

引用文献

- 大山幹成・小川とみ・鈴木三男. 2004. 宮城県多賀城市市川橋遺跡出土木製品の樹種. 多賀城市文化財調査報告書第75集. 市川橋遺跡 第三分冊. 多賀城市教育委員会・多賀城市城南土地地区画整理組合. 1-38.
- 鈴木三男・小川とみ. 2010. 沼向遺跡出土木製品・炭化材の樹種同定(中野高柳遺跡を含む). 仙台市文化財調査報告書第360集. 沼向遺跡第4～34次調査 第9分冊. 沼向遺跡環境復元検討会・自然科学分析・総括. 仙台市教育委員会. 75-125.



図版1 中畠城遺跡出土木製品の顕微鏡写真
1.マツ属根瘤管束並属(80加工板) 2.スギ(66木筒) 3.ヒノキ(88曲物) 4.アスナロ属(77桶) 5.クリ(61下駄) 6.ブナ属(91漆椀) 7.ケヤキ(68漆椀) 8.モクレン属(85下駄) 9.ナナカマド属(101部材) 10.タケア科(102編み物)
C:横断面 R:放射断面 T:接線断面、スケールは0.1mm



図版2 中畠城遺跡出土木製品の顕微鏡写真
6.ブナ属(91漆椀) 7.ケヤキ(68漆椀) 8.モクレン属(85下駄) 9.ナナカマド属(101部材) 10.タケア科(102編み物)
C:横断面 R:放射断面 T:接線断面、スケールは0.1mm

5 骨 同 定

中畠城跡・八反町遺跡の出土骨

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中畠城跡および八反町遺跡は、いずれも岩手県奥州市前沢区北部の古城地区に所在し、旧明後沢川沿いに位置する。中畠城跡では、一曲輪、二曲輪、三曲輪がみられ、一曲輪と二曲輪を区切る内堀、二曲輪外側の外堀が発見され、特に外堀は東北地方で事例が少ない障子堀が確認された。また出土遺物から16世紀後半の城郭と判明された。一方、八反町遺跡では、2条の溝跡とそれに挟まれた道路跡、掘立柱建物跡などが検出されており、12世紀後半の遺跡である。今回、調査区内から出土した骨について種類を明らかにし、動物利用に関する情報を得ることにした。

1. 試 料

中畠城跡で採取された試料は、C区5号堀埋土(No.1323-178)、C区堀(No.1203-179)、堀(大溝)(No.1324-180)、E区東側検出面直上(No.1201-182)、C区東側(No.1326-183)、C区西側(No.1327-184)で出土した骨である。一方、八反町遺跡で採取された試料は、2号井戸埋土上部から採取された骨である。なお、試料の詳細は、結果とともに表示する。

2. 分析方法

試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類・部位を同定する。なお、骨格各部の名称については、ウシを用いて図1に示す。

表1. 骨同定結果

遺跡	調査区	出土位置	番号	種類	部位	左	右	部分	数量	備考
中畠城跡	C区	堀	1203-179	ウシ	上顎第1後臼歯			破損	1+30.3g	
	C区	5号堀埋土	1323-178	獣類	四肢骨			破片	多数(35.7g)	
	C区	(堀(大溝))	1324-180	ウシ	下顎骨			破片	3+39.8g	
				ウマノウシ	右上顎第1後臼歯			破片	1+7.8g	
				ウマノウシ	四肢骨			破片	40+68.8g	
				不明	四肢骨			破片	9+15.4g	
	C区	東側	1326-180	残渣	不明			破片	多数(30.9g)	
	C区	東側	1327-181	不明	四肢骨			破片	多数(53.3g)	
	E区	東側検出面直上	1201-182	ウシ	下顎第3後臼歯	左		破片	1+23.4g	
			1326-181	獣類	不明			破片	15+68.6g	
八反町遺跡		2号井戸埋土上部	64	108	獣類	四肢骨		破片	7+20.8g	

3. 結 果

同定結果を表1に示す。全体的に保存状態が極めて悪く、全体的に青みを帯びた状態である。確認された種類は、脊椎動物門(Vertebrata)哺乳綱(Mammalia)ウシ目(Artiodactyla)ウシ(Bos Taurus)である。以下、試料ごとに結果を記す。

(1) 中畠城跡

<C区5号堀埋土(No.1323-178)>獣類の四肢骨片である。

<C区堀(No.1203-179)>ウシ右上顎第1後臼

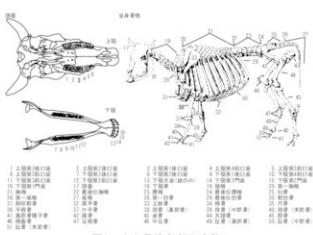


図1. ウシ骨格各部の名称

(原図は、全骨骨格・脛脛蓋が加藤・山内、2003、下著者が久保・松井、1999による)

歯である。一部破損する。

<堀(大溝)(No.1324-180)>ウシ中足骨3点、ウシ右踵骨1点確認される。ウシ右踵骨はほぼ完形。

<E区東側検出面直上(No.1201-182)>ウシ左下顎第3後臼歯である。破損する。

<C区東側(No.1326-183)>獣類の部位不明破片である。

<C区西側(No.1327-184)>獣類の部位不明破片である。

(2) 八反町遺跡

<2号井戸埋土上部>獣類の四肢骨片である。

4. 考 察

今回、中畠城跡および八反町遺跡から出土した骨は、青みを帯びた状態である。このような状態は、低地や溝跡などから出土する骨でよく見受けられるが、骨の主成分であるリン酸と地下水に含まれる鉄分が結合してビニアイトが形成され、空気中に曝されることで青色に変色する。つまり、リン酸を溶解するため骨自体が脆くなる。今回出土した骨の保存状態が悪いもの、そのような影響を受けた結果と言える。

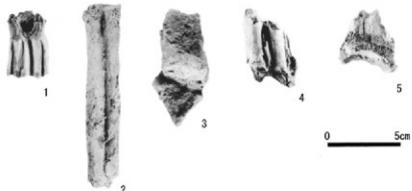
出土した骨は、破片となっており、種類不明および部位が不明なものが多いか、ウシの中足骨、右踵骨、右上顎第1後臼歯、左下顎第3後臼歯がみられた。重なる部位がないが、出土位置が異なることから同一個体か不明である。一方、別の調査では、C区4号堀西埋土からウマも出土している。

古墳時代以降の河川や溝跡などからウシ、ウマが出土する事例は良く見受けられる。ウマ・ウシの生前の用途については、物資やヒトを運ぶ役割、軍用、農耕用など、多様な用途が考えられる。本遺跡内で出土したウマ・ウシも同様な用途として用いられたと推測される。ウマ・ウシに関しては、その出土状況から自然死、事故死、屠殺、犠牲などに分類される(松井,1997)。ただし、今回、骨が散在して出土している点を考慮すると、遺構が埋積する過程において周辺から流れ込んだことも考えられる。

引用文献

- 加藤 嘉太郎・山内 昭二,2003,新編 家畜比較解剖図説 上巻,養賢堂,315p.
- 久保 和士・松井 章,1999,ウシ・ウマ,考古学と動物学,同成社,169~208.
- 松井 章,1997,考古学からみた動物利用,部落解放なら,8,奈良県部落解放研究所,2,31.

図版1 出土骨



1. ウシ右上顎第1後臼歯(中畠城跡C区堀;1203-179)

2. ウシ中足骨(中畠城跡C区堀(大溝);1324-180)

3. ウシ右踵骨(中畠城跡C区堀(大溝);1324-180)

4. ウシ左下顎第3後臼歯(中畠城跡E区東側検出面直上;1201-182)

5. 獣類四肢骨(八反町遺跡2号井戸埋土上部;64-108)

中畠城跡の出土骨

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中畠城跡(岩手県奥州市前沢区北部の古墳地区に所在)は、旧明後沢川沿いに位置し、一曲輪、二曲輪、三曲輪がみられ、一曲輪と二曲輪を区切る内堀、二曲輪外側の外堀が発見され、特に外堀は東北地方で事例が少ない障子堀が確認された。また出土遺物から16世紀後半の城郭と判明された。今回、調査区内から出土した骨について種類を明らかにし、動物利用に関する情報を得ることにした。

1. 試料

試料は、C区4号堀の西埋土(No.1322-177)、西埋土、中～西埋土の3試料である。この内、西埋土、中～西埋土の2試料は、土壤の中に骨が存在する状態である。なお、試料の詳細は結果とともに表示する。

2. 分析方法

土壤が付いた試料は、土壤を除去すると形質をとどめないと判断されたため、ある程度土壤を除去して形質を判断できる程度にとどめた。試料を肉眼で観察し、その形態的特徴から、種類・部位を同定する。なお、骨格各部の名称については、ウマを用いて図1に示す。

3. 結果

同定結果を表1に示す。全体的に保存状態が極めて悪く、全体的に青みを帯びた状態である。確認された種類は、脊椎動物門(Vertebrata)。

哺乳綱(Mammalia)のマ目(Perissodactyla)ウマ(Equus caballus)である。以下、試料ごとに結果を記す。

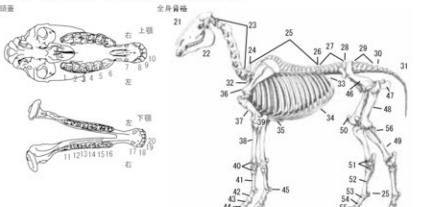


図1 ウマ骨格各部の名称
(全身骨格は、加藤・山内、2003に加筆)

表1. 骨同定結果

遺跡	調査区	出土位置	番号	種類	部位	左/右	部分	数量	備考
中畠城跡	C区	4号堀西埋土	1322-177	ウマ	中手骨/中足骨	/	遠位端	1 / 18.1g	
					基節骨		基節骨	1 / 2.2g	
				大型獸類	不明		骨片	8 / 1.6g	
				獸類	不明		骨片	多數 / 67.5g	
	C区	4号堀西埋土		獸類	四肢骨		破片	159 / 106g	土壤状
					残渣			多數 / 25g	
	C区	4号堀中～西埋土		獸類	不明		破片	13 / 471g	土壤状
					残渣			多數 / 305g	

<C区4号堀西埋土(No.1322-177)>ウマの中手骨/中足骨遠位端および基節骨近位端、大型獸類の四肢骨、獸類の部位不明破片である。

<C区4号堀西埋土>獸類の四肢骨である。

<C区4号堀中～西埋土>獸類の部位不明破片である。

4. 考察

C区4号堀から出土した骨は、青みを帯びた状態である。このような状態は、低地や溝跡などから出土する骨でよく見受けられるが、骨の主成分であるリン酸と地下水に含まれる鉄分が結合してビピアナイトが形成され、空気中に曝されることで青色に変色する。つまり、リン酸を溶解するため骨自体が脆くなる。今回出土した骨の保存状態が悪いもの、そのような影響を受けた結果と言える。

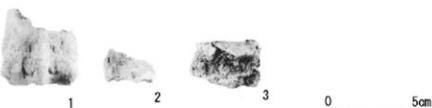
出土した骨は破片となっており、まとまりとどめないとほど保存状態が悪いが、ウマの中手骨/中足骨、基節骨の破片を確認できた。また、別の調査では、ウシも出土していることが明らかにされた。

古墳時代以降の河川や溝跡などからウシ・ウマが出土する事例は日本各地で良く見受けられる。ウマ・ウシの生前の用途は、物資やヒトを運ぶ役割、軍用、農耕用など、多様な用途が考えられるが、本遺跡内で出土したウマ・ウシも同様な用途として用いられたと推測される。ウマ・ウシに関しては、その出土状態から自然死、事故死、屠殺、犠牲などに分類される(松井、1997)。ただし、今回、出土した部位が限られている点を考慮すると、遭構が埋積する過程において周辺から流れ込んだ可能性がある。

引用文献

- 加藤 嘉太郎・山内 昭二, 2003, 新編 家畜比較解剖図説 上巻 畜産堂, 315p.
松井 章, 1997, 考古学からみた動物利用 部落解放なら, 8, 奈良県部落解放研究所, 2, 31.

図版1 出土骨



1. ウマ中手骨/中足骨(中畠城跡C区4号堀西埋土:1322-177)
2. ウマ基節骨(中畠城跡C区4号堀西埋土:1322-177)
3. 大型獸類四肢骨(中畠城跡C区4号堀西埋土:1322-177)

VII 調査のまとめ

1 八反町遺跡

八反町遺跡は奥州市前沢区古城字南八反町、字北八反町、字館八反町、字向田地区に所在する。JR東北本線前沢駅の北北東約3.5kmにあり、北上川右岸の標高33~34mの河岸段丘上に立地している。平坦な地形の中にも微高地が点在し、現況は畑地と水田になっている場所で、遺跡範囲は東西500m、南北550mほどである。

今回の調査区は9地点に分散しており、遺跡の南端、中央部、北端部、西部に分かれている。

遺構の種類と時期は以下のとおりである。

縄文時代	9~10世紀	12世紀	不明	現代
掘立柱建物跡		5	4	
堅穴住居跡	2			
堅穴遺構		1		
土坑	1	2	16	2
井戸状遺構		2	1	
溝跡		7	16	5
柱穴列			3	
道路跡		1		
性格不明遺構		3		
杭土坑	1			
沢跡	1			

出土遺物は平安時代の土師器・須恵器、12世紀の陶磁器、かわらけ、鉄製品などが中コンテナ1.5箱。下駄、柱材、杭等の木製品が大コンテナ1箱である。

縄文時代

調査した地点からは集落であった痕跡は見つかなかった。石獣が遺構外から出土していること、陥り穴が1基検出されていることから、狩猟の場として使われていたようである。

平安時代（9~10世紀）

遺跡中央にあるB区から2棟の堅穴住居跡が見つかっている。周囲には土師器・須恵器片が散布しており、このB区を中心とした調査区外には平安時代の遺構が広がっている可能性は極めて高い。2棟の堅穴住居跡には重複関係がないものの、それぞれの軸線が異なる方向となっていることから時期差を持っていると推測される。集落についてはB区の北東方向及びC区の東側へ広がっていると考えている。

遺跡北端部にあるG区からは埋没沢が見つかっている。沢は西北西から東南東方向へと流れているようだが沢の岸近くが調査区内に入っていただけなので全体の規模は不明である。もしかすると、現在G区の北側にある明後沢川（かつては松ノ木沢川が流れていた）がこの場所を流れているかも知れない。沢跡には十和田a火山灰が堆積していた。この場所に降下したものである。掲載した遺物はこの火山灰層の直下から出土したものである。

平安時代末（12世紀）

今回の調査において主体となる時期である。この時期の遺構・遺物は遺跡の中央部南にあたるA・

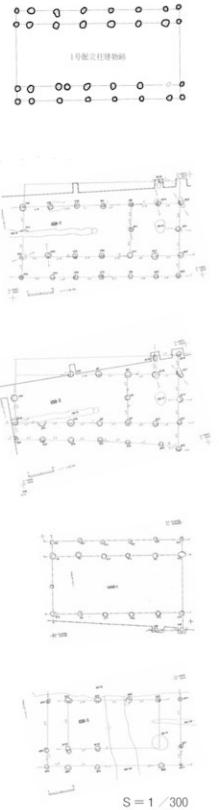
B区、遺跡北端にあたるG区などから見つかっている。

遺跡中央南にあたるA・B区では道路跡（1号道路跡）と建物跡（1~4号掘立柱建物跡）などが検出された。1号道路跡（幅約3m）は西北西~東南東方向に延びる側溝を持つ遺構で、側溝からは常滑産陶器片が出土した。この道路跡のやや北側に1号掘立柱建物跡（5×2間身舎に四面庇）と、御堂のような4号掘立柱建物跡（1間四面）、それに3間二面の2・3号掘立柱建物跡が重複した状態で在り、道路と建物群はその主軸方向や配置に極めて強い共通性が認められた。これらの掘立柱建物跡からは遺物が出土していないものの、逆にそのことが中近世や古代に属する可能性が低いという根拠になると判断し、1号道路跡と同時期に存在するものと解釈した。建物の規模、構造から1号掘立柱建物跡を在地領主（本稿では末端に近いの支配者層という位置付けで用いている）の居所、4号掘立柱建物跡が御堂、2・3号掘立柱建物跡が御堂と関連するような施設と推察された。因みに奥州市前沢区で見つかっている12世紀の掘立柱建物跡の中でも規模の大きな事例と比較しても本遺跡の1号掘立柱建物跡は全く遜色ないことが分かる。

そして遺跡北端部にあるG区では3号堅穴遺構、SX1~3（性格不明遺構）、1・2号井戸跡、14号土坑などが検出された。

性格不明遺構については大凡の形態も似ており同じ目的のために利用された施設と考えられる。しかしながらその目的については解明に至らず大きな課題として残っている。ここでは可能な力を2つ挙げておく。一つは粘土の採掘坑の可能性である。遺構のあるG区の基盤層には少し掘り下げるごとに粘土層があること、本遺跡と同じ古城地区にある明後沢遺跡では粘土採掘坑跡（平安時代）が見つかっていること、「仙臺領礦物調」（宮城県史32）には本遺跡の西隣にあたる中畠村には漚戸土取り場（近世）があったことを記している。このことからこの地域は粘土の产地であったことが分かる。ところがSX1~3の形態を見ると、粘土採掘坑にしては壁・底面が平滑で粘土を掘るために壁や床面が抉れたりはしていない点と、溝が付く点で明後沢遺跡の例とは遺構の雰囲気が異なる。

もう一つの可能性は農業用の溜池である。類例は泉町の衣闌遺跡、奥州市江刺区の反町遺跡などにある。



第80図 類例（前沢区）

衣闌遺跡の池は本遺跡の遺構と同時期であるが、規模はかなり大きい。反町遺跡の池は溝が付く形態や規模が似ているが時期が異なる。また秋田県にかほ市横枕遺跡でも溝の付く水溜土坑が検索されておりよく似ている。遺構の周囲は鍛冶作業場であったという。G区では水田・畠跡は見つかっていないため、農地の存在が不確実なこと、近くに明後沢川（かつての松の木沢川）があるため水の便は良いく池はそれほど必要ではなかったのではと推測されることなどが問題点としてあげられる。

上記の可能性の他にも広く考古事例・民俗例を精査し遺構の内容解明に努めたい。

こうした各種遺構の分布から、本遺跡の中央部南には道路に沿って在地領主の居所と御堂等の建物群のある空間があり、とくにその北側に12世紀の集落が展開していると推察される。その集落の北端部に採掘坑（或いは溜池）といった居住域とは別の施設が造られていたことが明らかとなった。

1号道路跡はどこへ通る道路であったのか。周辺の遺跡調査で道路の継ぎや関連する施設が確認されているわけではないので想定による話になるが、1号道路跡を東南東方向へ進むと道上遺跡を通って北上川へ達する。道上遺跡は密教法具の一つである六器（12世紀）が出土している遺跡である。この六器は旅籠具で携帯用のものであるという。北上川に達したところには川岸場I・II遺跡（前沢区白山地区）がある。この遺跡は近世北上川舟運の川湊（六日入河岸）のあった場所である。ここに12世紀段階にも川湊があったのではないかだろうか。川岸場II遺跡では発掘調査を行われているが、12世紀の遺構・遺物は見つかっていない。完全に壊されてしまったか、少し位置がずれて在るのではないかと解釈したい。遺跡のある前沢区の古城地区や白山地区には12世紀の遺跡が数多く存在することが明らかになっている。その多くは集落と見られるが、遺跡数の多さを説明する上で川湊の存在は無視できないものといえ、川岸場I・II遺跡はその有力な候補地である。

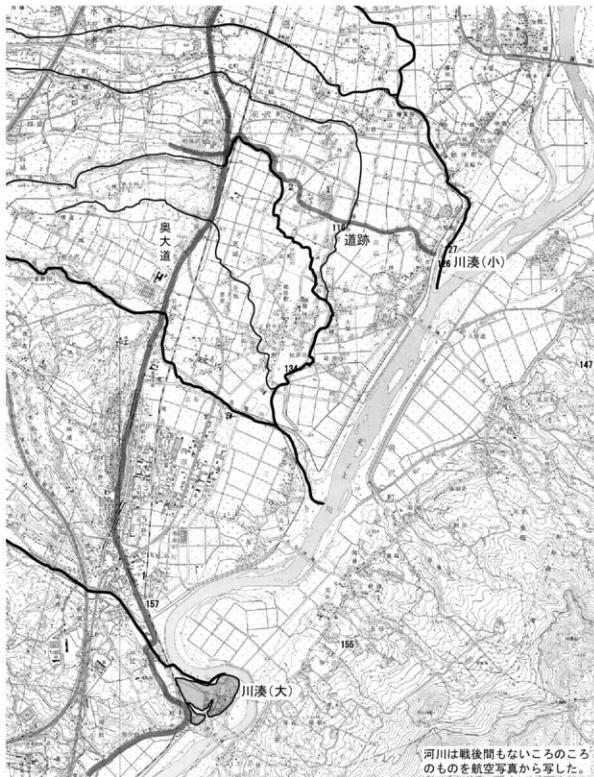
一方、1号道路跡を西北西へ向かえば1.3km程で現在の東北本線と国道4号に直交するようにぶつかる。この付近は鉄道と国道が近接して走っており近世には奥州街道があった。とすれば12世紀にも奥大道がこの通りを走っていたと考えるのが最も素直であろう。現在の場所でいうと古城字川原下地区のところで奥大道と交差していたと思われる。この交差点から更に西側は一段高い段丘面になるのだが、丁度その川原下地区からだと明後沢川沿いに崖が緩やかになっていて登り易くなっている。この明後沢川伝いに一段高い面へ上ったところに明後沢遺跡群がある。この遺跡群からは12世紀の遺構・遺物が他の周辺の遺跡よりもまとまった量で出土している。加えて規模の大きな掘立柱建物跡も見つかっており、この地域に勢力を持つ有力者（八反町遺跡の在地領主より上位）の居た可能性が高いと考えられる。

これらのことから1号道路跡は奥大道の枝道であり、この地域の有力者の居所・集落・川湊を結んでいたと想定された。

奥州市前沢区では12世紀の遺跡調査が多く、その成果が蓄積されつつある。その内容について時期をみて整理していくことが必要になろう。

中世

16世紀前半の瀬戸内美濃産天目碗が遺跡の北端部のG区で出土している。今回の調査で中世の遺構は検出されなかったものの遺跡内には13-16世紀の遺構があるとを考えたほうが良い。調査成果から12世紀の集落は主に遺跡中央から北側にかけて存在していたといえる。恐らくは平泉藤原氏滅亡とともにこの集落が廃され、別の場所に新たに営まれるようになったのであろう。具体的には現在の集落域とはほど遠なるような場所に集落が形成されていたのではないかだろうか。よって今回の調査区域外にあたる場所についても中世の遺構・遺物が発見される可能性があることを指摘しておく。そしてこれが本遺跡西隣にある16世紀の城館・中畠城跡の領内に相当する集落の一つと位置付けられるのではないだ



第81図 12世紀の奥州市前沢区古城

ろうか。最後にB・C区の東隣にある墓地内には五輪塔らしき石造物があること、遺跡北の字古館地区には板碑1基が確認されていることを付け加えておきたい。

2 中畠城跡

本遺跡はJR東日本線前沢駅の北北東約3kmに位置している。水沢段丘高位面にある小規模な微高地を複数の堀で囲んで城域をしている。調査区の現況は標高32~34mの水田であった。

検出された遺構・遺物の数量や所属時期などは以下の通りである。ここでは時代ごとに調査成果を整理し、この地域の中どのように位置づけられるかを考えたい。

	旧石器時代	9~10世紀	12世紀	16世紀	不明
堀跡				4	
掘立柱建物跡		1			
土坑	3			3	
カマド状遺構			1		
溝跡	6			7	
柱穴群		1	2	1	
旧石器集中区	1				
沢跡		1			

遺物は中世の陶磁器が小コンテナ0.1箱、木製品が大コンテナ1箱、旧石器3点他が出土している。

旧石器時代

遺跡北端部にあたるC区において旧石器の集中区1箇所を確認した。限られた調査区のため集中区の一部を調査したに過ぎず、その広がりは6m四方とみられる。遺跡中央の小高くなっている場所を中心とする生活の場とし、その周辺に石器類が散在していると解釈した。よって調査区外には他にも石器集中区が分布している可能性が高いといえるし、何よりも遺跡中央の小高くなっている場所（中世城館中畠城の一曲輪）には濃密に分布していると考えたほうがよからう。石器類は出土した地層、各石器の特徴などから本遺跡の南にある水戸遺跡の石器群と同じでAT降下前後までの後期旧石器時代前半期とみられる。

平安時代（9~10世紀）

遺跡北端部にある3号土坑、1・5・8・9号溝跡、遺跡東側の沢跡などがこの時期にあたる。遺物もこれらの遺構の埋土及びその近くから出土する場合が多かった。直線距離にして約90mも離れてるので本稿では別々の遺構として扱ったが、8号溝跡と沢跡は形態や規模、遺物出土の状況などが似ており、同じ流路であった可能性が高い。土師器壺には底部再調整が施されるものがあること、沢跡に堆積した十和田a火山灰よりやや下位から出土していることから9世紀前半であろう。5号溝跡から出土した須恵器にも底部再調整が見られるので9世紀前半となる。そうなるとこれらの遺構（沢跡）の近くに集落を想定しなければならないだろう。今回の調査区は狭かったので堅穴住居跡などはなかったが、あまり離れた場所から流れてきたような土師器・須恵器ではなかったので近い場所に集落があったとみた。具体的には本遺跡の中央から北端まで、さらに8号溝跡の上流にあたる本遺跡を超えて北西方向に分布していると思われる。

平安時代末（12世紀）

遺跡北東部にあたるC区（東から）の柱穴群近くで12世紀後半の常滑産陶器片が出土している。このことから遺跡北東部には平泉藤原氏時代の集落のあったことが分かった。その規模や性格については不明といわざるを得ないが、東隣の八反町遺跡もこの時代の遺跡であるので一体のものとして捉え

てもよいかもしれない。広い平野部に家屋が散居する風景はこの頃にはすでにできていたのであろう。八反町遺跡で検出された道路跡も本遺跡の何處かを通っていたと想定され、それは遺構遺物の見られたC区東側の近くにあつたのかもしれない。

中世後半（16世紀）

本遺跡の主体となる時期である。

中畠城は「風土記御用書出」による櫻山館（御城主櫻山平次郎）と記載される城館である。また「仙台領古城書上」には城主櫻山彦三郎と記されている。このことから、この時期に伊沢郡を実質的に領していた柏山（櫻山）氏の一旗が居城としていた可能性が高いとされてきた。

<調査内容>

調査区は主に城館を取り囲む北側の外堀と内堀の北側から西側の一部にあたる。検出された堀跡は4条である。外堀跡は「障子堀」であることが判明した。その構造は4条の細長い堀を隙間なく連ね、その1条1条に間隔や深さの不規則な障壁を設けるといったものであった。障壁は粘土などを後から貼って造ったのではなく、地山をそのまま掘り残して利用したものである。そしてその障壁の何箇所かには隣に水が流れるように小さな導水溝が設けられており、堀が水を湛えていたことも判明した。

内堀も障壁を有するが、外堀と少し構造が異なる。全体を調査することができなかつたのはつきりとは言えないが、北側の内堀は外堀のような複雑な構造ではなく、障壁が一列に連続するだけの所謂「鉄堀」であったようだ。加えて西側の内堀では障壁がみられなかつたことから、内堀については北側では障壁を設けているものの途中からは障壁を持たない堀へと変わるものである。このことから、中畠城跡では外堀も内堀も北側にだけ「障子堀」「鉄堀」を取り入れていた可能性があることを指摘しておきたい。

出土遺物から16世紀に構築されたと言え、県内では金ヶ崎町にある柏山館跡に次ぐ2例目で極めて珍しい事例である。

<伊澤郡古城村大字古城字水上西繪圖>（第44図）

この地域が古城村となったのは明治18年以降であることから、この原図も明治18年よりは新しいものとなる。奥州市教育委員会よりコピーを頂いたため原本の大きさは分からぬが、入手した全部をトレースして掲載した。地図の中には地番の記載があるところと、地番はあるが地目の記載のないところがあった。地目も文字で「田・畠・宅地」とあるものと、「道路・水路」など色分けされているもので構成されているようだが、黒白コピーであったため分からぬところも多くありトレースの際には地目を網かけに変えて、地番は削愛した。

中畠城跡はこの絵図の南端部に位置している。南は字水戸、東は字南八反町、西は字四戸橋と接する場所である。字四戸橋の文字のすぐ隣に河川が描かれている。これが田沼川後沢川であり北から南に蛇行しつつ流れていった（今は改修されこの場を流れていない）。その東隣が中畠城跡になる。字水戸西・字八反町という文字のすぐ近くに書かれた道路は現在も道路として存在している。

田の部分を堀、畠の部分を曲輪とみれば、中畠城の範張りがほぼ把握できる。南側の宅地と畠で構成される場所、これが三曲輪である。また北側の宅地と畠で構成される場所が二曲輪である。この二曲輪と三曲輪に挟まれ、細長い田で囲まれた部分が一曲輪（主郭）である。また二曲輪の北側にも田で台形状に囲まれた畠がある。この部分は馬出しと推測される。次に各曲輪の中で注視される部分を挙げておく。

三曲輪 宅地とある部分は現在も宅地であるが、畠部分の多くは水田に変わった。そのためか堀の形状を留めていた田の畔壁も失われている。絵図には田が三曲輪を全周せずに北西方向が開いて描か

れていることから、三曲輪は一曲輪の南部から南西部を占めていることが読み取れる。

二曲輪 東側の宅地とある部分は現在も宅地でその隣の2枚の畠も現在は宅地となっている。旧明後沢川のある西側の畠は現在水田に変わったものの形状に大きな変化は認められない。一曲輪の北部から北西部を取り囲む形をして三曲輪と接するわけだが、その境界については絵図の中ではよく分かれない。

一曲輪 二曲輪と三曲輪に囲まれてある。細長い田が一曲輪を全て囲んでいる。西側に墓があるが、現在も同じ場所に残っており、そこは土壘跡である。一曲輪で注目される部分は二か所の出入り口施設とみられる地割である。一曲輪の東北端部に細長い田と細長い畠と道路とが集まつた部分がある。現在この地割は失われているが、道路だけは同じ場所に残っている。もう一つは南東端部にある畠に細長い田が食い込んでいるような地割がみられるところである。これも今は失われているが、同じ場所に道路が設けられている。

馬出し 二曲輪の北側に台形状をした畠の地割があり、その周りを細長い田が囲んでいる。現況は全て田となってしまい完全にこの地割は失われていた。のことから他の曲輪よりも低い地形に構築されていたことが分かる。東側の畠に田が入り込んでいるような地割をしている。この部分も出入口施設であった可能性があるとみていく。

その他 自信がないのだが、馬出しから北側についても中畠城跡の網張であったかもしれない。墓地と畠が南北に接しているところがある。この西側には細長い田が旧明後沢川に向かって並んで描かれている。これが外堀であったとは考えられないであろうか。もしそうだすると馬出しについても別の解釈が必要となるかもしれない。もう一つは三曲輪のさらに南に曲輪を想定できないものかということである。絵図は無いのだが、西側を旧明後沢川、東側を現道に挟まれた部分は大凡三曲輪と同じスペースがある。何にしても現段階では他の曲輪程その地割が明瞭なものではないので本稿ではその可能性を指摘するに留めたい。

＜地名・伝承＞

当地は明治18年以前には中畠村であった。「中畠」を地元では「なかばた」と発音するという。中畠城跡の中に現在居住されている方の屋号は「館」というそうだが、ご主人は中畠城の歴史について全く伝承されていないとのことだった。聞き取りから得られたことは、水田が泥田で深かった部分があったこと（その場所から外堀を検出）、二曲輪にあたる畠からは古い炭化米が出てきたこと、アイオン・カスリン台風の時は周りの水田まで冠水したことなどである。

＜葛西・柏山氏と中畠城の城主＞

発掘調査で出土した遺物は16世紀のもので、15世紀や17世紀の遺物は無い。よって城館の機能していた期間は16世紀代に限られる。

中畠城跡の城主については前述したとおり櫻山彦三郎や櫻山平次郎といった記録がある。何れにせよ伊澤郡を実質的に領していた櫻山（柏山）氏の一族が居城としている可能性が高いといえる。櫻山（以下は柏山と記す）氏は葛西氏の有力な家臣で独立領主的な存在であったともいわれている。葛西氏の祖は関東御家人で奥州総奉行を務めた葛西清重である。柏山氏の祖については不明な部分が多く諸説があるが、関東の御家人で平姓千葉氏ではないかとするものが有力である。両氏ともに関東地方に所縁のある一族であることは確かといえよう。

その葛西・柏山氏も15・16世紀になると隣国勢力との争いや一族・臣属の内乱などが起こり衰退していく。その概要については前述したとおりである（8頁）。柏山氏は16世紀後半になると家督争いがもとで内紛状態になっていたと云われている。その中に、柏山伊勢守明吉の三男小山九郎明長（遺

跡地図98）、四男折居宮内久（遺跡地図85）兄弟が、柏山氏の重臣であった前沢城主三田氏（遺跡地図142）を謀反の疑いで攻め滅ぼしたという記録がある。中畠城の城主には前述のように柏山一族の名が伝えられている。その一方で柏山氏の家臣である三田氏に関しては前沢村の他に中畠村他も領していたと伝えられており、このままではそれぞれの史料の内容が符合しないことになてしまう。現時点では複数の解釈が可能と思われる中で、本稿では発掘調査で見つかった「障子堀」が本県に於いては柏山氏の城館でのみ検出されていることから、中畠城の城主についても柏山氏の一族であったと考えたい。

重臣三田氏の滅亡に関する史料の中に中畠城跡は登場していないのだが、位置的には非常に近い位置にあるため無縁であったとは考えにくい。どちらの側に立っていたのかまでは分からぬが、この争いの渦中にあたったと考えたほうがよかろう。そして16世紀末には城館としては使われなくなったとするのが最も妥当といえる。

＜障子堀の系譜＞

今回の発掘調査で最大の成果といえば「障子堀」が見つかったことであろう。そしてその構築年代は出土した陶器の年代観から16世紀に位置付けられる。堀からは15世紀代あるいは17世紀代の国産陶器は出土しなかった。

岩手県に於ける「障子堀」の事例は、金ヶ崎町にある柏山船跡（大林城）のみで、中畠城跡の堀跡を合わせても僅かに2例しか確認されていない。柏山船（報告書名は「館山遺跡」）での例は障壁が一列に連続するだけの所で「敵堀」であつた。

本遺跡のある奥州市や金ヶ崎町をはじめとする県南地域、宮城県北部が他の地域に比べて中世城館の調査事例が少ないのであれば、そうではない。発掘件数は他の地域と同じくらいはあるものの「障子堀」については筆者の知る限り事例は少ない。

障子堀という築城技術は鎌倉大國の後北条氏との関連性が強いとされてきたが、その分布は領域外にも広がっていることなどから、今は時期的にも空間的にも後北条氏と直接結びつけずに捉えようとする動きが大勢を占めるようである。それでも事例の多くが関東地方に密に有ることには変わりなく、関東で成立発展しそれが各地に広がったと考えて大過ないであろう。

その障子堀が如何にして中畠城跡の際に採り入れられることになったのか、限られた範囲の発掘調査で城館の全容を明らかにしたは決して言えない中、この間に之に答える手掛かりは少ない。本稿ではそうした中で二つの仮説を検証してみたい。一つは障子堀という技術が関東で発展し分布を広げる中、福島から宮城、宮城から岩手へと徐々に伝わってきたという解釈である。二つ目は関東から直接入材を連れて來ること、或いはこちら側の者が関東へ行き障子堀についての知識を身につけてまた戻って來るという考え方である。

第一の仮説についてであるが、前述したように本県における類例は1件しかない状況である。宮城県でもその事例は多くはなく構築年代のよく分からぬものもある。また、仙台市にある北目城跡では複雑な障壁を配置する障子堀が検出されているが、伊達政宗が仙台城を築くまで居城としていた城館と伝えられているため、中畠城跡よりも構築年代は新しいであろう。このように障子堀が各地域へ広がっていくと想定した場合に宮城県から岩手県へ、という伝わり方を具体的に示すものは現時点では殆どないと思われる。

第二の仮説についてであるが、関東から直接入材を連れて來ること、或いはこちら側の者が関東へ行き障子堀についての知識を身につけてまた戻って來るといったことは可能なのであろうか。これまでのところ本県での2例は何れも葛西氏の重臣であった柏山氏の居城と柏山氏の一族の城館から見つ